水道産業新聞

水道産業新聞社
大阪本社　電話(06)6373－3603
FAX(06)6373－3633
〒531-0072 大阪市北区豊崎2－7－9
東京本社　電話(03)5251－0303
FAX(03)5251－3802
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-19-10

管路保証をめざす…
ダクタイル鉄管用ゴム輪協会
東京事務所　〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-19（日本水道会館）
日本ダクタイル鉄管協会内　☎(03)3264-6655(代)
大阪事務所　〒542-0081 大阪市中央区南船場4-12-12（ニッセイ心斎橋ウエスト）
日本ダクタイル鉄管協会内　☎(06)6245-0401～2

おかげさまで創刊60周年

本号の内容

香川県広域水道事業体の更新計画など了承　2 地方・産業
水道産業新聞創刊60周年　3～20 特集
【グラビア】新水道ビジョン㉜

老朽水道管の着実な更新を

事業体別の更新率・経年化率を公表

厚労省

老朽化した水道管路の更新は、いま水道界が直面する大テーマのひとつだ。水道統計のデータでは、管路経年化率は平成25年度で10・5%。年々上昇傾向にあり、年間2万5000件の管路事故も報告される。一方、管路更新率は0・79%（平成25年度）で、近年は横ばいの状況。高度経済成長期に整備された施設の更新が進まないため、経年化率は今後さらに上昇するとみられている。そうした中、厚生労働省水道課は、大臣認可の水道事業体ごとの管路経年化率、管路更新率を公表した。特に、経年化率が全国平均を超え、かつ更新率が全国平均を下回る事業体には一覧表中に「＊」マークを記した。危機意識を持たせ、対策を促す狙いだ。着実な取り組みが期待される。

事業体ごとの管路の経年化率と更新率を一覧にした資料は、20日に開催した技術管理者研修で披露された。資料には、基幹管路における鋳鉄管や石綿セメント管、コンクリート管などの「脆弱管」の割合のデータも記してある。研修ではこれらデータも示しながら、管路更新や耐震化計画の策定の必要性などが担当官から呼びかけられた。この日は、住民に断水体験をさせる給水訓練を行った事例などの報告もあり、全国から集まった水道技術管理者を前に宮崎正信・水道課長は「自分たちの行動につなげていただきたい」と鼓舞していた。

経年化率が全国平均を超え更新率が全国平均を下回り「＊」マークの事業体は次の通り。

【上水道事業】
▽函館市▽岩見沢市▽室蘭市▽釧路市▽旭川市▽弘前市▽青森市▽気仙沼市▽岩沼市▽いわき市▽茨城県南水道企業団▽那珂市▽桐生市▽みどり市▽春日部市▽本庄市▽ふじみ野市▽蓮田市▽我孫子市▽君津市▽長生郡市広域市町村圏組合▽小田原市▽神奈川県▽三浦市▽秦野市▽長岡市▽三条市▽新発田市▽射水市▽金沢市▽福井市▽岐阜市▽伊東市▽浜松市▽静岡市▽沼津市▽島田市▽蒲郡市▽津島市▽常滑市▽知多市▽尾張旭市▽岩倉市▽桑名市▽津市▽四日市市▽名張市▽栗東市▽寝屋川市▽大東市▽東大阪市▽羽曳野市▽和泉市▽高石市▽岸和田市▽泉佐野市▽阪南市▽神戸市（市街地）▽高砂市▽姫路市▽赤穂市（南部）▽宝塚市▽川西市▽三木市▽奈良市▽天理市▽香芝市▽和歌山市▽出雲市▽津山市▽広島市▽三原市▽下関市▽岩国市▽山陽小野田市▽高松市▽坂出市▽観音寺市▽飯塚市▽田川市▽大川市▽佐賀市▽唐津市▽佐世保市▽大分市▽別府市▽佐伯市▽宮崎市▽日向市▽鹿児島市

【用水供給事業】
▽桂沢水道企業団▽茨城県（鹿行）▽富山県（西部）▽静岡県（榛南）▽静岡県（遠州）▽静岡県（駿豆）▽愛知県▽京都府▽大阪広域水道企業団▽阪神水道企業団▽奈良県▽岡山県南部水道企業団▽備南水道企業団▽岡山県西南水道企業団▽広島県（広島）▽広島県（広島西部）▽広島県（沼田川）▽香川県▽沖縄県

切れ目ないトイレ機能の確保へ

マンホールトイレ整備　ガイドライン案を公表

国交省

国土交通省下水道部は19日、東京・青海の日本科学未来館で開いた「災害に備えるマンホールトイレシンポジウム」で、「マンホールトイレ整備・運用のためのガイドライン（案）」を発表した。ガイドラインは、マンホールトイレの有用性や整備の基本的な考え方、被災者が使いたいと思う快適なマンホールトイレの整備のあり方を示すもの。普及を推進し、被災時でも快適で衛生的な生活環境の確保に下水道が貢献していくことを目的に策定する。今後、パブリックコメントを募集し意見を反映させた上で、東日本大震災が発生した3月11日までにガイドラインを公表する予定だ。

マンホールトイレは、水道に依存しない自己完結システム。避難所の防災倉庫などに保管されていることから避難所開設後に組み立てて迅速にトイレ機能を確保することができ、携帯トイレや簡易トイレを合わせて活用することで、切れ目のないトイレ機能を確保することができるというメリットがある。全国のマンホールトイレの設置基数は約2万基であり、人口7000人に1基と量、質ともに不足している。ガイドライン策定を契機に〝日常感覚で誰もが使いたいと思う〟マンホールトイレの整備推進につなげたい考えだ。

ガイドライン案は、ガイドライン全体の目的・構成を示した総論、災害時のトイレの確保に関する問題と対策の考え方、マンホールトイレ整備・運用の考え方の3章立てで、資料編としてマンホールトイレシステムの導入例や目黒星美学園中学高等学校の生徒が考えた快適なマンホールトイレの環境づくり、トイレを衛生的に保つ方法を記載している。

整備・運用に関しては、マンホールトイレの形式（本管直結型、流下型、貯留型）とそれぞれの特徴・メリットを説明しているほか、マンホールトイレの設置場所、使用想定人数のまとめ方を紹介。1基当たりの使用想定人数は、50～100人を目安に整備を検討することが望ましいとした。これは、阪神・淡路大震災で75人にトイレ1基を設置した時点で苦情がほとんどなくなったことなどを踏まえて必要数を示している。また、便器の洗浄やし尿の貯留・流下のために確保すべき水源と注意事項を記載した。

さらに住民自身がマンホールトイレの組み立てから使用・維持管理までを担えるよう、使用可否判断の訓練や組み立て訓練、設備の劣化確認などを年1回以上行うよう訴えている。また、整備・運用の要点を7カ条にまとめ、快適なトイレ環境づくりに必要な配慮事項を「整備計画時」「避難所開設時」「避難上開設後運用時」の3段階にわけてチェックリストとして整理。チェックリストはコピーするだけですぐに使えるように工夫するように促している。

本紙創刊60周年記念特集号

エネルギー利用促進の冊子作成

国交省

国土交通省下水道部は、冊子「下水道は『宝の山！』」＝写真＝を作成した。下水汚泥は量・質ともに安定し、収集の必要がなく、エネルギーの需要地である都市部で発生する〝都市型バイオマス〟としてPRしていきたい考えだ。自治体などへ配布し、市民の理解促進などに活用してもらう。冊子には、下水汚泥のバイオガス化や水素製造、他バイオマスの受け入れなど、下水道のエネルギー利用の実施事例を記載。写真や図などを活用し、分かりやすく事例を紹介している。

平成26年に閣議決定された「第4次エネルギー基本計画」では、下水汚泥の利用や排熱回収、下水熱などの導入拡大、バイオマスの再生可能エネルギーを活用して水素を製造することなどを推進している。また、27年9月に閣議決定された「第4次社会資本整備重点計画」で、下水汚泥エネルギー化率を指標に設定。25年度時点で約15%にとどまっている下水汚泥エネルギー率を、32年度に約30%まで上昇させることを目標としている。

流域水循環で議論

下水文化研究会

第13回研究発表会開く

NPO日本下水文化研究会（代表＝酒井彰・流通科学大学教授）は21日、東京・市ヶ谷の水道会館で『第13回下水文化研究発表会』を開催した。

会の冒頭あいさつに立った酒井代表は、「水循環基本法は制定されたが、法の理念の実現に向けて会としても問題提起をしている」と語り、今回のシンポジウム開催趣旨を説明した。続いて、シンポジウム座長を務める稲場紀久雄・大阪経済大学名誉教授の提案により、シンポジウム開会に先立って、去る8月に亡くなった元厚生省水道環境部長の小林康彦氏、9月に亡くなった元建設省下水道部長の中本至氏への哀悼の意を示し、黙祷が行われた。

各パネリストが熱心に持論を展開したシンポジウム

シンポジウムのテーマは『これからの流域水循環制度～水循環基本法を踏まえて』で、▽坂本弘道・水団連顧問▽斎藤博康・日水協特別会員▽椿本祐弘・元大和総研主席研究員▽酒井日本下水文化研究会代表▽渡辺勝久・同研究会理事▽辻谷貴文・全水道書記次長―がパネリストを務めた。

まず、稲場座長が「上下水道制度改革の全体像の素描」と題して、全パネリストの意見の全体像を示した。「水道行政一元化と流域ベースの広域的管理の上に〝新しい公営〟体制」の必要性を指摘した。続いて、各パネリストが発言、「独立した強力な規制機関を設置し消費者利益の保護を」（齋藤氏）、「まずは公セクター内の改革が先行されるべき」（椿本氏）、「水循環は広義・狭義それぞれの意味で区分した上で議論や政策を進めるべき」（渡辺氏）、「下水道事業は基本法に準拠した新しい公営の制度設計に向うべき」（稲場氏）、「水行政改革は地道な努力に根差した新たな活動が必要」（坂本氏）、「流域ベースでの水循環管理は都市では〝再生〟、森林・農地では〝保全〟が中心となると思われ、個別論議も必要」（酒井氏）、「弱者や全ての市民が得ることのできる〝生命（いのち）の水〟を守るためにも公営原則を貫く必要がある」（辻谷氏）―といった問題提起がなされた。

シンポ終了後の研究発表会は、2つのセッションに分かれて合計7編の発表が行われたほか、3編の誌上発表の内容も紹介された。

発表会終了後には表彰式が行われ、バルトン賞は故小林康彦氏に感謝状が贈られ、久保赳賞は椿本氏が受賞（佳作）した。

ポスター配布過去最多

教育機関などで掲示

健康のため水を飲もう推進委員会

第18回「健康のため水を飲もう」推進委員会（委員長＝武藤芳照・日本体育大学日体大総合研究所所長）が10日、日本水道会館で開かれた。平成27年度上半期の活動報告が行われ、下半期の事業企画について話し合われた。

27年度のポスター配布枚数は2万6188枚、チラシは1万7260枚と、どちらも過去最多を記録。ローカルラジオでの広報活動や、消防署との協働による水分補給の呼びかけなども各地で行われた。協賛団体に行ったアンケートの結果によると、配布したポスターの約半数は学校などの教育機関に掲示され、次に役所や公民館に掲示された枚数が多かった。ポスターの掲示は、内容にあった時期に貼る、施設内の中でも目に入りやすい場所で掲示するなど工夫がなされた。そのほか、「ポスター以外の広報活動をしたほうがいい」「水道事業体以外の新規ルートの開拓が必要」といった指摘もあった。

武藤委員長

来年度のポスターについても各団体の意見を参考に話し合われた。武藤委員長は「高齢者向けデザインの要望が強い。介護施設や地域で健康を意識したイベントが多いところに着目すべき。ポスターの掲示場所が教育機関に多いことから、子供により解りやすいデザインのポスターの作成が必要。東京オリンピックに向けてスポーツ向けのデザインも必要だ」と方針を示した。

なお、この日は東京都水道局から「東京水」の提供があり、推進運動の趣旨を確認しながら、委員はこまめに水分をとっていた。

◆連絡調整会議が初会合　2018年に東京で開催される第11回IWA世界会議・展示会に向け、開催国委員会のもとに設置された東京都水道局、同下水道局、日水協、下水協、日本水環境学会の5団体による連絡調整会議（リーダー＝古米弘明・東京大学大学院教授／日本水環境学会会長）の初会合が7日、日水協で開かれた。開催に向け実務内容を検討する企画、広報、協賛推進の各専門部会から当面の活動内容が報告された。

水音

還暦を迎えた思いも人それぞれだろうが、これまでの豊富な経験を踏まえて後進に「伝える」ことを意識される方も多いように思われる。それが自身の関わってきた営みの「持続」につながるがゆえに▼一方、施設や組織はそれ自体が「持続」せねばならぬことから意味合いも変わってくる▼今年水道創設60年の節目を迎えた小千谷市は同じく還暦を迎えた浄水場の抜本的更新にこの節目の年から着手している。還暦がチャレンジの年になったわけだ▼それでは新聞はどうか？まず、これまで伝え続けてきた歴史をしっかり情報としてストックすること。そして、今後も伝え続けることに尽きる▼そのためにはこの世界で然るべき役割を与えていただいている感謝の気持ちを決して忘れずに取材相手との深い信頼関係の維持に努めること。これこそが我々の「持続」の礎だと思っている。（15・11・26）

電業社の
上下水道用ポンプ・ロートバルブ・曝気ブロワ
廃水処理装置・除塵機・ゲート設備
株式会社 電業社機械製作所
本社：〒143-8558 東京都大田区大森北1－5－1
TEL.03-3298-5115　FAX.03-3298-5149
http://www.dmw.co.jp

仮設配管レンタルにリユーズシステム
KOMEIの仮設配管材料は何度でも再利用が可能
株式会社 光明製作所
http://www.komei-ss.co.jp

NIHON GENRYO
小集落の「新しい水道のかたち」
運べる浄水場
「モバイルシフォンタンク」
緊急災害対応型　高濁度に強い　ろ過材交換不要
日本原料株式会社　www.genryo.co.jp
〒210-0005 神奈川県川崎市川崎区東田町1-2
0120-440-554

The next quality.The next performance.
GENEX®
クボタダクタイル鉄管
For Earth, For Life
Kubota
離 DkN
伸び縮みする継手でありながら、離脱防止力は3DkN。これは、呼び径100ミリでも乗用車を30台ぶら下げても抜けない力です。
伸 %
それぞれの継手は前後に1％伸びて縮む、鎖でつながったような構造だからこそ、更に広い範囲でより大きな伸縮にも対応可能なのです。
曲°
施工時に1つの継手で曲がる角度は4度、それが地盤の変化に応じて、それぞれが鎖のように8度も曲がる構造なのです。
株式会社クボタ　パイプシステム事業部　www.kubota.co.jp
本社 〒556-8601大阪市浪速区敷津東1丁目2番47号 (06)-6648-2927　東京本社 〒104-8307 東京都中央区京橋2丁目1番3号 (03)-3245-3161　北海道支社 (011)-214-3141　東北支社 (022)-267-8922　中部支社 (052)-564-5151　中四国支社(082)-546-0464　九州支社 (092)-473-2431　四国営業所(087)-836-3923

30年度から企業団事業開始へ

香川県広域水道事業設立準備協　更新計画や財政方針など了承

第2回香川県広域水道事業体設立準備協議会（会長＝浜田恵造・同県知事）が19日、同県庁内で開催された。香川県における広域的な水道事業などを経営する事業体（広域水道事業体）設立の連絡調整、広域的水道事業計画の共同作成を図るもので、今年5月の初開催以来約半年ぶり。今回の議題は▽経年施設更新計画策定の基本的な考え方▽広域水道施設整備計画概要図等（案）▽財政運営の基本方針等（案）▽平成28年度予算要求（案）▽広域化の主要スケジュール（案）―で、満場一致で全て了承された。

香川県と県内6市8町の首長らが出席

浜田会長（香川県知事）

協議会には会長や副会長（高松市長）を含め、県と6市8町の首長らが出席。浜田会長が「広域水道事業体の設立へ合意形成を」とあいさつ後、事務局が議題の内容などを説明した。

経年施設更新計画では、平成28～55年度までに更新が必要、あるいは広域化に必要な施設事業費を算出。対象施設は浄水施設・配水池・ポンプ場・管路で、更新基準を設定した。取水施設は計上しないとしている。

対象施設の更新事業費は「水道事業の再構築に関する施設更新費用算定の手引き」（平成23年12月、厚生労働省）で算出。配水池はFRP（繊維強化プラスチック）製をステンレス製で更新し、ポンプ場は供用開始年度が不明な場合、香川県水道用水供給事業の創設期に近い昭和50年と仮定する。

管路の更新材質は耐震継手のダクタイル鉄管とし、施工条件は車道・昼間・全口径で、供用開始年度が不明な場合、残存耐用年数が無いものとする。広域施設整備計画と経年施設更新計画は平成28年3月に策定し、更新計画の事業期間は平成30～55年度で、5年ごとで需要を平準化する。

施設整備事業費の負担区分では、広域水道事業体を5ブロックに分け、全事業費を全事業体とブロック別の有収水量で、2分の1ずつに按分。財政運営では各年損益を料金収入の10％以上、内部留保金を料金収入の50％以上、企業債残高を料金収入の3・5倍以内などを目標とする。一般会計からの繰出金は、水道料金の著しい値上げ（平均10％超を目途に検討）回避の必要額としている。

また、広域水道事業体である香川県広域水道企業団（仮称）の事業を平成30年4月に開始するため、平成28年度予算では、水道事業認可申請書作成業務やシステム統合計画策定業務を委託。企業団規約・関係条例案等の策定、水道料金の検討なども進める。

これらについて、出席した首長から「現状で不参加の2市にも情報提供を」「広域化に必要な交付金要望も活発に」「全県一体のモデルケースへ」などの意見が出された。なお、次回の協議会開催は来年2月を予定しており、来年度以降も年3回程度開催していく。

ポータブル型ピコプラカウンタ開発

リオン　水源への持ち運び可能

リオンは「ポータブル型ピコプランクトンカウンタ」の開発を進めている。同社は浄水中のピコ植物プランクトン（ピコプランクトン）を計測できる「ピコプランクトンカウンタ」を開発、水道事業体への提案を強めているが、さらに現場ニーズに合わせた測定場所への携帯ができるポータブル型を開発している。平成28年度初期に発売予定。10月21～22日に開催されたさいたま水道展に新製品開発情報をカタログなどで公開し注目を集めた。

ポータブル型には▽連続測定機能（PCとのUSBポート接続で長期データ保存可能）▽流体制御機能（送液ポンプを内蔵した自吸式でセンサ内流路の高流パージ対応）▽バッテリ駆動機能（一時的に電源供給なしで稼働）―が搭載されている。

開発は水道事業体の職員から「各種プランクトンが高濃度に存在する時がある水源や原水水質管理に気軽に持ち運べて、測定できるものがあれば、水源から浄水場内まで包括的に有効なデータがとれる」と要望を受けたことがきっかけ。そこで高さ290ミリ、幅214ミリ、奥行262ミリ、重量約6キロとコンパクト化に成功した。このサイズなら1人で容易に持ち運ぶことができる。

プランクトンが異常発生すると、浄水場の処理工程中に凝集沈殿処理の効率低下が起き、ろ過層を通過したプランクトンにより、濁度障害が生じる。このため、ろ過池の常時監視はもちろん、障害をいち早く察知するため水源に近い水質のプランクトン監視が必要とされてきている。

技術特別講習会を開催

管理協　長寿命化重視し新プログラムに

東京会場では114人が受講

日本下水道施設管理業協会は、平成27年度技術特別講習会を札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、九州の全国6会場で開催した。会員企業をはじめとする経験3年～5年の職員合計427人が受講した。昨年は「計画的維持管理」「電気」「水質」の3科目だったが、今年は、新たに設けた「機械設備の管理」と、「維持管理」「電気設備の管理」の4科目とした。機械設備については、ストックマネジメントも含めた適切な維持管理を学ぶことで、協会として長寿命化の必要性への理解を呼びかけていきたいと考えている。

東京会場は10月9日に開催し、114人が受講した。開会にあたり、あいさつした佐藤洋行・常務理事は、「9月に国が発表した26年度末の汚水処理人口普及率は89・5％で、人口5万人未満の市町村では76・7％にとどまっているという状況。本講習会は、これまでに約8600人に受講いただいている。今年は、改正下水道法の動きに合わせ、長寿命化を重視したプログラムとなっているので、活用していただきたい」と話した。

講義の内容を確認する本器は、紫外レーザを生物粒子に照射し、細胞中の「自家蛍光物質（クロロフィルα）」が発する微弱な蛍光を検出する。染色などの前処理や希釈を必要とせずに容易に持ち運び測定できるのが特徴。価格は未定だが、多くの水道事業体への普及をめざし価格を検討している。

北海道で初の技術説明会

日本ダクタイル鉄管協会北海道支部　鉄管の耐震性について講演

日本ダクタイル鉄管協会北海道支部は11日、札幌市内で平成27年度公募型技術説明会を開催し、北海道大学大学院工学研究科の松井佳彦教授、厚生労働省水道課の近藤才寛課長補佐による特別講演のほか、同協会講師による技術説明が行われた。事業体職員を中心に定員を上回る約120人が参加した。

事業体職員を中心に約120人が参加

同協会は平成27年度、全国7ブロック19会場で公募型技術説明会を開催。毎回学の分野から多彩な講師陣が登壇し、水道におけるリスク管理など幅広い先進事例が紹介される。北海道支部における初の開催に当たり、同支部支部長の相馬英敏氏が冒頭あいさつに立ち、多数の参加に感謝するとともに、「これからも必要とされる技術情報、新技術を可能な限り発信していく」などと述べた。

松井教授は「水道水質基準とリスク管理」をテーマに講演。健康リスクアセスメントと水道水質基準の策定を通じたリスク管理について、日本や海外における水質関連の事故事例や水質基準などに関する歴史を紹介しながら分かりやすく解説した。

近藤課長補佐は「水道施設の耐震化について」と題して、水道行政の現状と課題や水道施設の耐震化推進に関連するこれまでの取り組みを示すとともに、今般、東日本大震災で得られた新たな知見等を反映し改訂された「水道の耐震化計画等策定指針」を紹介した。

最後に、同協会の技術委員が「地震国日本で強靭な水道管路構築のために」と題した講演を行い、「ダクタイル鉄管の耐震性および長期耐久性」について、数多くの被災経験を踏まえた様々な検証結果を示して概説するとともに、日本ダクタイル鉄管協会の活動内容についても紹介がなされた。それぞれの講演のあとには活発な質疑応答が行われた。

ノー残業デーで労働時間短縮

東京設計事務所

東京設計事務所は「労働時間短縮」の取り組みを行っている。原則として毎週水曜日をノー残業デーとしており、毎月1回（1日）の有休休暇取得も呼びかけている。また、7月からは執行役員、管理職も対象として早朝勤務制度を試行している。「早く来て早く帰る」職場環境を作ることが目的。

同社の亀田宏社長は「この取り組みは社員を大切にすることを理念に実施した。顧客のため誠実に奉仕することは変わらないが、その前提として自己の健康と家族の幸せを考えてほしい。業務の効率化と心と体のゆとりがキーワード」と述べている。

関係団体との連携強化を

日本GM工業会　京都市内で臨時総会開く

浦上会長

日本グラウンドマンホール（GM）工業会の平成27年度臨時総会および講習会が11日、京都市内の京都ガーデンパレスで開催された。創立25周年の節目を機に、委員会組織を大幅に刷新した今年度の活動状況などを報告。GMが適切に維持管理、改築更新される市場環境を構築するため、他の関係団体とも連携を強化することなどを確認した。

冒頭、浦上紀之会長が「下水道事業予算の配分競争が激化するなか、マンホールの優先順位を上げるには、より大きな『下水道管路』の枠組みで物事を考える必要がある。水コン協や管路協などと連携を深め、最終的には更新需要の創出を目指すわけだが、個々の損得ではなく、将来を見据えた全体最適化の視点が大切」とあいさつ。

委員会報告では技術広報委員会、GM維持管理推進委員会、広報室がそれぞれ今年度の取り組み状況と今後の方針について説明した。

総会後には森谷敏夫・京都大学大学院教授が『生涯現役のおもしろ健康科学』をテーマに講演。癌や糖尿病、アルツハイマーや脳梗塞、心筋梗塞、動脈硬化などは生活習慣病とし、予防・改善するための食生活や運動習慣の見直し方法について具体的に説明した。

テストでは、6会場の平均点は10点満点中9・3点で、最高点は、名古屋会場の9・6点だった。

クボタ柿崎氏が現代の名工受賞

ジェネックスの技術確立

柿崎氏

クボタ京葉工場に勤務している柿崎守氏が2015年の現代の名工を受賞した。現代の名工は卓越した技能者の表彰制度で、厚生労働大臣が毎年1回、概ね150人を表彰している。

柿崎氏は新型耐震管のジェネックスについて、技術の確立（挿口突部形成技術、外面耐食被膜形成技術）や製品仕様の決定・コストダウンにおいて多大なる貢献をしたことが認められた。特に、これまでに培った鋳物処理技術をベースに、クロスカット試験（塗装の密着性試験）等を繰り返し、最適な量産技術の確立に成功した。

単に鋳物を処理するという技能に留まらず、注目を浴びやすい製品開発の裏側でその量産化を支える卓越した技能を有する貴重な人材であり、この人材なくしてジェネックスの製品化はなかったと言われている。

また、小管製品工程の生産革新プロジェクトメンバーとして、『後引き工程による生産システムの改革』に取り組み、生産性を200％向上させる等の結果を残した。さらに、廃棄物の少ない外面塗装方式を確立し湿式の集塵設備の導入等、廃棄物発生量の抑制に寄与した。

柿崎氏は受賞にあたり「入社以来37年間、一貫して焼鈍・処理加工および出荷塗装という後工程に携わってきました。約100年の耐久性が期待できる新製品のジェネックスは、100年先まで人間に大切な水を運び続ける訳ですから、中途半端な気持ちでは生産できないと思いますし、メーカーとして100年先のお客様を意識したいと思います」と述べるとともに、今後の抱負として「日々変化する市場に対応すべく、工場自体も日々変化していかなければ遅れをとり、市場に取り残されるという結果になりかねません。〝改善〟こそが現場を変える近道と思い、日々活動していきたいと思います。また、次の世代に技術、技能を引き継ぐのも大切な仕事の一つと思います。鋳物工場は数値化できない仕事が多く、技術、技能が継承されにくい面が多くあります。しかし、私たちも先輩から多くを学んだ様に、これからは伝える立場として多くを考え、伝えていかなければと思います。会社の財産は〝人〟です。人を育てることで工場の将来が開けるものと思います。安全で安心できる工場作りを後輩と一緒に築いていければと思います」とさらなる進歩を目指している。

表彰状を手にする柿崎氏

Waterクイズ当選者発表

本紙の第3回日本水道協会全国会議グラビアの「Waterクイズ」にご応募いただき、ありがとうございました。正解は、「サイタマシ」でした。厳正な抽選により次の方々が当選いたしました。

【1等】（賞金3万円）
▽東山輝男（神戸市）

【2等】（賞金1万円）
▽伊藤英彰（江南市）▽甲斐友也（福山市）

【3等】（賞金5000円）
▽丸山浩一（札幌市）▽朝倉敏夫（同）▽八木康年（苫小牧市）▽篠山剛（岩手県九戸村）▽菅沢照夫（仙台市）▽島津哲（木更津市）▽田沼佳世（松戸市）▽宮城航太（柏市）▽寺田翔（東京都大田区）▽富田祐子（行田市）▽遠藤潔（川崎市）▽宇佐美栄（静岡市）▽秋田篤也（瀬戸市）▽鈴木まち子（四日市市）▽小川清司（木津川市）▽津田昌宏（摂津市）▽平井瑛佳（三木市）▽芝吹康行（岡山市）▽西田勝弘（高知県四万十町）▽岡本邦博（熊本市）

敬称略

本社の一部を移転

東京都下水道サービス

東京都下水道サービスは12月1日付けで本社の一部を移転する。移転部署は施設管理部、技術部技術開発課、下水道研修センター研修企画課で、移転先は次の通り。

〒100―0004東京都千代田区大手町2―1―1大手町野村ビル11階、電話番号、FAX番号はいずれも変更なし。

新型ミニショベル発売

日立建機

日立建機は10月1日から新型ミニショベル（ZX30U―5B、ZX35U―5B、ZX40U―5B、ZX50U―5B）の4機種を発売した。新機種は従来機からのコンセプトであった使いやすさをより一層追求して、①優れた作業性・操作性②快適な居住性③容易な整備性―の3点に視点を置いて開発した。同社のミニショベルは低燃費技術に優れ、液晶モニタを採用し快適な環境を整え、車体後方からのメンテナンスを容易にできることなどが特長だ。

漏水調査なら信頼のある
全漏協
全国漏水調査協会
TEL.03-5275-3680
FAX.03-5275-4977
www.zenroukyou.jp

投込式水位計
LP009S
雷5年保証　設置から5年間、雷による故障について無償交換。万一の被雷故障も安心です。
＊当社規定の施工状態を満足している場合に限ります。
高精度0.1%　±0.1%の高精度！　設置も容易な投込式で施設の運転・監視業務を強力にサポート。
専用中継器
投込式水位計 LP009Sと組み合わせることにより現地での水位確認やゼロ／スパン調整が容易に行えます。
高い信頼性で監視業務をサポート。
S&S センサー システム アンド サービス
愛知時計電機株式会社
本　社：〒456-8691 名古屋市熱田区千年一丁目2番70号
札幌支店：TEL 011-642-9525　東京支店：TEL 03-3209-2851　大阪支店：TEL 06-6305-9054
仙台支店：TEL 022-258-1181　名古屋支店：TEL 052-661-5857　福岡支店：TEL 092-534-2050
愛知時計電機ホームページ
http://www.aichitokei.co.jp

災害対策用給水装置
台風や地震などの非常災害時、「飲料水」の確保が非常に重要となります。これらの給水装置は、簡単に安全な飲料水を作り出すことができます。
マクセス・セイフティー
ハイテクノロジーがつくるきれいな水
●膜種 限外ろ過膜（UF膜）　●除去対象 ウイルス・菌・濁質
トレスキュー
海水淡水化が可能な逆浸透膜を採用
●膜種 逆浸透膜（RO膜）　●除去対象 イオン成分（海水にも対応可能）
トレローム
ミクロの汚れや雑菌・大腸菌をキャッチ
●膜種 精密ろ過膜（MF膜）　●除去対象 菌・濁質
人と水の未来を考える
水道機工株式會社
機器事業部 営業課
〒156-0054 東京都世田谷区桜丘5-48-16　TEL. 03(3426)2135

上・下水道のPRに!!
施設見学、水の日、下水道の日、記念式典等にご利用ください。
うちわ　ボールペン　ポケットティッシュ
●啓発用品のお問い合わせ、お申し込みは
水道産業新聞社/企画出版部
http://www.suidou.co.jp　E-mail：kikaku@suidosangyo.jp
〒531-0072 大阪市北区豊崎2-7-9(豊崎いずみビル)
TEL.(06)6373-3603　FAX.(06)6373-3633

●本紙創刊60周年記念特集号

感謝の思い忘れずに「持続可能な上下水道」への貢献へ

～「60年の節目」を踏まえメディアの役割を再確認～

本紙は1955年（昭和30年）11月の創刊から数えて60年の節目を迎えた。上下水道分野をはじめとする「水」関係者に支えられながらわが国唯一の『水の総合専門紙』として、すなわち、上下水道の持続と発展に向けた情報・知恵を発信するメディアとして、今後もその役割を果たしていく本紙のスタンス・役割を念頭に記念特集を企画。今月30日に開催する本紙記念シンポジウム講師のインタビューを掲載したほか、「60年」というキーワードに「人」「組織」「施設」にスポットを当てた。さらに、本紙創刊時の話題と初代編集長の黒岩重吉氏が司会した〝伝説の座談会〟を振り返るとともに、「60年後の上下水道」を描いたバーチャル未来小説を掲載した。

基調講演スピーカー

㈱野村総合研究所社会システムコンサルティング部担当部長・上席研究員

北村 倫夫氏に聞く

―はじめに、これまで取り組んでこられた主なお仕事について振り返っていただけますか?

北村 会社では霞ヶ関や地方自体などの「行政」を一貫して顧客にしてきしました。例えば、旧国土庁の全国総合開発計画や首都機能移転にもつながった首都改造計画、あるいは地方自治体の総合計画づくりや、産業振興、文化振興、情報通信政策などの調査・提言に携わってきました。また、広い意味での街づくりに多々関わってきました。例えば、スノーリゾートとして近年海外から多くの観光客を呼び寄せている北海道倶知安町のニセコひらふ地域の観光開発調査（国）にも携わりました。ニセコでは元々都市計画のない所に外資による乱開発がなされたことで当初は大きな混乱がありましたが、その兆候を察知し警鐘を鳴らしたことで当地の観光開発の課題解決へのお手伝いができました。何も計画のない所に外資が入ってくると、例えば建物が建ってしまった後では規制もできず、コントロールが難しくなってしまいます。ただし、規制を強めるだけでは良い街づくりはできないので、既成の制度にとらわれぬ独自性のある創造的なルールづくりが求められます。建物の形態や色彩、材質などについても地域のコンセンサス形成が必要であり、これがなければ決して良い街にはできないでしょう。ニセコではその課題が顕在化する前から接することで、問題意識を早くに育むことができたのが良かったと思っています。

―自治体における広報活動とご自身とのそもそもの接点は…?

北村 自治体の広報をテーマとするようになったのは、北海道大学で教鞭を執るようになったこの10年ほどのことです。大学での講座のテーマが『自治体広報論』というもので、大学院修士の学生を演習形式で指導しています。このテーマ設定は大学からの要請に基づいたものですが、それまでは企業はともかく自治体が戦略的に広報はやってこなかったという現状認識を踏まえて講座のあり方を考えました。自治体にとっての広報とは、何をやっているのかということをどのようにしてアピールするのかということに尽きるわけで、何を誰に発信するのかという方向にシフトし、現在に至っています。「観光」という良い題材を得たことで観光振興という具体的なテーマに基づいた広報のあり方を学生たちに学んでもらう形を作ることができました。

―ホームページの出来が良くないという辛口の評価をされている自治体には上下水道事業体も含まれると思いますが、いけないホームページの特徴としてどのような点が挙げられますか?

北村 まず技術的な点では、色の使い方の問題ですね。カラフルに過ぎるのは駄目で多くても4色程度にとどめるべきです。また、落ち着いた色調であることも絶対条件で彩度の高いものは避けたいですね。そうでないと見る人が疲れてすぐにそのサイトから離れてしまいます。もう1つ、自治体のホームページで特徴的な欠点は文字が多過ぎることです。文字だけでなく写真も含めてとにかく情報過多になっています。これでは、自分のほしい情報がなかなか見つからず、情報発信という本来の役割が果たせません。少なくともトップページはできるだけシンプルなものにすべきです。実際、「誰に何を」という点で曖昧なものが多く、内容は豊富だが整理されていないものが目立ちますね。

―基調講演での論点についてはシンポジウム当日に明確にしていただくとして、最後に上下水道関係者へのメッセージを一言いただけますか?

北村 これまで水道・下水道分野との接点は少なく、仕事でも経験はないのですが、日本水道協会で2度ほど講演の機会をいただいたことがあります。『水道を説く・問う・売る・守る』というテーマで広報展開のあり方をお話しさせていただきました。その時にも強調させていただきましたが、最大のポイントは国民に対するキーメッセージは何なのか?一体何をアピールしたいのか?ということに尽きます。このことを踏まえて今後にお役に立てるお話しができればと考えています。

―シンポジウムでは、本質論から広報を深く捉える貴重な提言を伺えるものと期待しております。有難うございました。

キーメッセージは何なのか?
観光から広報のあり方研究

北村氏は札幌市をはじめとする北海道内の自治体広報に関する造詣も深い（写真は札幌市の水道記念館）

……（きたむら・みちお）1981年北海道大学経済学部卒業後、野村総合研究所入社。2007年から北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院客員教授を兼任。専門分野は政策領域（国土・地域・都市政策）、公共経営領域（行政改革、行政経営、公的広報）、事業支援領域（地域開発プロジェクト、都市再生プロジェクト、大規模施設建設構想・計画）と多様で、『電子自治体アウトソーシング実践の手引き』『ユビキタス・ネットワークと新社会システム』（いずれも共著）など著書も多数。

本紙創刊60周年記念特集発行にあたり

水道産業新聞社代表取締役 **西原 一裕**

平素より、本紙発行に際しまして、格段のご指導、ご協力を賜り、誠に有難うございます。

さて、本紙は今年11月で、1955年（昭和30年）11月の創刊から数えて60年の節目を迎えることになりました。これもひとえに上下水道分野をはじめとする関係の皆様のご支援の賜物であり、改めまして深く感謝申し上げる次第です。

改めて強調するまでもなく、現在、わが国の上下水道事業はかつてない大きな転換期を迎えております。人口減少が不可避な情勢の中、施設の更新・再構築や災害対策の充実が急務となっており、それらを着実に実践するための経営改善や技術継承・人材育成も含め、さらにはエネルギー問題をはじめとする環境対策など、上下水道事業を取り巻く課題は山積しているのが現状です。

そうした状況の下、本紙では上下水道分野を軸にしたわが国唯一無二の『水の総合専門紙』として、上下水道の持続と発展に微力ながら寄与できればと考えております。このような本紙の発行姿勢と果たすべき役割を改めて上下水道関係の皆様にご理解いただくとともに、何よりも関係する皆さまへの感謝の念を込めまして本紙編集部の総力を結集し記念特集を発行致しました。是非、ご一読いただき、厳しいご批評も含めてご指導いただければ幸いに存じます。

水道産業新聞社創立60周年記念

シンポジウム『～伝える力（広報）を考える～』開催概要

◆日　時　2015年11月30日（月）13：00～17：00
◆場　所　全国町村会館
◆スケジュール
12：00～　受付開始
13：00～　主催者挨拶　水道産業新聞社代表取締役　西原　一裕
13：20～14：20　基調講演「公営企業が実践すべき今後の戦略的広報」
講師：北村　倫夫氏
㈱野村総研社会システムコンサルティング部担当部長・上席研究員
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院客員教授
14：20～14：35　休　憩
14：35～16：55　パネルディスカッション「伝える力を考える」
■コーディネーター
長岡　裕氏　東京都市大学教授
■パネリスト
柵木　由美氏　名古屋市上下水道局参事
本間　徳雄氏　新潟市水道局広報・人材育成室主査
前田　純二氏　佐賀市上下水道局環境政策調整監
岡部　洋氏　水道耐震化推進プロジェクト水道PRパッケージ作成WGリーダー
和田　優子氏　ミス日本コンテスト事務局大会委員長
宍戸　美帆氏　岩手県矢巾町水道サポーター

17：00　閉　会

不断水インサート工法®
バイト式パイプカッター切断工法

1977年に不断水技術の粋を集めた「不断水インサート工法（バイト式パイプカッター切断工法）」を開発。この工法を用いることで既設管路に影響を与えることなく安全・確実・短時間にバルブなどを不断水で設置することが可能になりました。

コンパクトな仕上がり・入念な品質管理
高度な施工技術・広範囲な機種に対応

不断水インサート工法の特長
①通水を阻害しない　②切り屑を管路に混入させない
③赤水を発生させない　④無振動、無騒音

KEEP THE LIFE LINE, LINK THE NEXT

水道管路機器のパイオニア、不断水の
大成機工株式会社
www.taiseikiko.com
本社/大阪市北区梅田1丁目1番3
TEL.06（6344）7771（大代表）
※本広告掲載の、製品の外観・仕様は予告なく変更する場合があります。

●本紙創刊60周年記念特集号

パネルディスカッション・コーディネーター

東京都市大学教授 長岡 裕氏に聞く

魅力を見える化し共有へ

「水源」から「放流」まで意識

―はじめに、上下水道分野における広報活動とご自身との接点について伺えますか？

長岡　そもそもの取っ掛かりは、水道水の直接飲用への関心です。水道水が飲料水として住民にどれだけ飲まれているのかということについて2000年頃から調査を行っています。その背景にあるのは全国の水道事業体において高度浄水施設整備が活発化しているものの、住民にはあまり飲まれることがなく、空回りしているのではないかという疑念でした。しかし、調査を進めていく過程で水道水はしっかり飲まれなければならないという思いを強くしました。今では水道水が住民に飲まれないのなら存在意義はないとさえ思っています。そこで、私の関心は水道水が「飲まれない理由」に移っていきました。このことで飲まれるための要素を探ろうというわけです。小学校の児童や幼稚園児に水筒を持たせる現象にも注目して調査を行い、一定の成果を得ることができたと考えています。今年も子どもを持つ母親に絞った意識調査を行い、先月の水道研究発表会でもその内容をご紹介させていただきました。皆さんご存知の通り、飲み水には蛇口から直接水を飲むこと以外にも煮沸した水道水、宅配水、浄水器、ボトルウォーターと多様な選択肢があるわけですが、今回の調査では住民がこれらの中から選択するに当たってどのような情報が関わってくるのかということを探りました。例えば、浄水器メーカーによる水道水へのネガティブキャンペーンを含んだ宣伝などの影響の有無などもアンケート調査の項目に盛り込んでいます。

―下水道の広報についてはいかがでしょうか？

長岡　私は下水道そのものを研究対象にはしていませんが、水道の広報との関わりから縁あって下水道分野の広報にも触れる機会をいただけたことは大変有難く、GKPとの関わりを中心に良いとは大変有難く、GKPとの関わりを中心に良い刺激をいただいています。新下水道ビジョンの委員の経験からも広報の必要性を強く感じています。

―水道と下水道の広報の違いについてはどのように見られていますか？

長岡　水道の広報は、何よりも飲まれることに力点が置かれており、もう1つは施設の耐震化などの投資の必要性のアピールにも留意した取り組みも目立ちます。一方、下水道の方は、ダーティーなイメージの払拭を軸にした事業全体のイメージアップがメインテーマになっています。デザインマンホールや水の天使の活躍の場となっていることもそんなコンセプトが反映したものと言えるでしょう。両者を比較した場合、戦略的な指標を掲げにくいという点で下水道の広報の方がより難しいという印象を持っています。

―近年の広報に対する印象は？

長岡　水道事業では焦点を絞った広報が目立つようになってきました。神戸市のように広報の成果を確認する効果測定を行う所が出てきたのは良い傾向だと思います。その一方で、〝広報ありき〟で目標設定が曖昧になっている所もあるような印象もあります。下水道については、GKPの広報大賞などを見ても手づくりで広報しようという姿勢が組織的に根づいてきている印象を持っています。その象徴が京都市でしょう。また、埼玉県では職員自らが出前授業に臨み、下水管にモノが詰まることを題材に「ツマラン管」といったアピールをしており、良い意味での拡がりを感じています。あるいは、企業にもテレビCM使った積極的な広報が見られるようになってきました。GKPは大賞などいろいろな試みで全国に発信する姿勢を強めており、それが下水道関係者を刺激し合う媒介になっているという点で高く評価できると思います。

―今回のシンポジウムのキーワードになっております「伝える」ことへの思いについてはどのようにお考えでしょうか？

長岡　私は学生に対しては、上下水道について「総合科学」としての魅力と、「水」という生命の維持にとって不可欠なものに関わる仕事としての誇りを伝えています。学生に限らず、この上下水道の魅力を伝え、多くの人々とその思いを共有したいですね。よく言われていることですが、意識すべきことは「見える化」であり、とりわけ一連のライン、すなわち「水源」から「蛇口」ならぬ「放流」までを多くの人に知ってほしいと思います。

―最後に、シンポジウムではコーディネーターとして特にどのような点に留意されるかお聞きしたいと思います。

長岡　やはり、パネラーの皆さんの本音を引き出したいですね。特に和田さんや宍戸さんのような「外の世界」に身を置く人の本音は私自身も興味があります。そして、自治体や企業の関係者もそれぞれに思いがあるでしょうから、それらの思いが滲み出るような語らいになればいいですね。

―滲み出た思いを共有できれば「伝える」ことの前進にもつながることでしょう。有難うございました。

……

東京大学大学院都市工学専攻の博士課程修了後、同大学助手を経て武蔵工業大学講師へ。助教授から教授に昇任し、大学名変更に伴って現職。「河川の自然浄化作用」からスタートした研究活動は、「水」を軸にしながらも「広報」「管路」など多様なアプローチが目立つ。「人」と「施設」に数多く接しようという前向きな姿勢から上下水道界に知己は多い。

今年の水道研究発表会でも広報部門で発表

ことへの思い

スカッション講師インタビュー～

新潟市水道局 総務部 広報・人材育成室主査 本間 徳雄氏

新潟市水道局の広報業務について

新潟市水道局では平成25年4月に大規模な組織改正が実施され、それに伴い総務課内に「広報・人材育成室」が新たに設置されました。私は、その発足時からこの新組織に所属し、研修等の人材育成と併せて広報を担当しています。新潟市では市長部局に出向していた3年間を除き、専ら水道局での勤務ですが、その大半は料金関係などの営業部門で、本格的な広報に携わった経験はほとんどなく、料金系のチラシ作りに携わったことが広報との唯一の接点でした。

新組織を立ち上げた以降は、まず広報に関わる戦略を練り、その戦略に沿って広報活動を展開しています。具体的には、水道週間行事、広報紙『水先案内』の発行、市内の各種イベントへの「ウォーターバー」の出展、小学4年生を対象とした出張授業などを行っています。今年から始めた出張授業は、司会・解説者・水太郎（＝着ぐるみ）の3者によりプロの力も借りながら水道週間イベントで実施したPRを職員だけで学校に出向いて行うもので、PRする内容も凝集実験のような浄水処理の話だけでなくトータルな視点でPRします。今年は職員だけで2校で実施してご好評をいただきましたが、水道局から教育委員会へ打って出て実現した行事という点でも意義深いものと自負しています。

広報業務の課題とその解決に向けた方向性

日々広報業務を実践している中で感じているのは、目標をどこに定めるのか？そして、何を持って成果とするのか？という根源的な疑問です。私自身、このこと自体が広報の課題だと思っています。その一方で、ウォーターバーというお客さま一人ひとりと対面して行う広報活動が取っ掛かりになって、話が弾めば耐震化の大切さまで話題にできます。市販のボトル水と比較して圧倒的に低廉であることや安全性、おいしさという生活に直結する身近に感じられる部分で訴えられていると感じていますし、だんだんと水道水のイメージアップができているなという感触は得ています。今後は新たな広報手法を考え、何を、誰に、広報するのか、そして、何をもって成果とするのかということについてまとめる必要があると感じています。

広報の基本的な考え方

「当たり前」からの脱却へ

広報参加型研修の意義を

『当たり前からの脱却』を掲げています。そして、今後必要となる投資に対し、お客さまが気持ちよく納得してお金を払っていただけるように努めなければならないという思いを持って広報業務に臨んでいます。また、広報活動を通じて「当たり前」にはもう1つの側面があることも分かりました。すなわち、「水道水はまずいのが当たり前」という一部市民の先入観です。この誤解を解くことも「脱却」のための大切な要素だと感じています。

「伝える」ことへの思いとパネラーとしてアピールしたいこと

「伝える」ことの難しさを強く実感させられる毎日です。ただし、イベント等で「伝わった」時の充実感は格別のものがあります。私がイベントで特に留意すべきと思っていることは「笑顔が必須」ということです。そのために職員には「自ら楽しむことが大切」と言っています。

局では40歳以下、キャリア2年目以上の職員を「水道プロモーター」に任命し、ウォーターバーや出張授業に出向いてもらっています。そのための事前研修も実施しています。お客さまと直に接する広報を実践することにより、人材育成を図ることは今の「広報・人材育成室」としての重要な職務だと考えており、その意義をシンポジウムでも強調したいと思います。

……

これまで最も長く携わった水道事業の営業業務では、調定や〝再検針〟、「怖い思いもした」督促業務など住民に接する地道な業務の経験が豊富なことからコールセンター立ち上げにも関わっている。市民から料金を得ることの難しさ、大切さを理解している人ゆえに広報に向けた思いも熱く真摯だ。

ウォーターバーに代表される対面による広報の意義も確認

佐賀市上下水道局 環境政策調整監 前田 純二氏

佐賀市での主な取り組み

佐賀市では『バイオマス産業都市さが』の実現という夢を掲げ、ゴミや下水の処理過程から排出されるものから新たな価値を生み出す取り組みを進めています。

具体的にはゴミを焼却する過程で出る熱を使った発電、下水処理水と下水汚泥の有効利用です。このような取り組みは、以前から各地で行われ、取り立てて珍しいことではありません。しかし、佐賀市では、職員がゴミや下水汚泥の有効活用に取り組むことを単なる仕事としてとらえず、「自分事」としてとらえ、一行政職員の枠を超え取り組んでいます。

この姿勢は市民や企業の共感を得、市職員に限らず市民、企業がそれぞれの立場で『バイオマス産業都市さが』作りに参加するようになり、大きなうねりを起こしています。

最近では、施設から発生する二酸化炭素の有効利用という取り組みも本格的にスタートし、夢はどんどん大きくなっています。

今では、ゴミ焼却場や下水処理場は、暮らしにとって有用な資源を生み出す『宝の施設』という認識が市民の間で持たれるようになってきています。

取り組みを進める中での苦労

今でこそ、テレビでも取り上げられ、全国にも知られる取り組みになりましたが、ここまでの道のりは決して平坦ではありませんでした。

まず、職場の意識を変えることからスタートしました。下水道では、処理水や汚泥を利用するために、今までの処理方法を変える必要がありましたが、これに対して職場から、市議会から、批判の声が上がりました。しかし、私には農業集落排水の仕事に関わって汚泥や処理水の利用を実践し、農家や漁業関係者から喜ばれた経験がありました。また、市長や市議会議長の賛同も得ることができました。実は、お二人とも農業をされており、その経験から下水汚泥の処理方法に疑問を持っておられたので、私の考えに賛成していただいたのです。

こうしたキーマン ↖

●本紙創刊60周年記念特集号

講師が語る「伝える」

～本社創立60周年記念シンポジウム・パネルディ

当事者意識を持った行動で「伝える」に向き合う姿勢を

名古屋市上下水道局企画部参事 **柵木 由美氏**

住民広報との関わりについて

私が上下水道局で仕事をするのは今年4月からで、それまでは市民局や区役所の福祉部門などで住民広報に関わる仕事に携わった経験があります。市民局では男女平等に向けた啓発を担当し、イベントや機関誌作りをしました。また、女性運動がたけなわの時代で消防士は男性のみ、保育士は保母という呼称で女性のみという状況にあり、職域拡大が啓発のベースになっていました。上下水道局に来てみて「女性の活躍」という点ではまだまだという印象を持っており、「水」分野で女性が活躍すること自体が話題になっています。上下水道局での仕事は自分のこれまでの30年の仕事の集大成という気持ちも持っています。

上下水道事業に対する印象と広報の課題

命につながるという意味で「水」は全ての営みにつながるものと考えています。私の前職の福祉、あるいは防災も「水」なしにはなし得ません。このため、「水」の広報は「水」だけですべきではないと思っています。他の分野とのコラボレーションと地域力の活用が戦略的広報のキーワードになると思います。しかし、上下水道局を取り巻く現状に目を向けると、他局の情報は上下水道局に入ってきても上下水道局の事は外にはあまり伝わっていません。上下水道事業開始から100年という節目を踏まえて、この3年間、広報活動を行っていたと聞いていますが、福祉部門で仕事をしていた私には「100周年なんだ」という程度の情報しか入ってきませんでした。私自身、名古屋で生まれ、名古屋で育ってきたので、この土地の「水」に対する愛着と信頼はありますが、周囲を見渡すと「当たり前」だと思っている人が実に多くいます。これは住民に対してニーズを捉えて働きかけるという広報の意識が、不十分であったことも一因だと思います。

若手主体の広報活動に着手した背景と成果

広報活動に若手を重用した背景には、職員一人ひとりが普段は多様な局事業における細分化された役割分担の中で仕事をしている状況に少なからぬ閉塞感があり、このままでは若手が育たないという危機意識がありました。そこに私が来て、「ならば女性でしょ!」と主張し、若手の男女ほぼ同数で互いに刺激し合いながら取り組んでもらうことになりました。そもそも彼らには「上下水道局をこれからどうする」「どのように市民にアピールするのか」といったことについて考え、議論したことはあまりなかったわけで、「良い経験ができた」という本人たちからの声以上に、局幹部からの高い期待と評価がありました。そして、若手が議論を重ねた結果、38ものアイデアが出てきて、中には「断水体験イベント」といったものまでありました。

彼らの対外的な初の活動は今年8月に名古屋市で開催された世界コスプレサミットへの参画です。オフィシャルウォーターとなったことを受けて、彼らがシナリオを作成した「名古屋おもてなし武将隊」信長・秀吉・家康が登場するプロモーションビデオを3種類制作し、You Tubeで事前放映しました。そして、実際の会場でのPR活動では「暑い中、頑張っている上にイベントに溶け込んでいる」という好意的な反応ばかり。そのツィートに手拭プレゼントを謳ったところ、30万人に広まりました。次は、自分たちの主催プロジェクトの企画化も視野に働きかけていきたいと思っています。

そんな若手職員がいろいろと良い仕事をしてくれていて、自ら街に出て人と接し、聞いてきた話も興味深いものがありました。例えば、上下水道に対するイメージについては、「地味で目立たない」「おじさん臭い」「何となくイメージが悪い」「直接飲んでみて大丈夫?」といった声が聞かれたそうです。これらの市民の声から窺えるのは、「敵視はしていないが特段良いイメージを持っているわけではない」ですが、その一方でアンケート調査では満足度は63・3%と評価は高く、「水道水に安心感を持っている」と回答した人は8割以上にもなります。こんな事業は他にはなく、潜在的なポテンシャルは高いと言えます。住民が理解し信頼感を持ってくれるための扉は既に開いているわけで、広報に関するスタートラインの優位性は他の事業より数段高いと思います。「水」が大切なのは皆が思っているわけですから、それは他の事業にはない強みになりますね。

「伝える」ことへの思い

「啓発」と「伝えること」とは全く違うものだと思っています。福祉の仕事に関わっていた時、情報が本当に必要な「人」の手に届かないという重ことや、汚泥からできた肥料が安全で作物の生育に有効であることの科学的根拠を示したり、汚泥由来の肥料を使った農園に親子連れを招き一緒に作物を植えたりすることに職員が一丸となって取り組むことで、徐々に下水道肥料に理解を示していただけるようになりました。

「伝える」ことやパネラーとしてアピールしたいこと

取り組みを通じて、自分の担当業務にとことん携わることの重要性を感じています。単なる仕事として取り組むのではなく、自分の事として、業務に向き合う。そして、自分から行動する。そうすると、それを見ている周りも、徐々に協働してくれるようになり、取り組みの環が広がります。この環はやがて職場を超え、外にも広がり、夢の実現につながっていく。

実はこの拡がりが「広報」と言えるのではないでしょうか。イヤイヤやっているところに環は拡がりません。

下水道でおなじみの菌の世界には、15%の優良菌、15%の悪玉菌、70%の日和見菌がいます。そして、70%の日和見菌は優良菌、悪玉菌のどちらかが1%増えると、増えた方に流れ込み、優・悪の態勢が決まります。これと同じように自身の取り組みを1%大きくすることで態勢をリードすることができます。この1%をどう増やすか。それは、取り組みのコアにいる人が、当事者意識を持ちどれだけ行動するかにかかっていると思います。広報においても、自分が伝えようとしているものに向き合い、イベントでもなんでも自分から動いていく。試行錯誤しながら活動していくことで共感の環が拡がる。

『バイオマス産業都市さが』の取り組みは、私たちの行動に共感したデザイナーが、「こんな素晴らしい取り組みがあるならをもっと多くの人に知ってほしい!!」と資料制作の協力があり、デザイナーの力も加わることでより一層、多くの人に伝わるようになっていきました。

自分の行動が人の環をつないでいく、そうなっていった時、おのずと「広報」の目的も達成されているのではないでしょうか。

……

佐賀市役所では技術職として下水道や河川部門など「水」に関わる業務を中心に経験を重ねた。環境下水道部下水道課理事等を経て現職は佐賀市上下水道局環境政策調整監として、『バイオマス産業都市さが』実現に向け、中心的な役割を果たしている。

「バイオマス産業都市さが」の要。佐賀市下水浄化センター

真摯で前向きなミーティングが活力に

広報に性急な成果を求めない

ジワッと「おふくろの味のような…」

水道耐震化プロジェクト水道PRパッケージ作成WGリーダー **岡部 洋氏**

水道耐震化プロジェクトの概要

水道施設の更新・耐震化に関する広報活動を効率的、効果的に展開していくことを目的に、厚生労働省、日本水道協会、日本水道工業団体連合会などの水道関係団体が中心になり「水道耐震化プロジェクト」はスタートしました。活動期間は2012（平成24）年11月から2015（平成27）年3月末までのおよそ2年強にわたり、この間、水道PRキャンペーンWG「阻害要因・リソース分析WG」という2つのWGを立ち上げ活動を行いました。

水道PRキャンペーンWGでは、静岡県をモデル地区として「レッツ!水道健診」キャンペーンを実施し、TVコマーシャル、ラジオ、チラシなどの広報媒体の効果を検証したり、リスク・コミュニケーションの可能性を試行したりしました。

また「水道耐震化ポータルサイト」を水道技術研究センターで立ち上げ、更新・耐震化を中心とした広報事例の収集・整理を行いました。このポータルサイトでは、「Dr.すいどー」のキャラクターを公開したり、広報用素材等を共有化したりすることで中小規模事業体でも容易に広報が行える広報支援プラットホームを作りました。

昨年度は、座間市や坂戸、鶴ヶ島水道企業団の水道フェアのサポートを行ったり、「水道PRパッケージ」と言っていますが、水道事業体の方々が広報活動をする際の事例集を作成したりして、これも「水道耐震化ポータルサイト」にアップしています。

一方、「阻害要因・リソース分析WG」では、耐震化を進めるにあたって誰の理解が必要なのか、どうすればステークホルダー間で合意形成ができるのかを探るためにステークホルダー分析、阻害要因分析、対応策の検討といったことについて調査を行いました。

プロジェクトで明らかになった成果、課題

今回のキャンペーンでは、水道施設の老朽化、耐震化の必要性、水道料金などにも触れましたが、水道利用者は正確な情報を提供すれば常識的な反応を示してくれました。つまり水道利用者とのリスク・コミュニケーションの可能性はあるということです。また座間市や坂戸、鶴ヶ島水道企業団でのイベントでは水道事業体の方々もイベントを運営する中で「やってよかった」という声が聞けたのは非常に大きな収穫でした。

しかし、今回はモデルづくりや事例集の提供だけですので、水道事業体自らが市民への広報の大切さ、必要性を理解していただき、水道PRが全

次頁に続く

今年2月、水道耐震化プロジェクトの成果として座間市で開催された「水道ふれあいフェア」

若手の頑張りで面白く

直接伝える有効性を実感

“デビュー戦の”コスプレサミットで早速存在感示す

……

市民局、総務局、監査事務局、子ども青少年局、区役所などで多様な職務を経験。「男女平等参画は天職」と自負する一方、「監査の申し子」との異名も。水関連では堀川1000人調査隊」の立ち上げにも関わっている。

創刊60周年、おめでとうございます。

TBC TABUCHI

『水』の『安心』・『安全』をお届けしています。

株式会社タブチ

<本社 / 工場> 〒547-0023 大阪市平野区瓜破南 2-1
TEL 06-6708-0150㈹ FAX 06-6708-0210

ISO14001 認証 JQA-EM1811 本社・工場
ISO9001 認証 JQA-2668 本社・工場

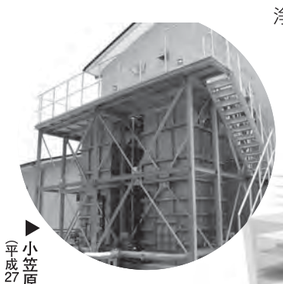
商品のお問合せは 0120-481-130（いいみず）
<支店 / 営業所>札幌・盛岡・仙台・北関東・新潟・千葉・土浦・さいたま 東京・多摩・横浜・静岡・金沢・名古屋・大阪・岡山・広島・福岡・南九州・沖縄

検索機能充実の TBC WEB カタログ TABUCHI WEB CATALOG はホームページから! タブチ 検索 ホームページはこちら▶

MIEX®処理システム
（帯磁性イオン交換樹脂）

MIEX®樹脂を用いた処理システム

MIEX®処理システムは、通常のイオン交換処理で用いられるろ過式ではなく
磁性を帯びたイオン交換樹脂を使用するため、流動床式での原水処理が可能となりました。
MIEX®処理システムは浄水フローの前処理として凝集沈澱処理や膜ろ過の前段に組み込めます。
浄水処理を継続しながら樹脂の再生はオンサイトで行えます。



▶小笠原村扇浦浄水場（平成27年4月運用開始）

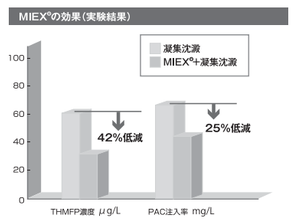
オゾン+活性炭に代わる
画期的な有機物除去システム。

設備イメージ

システムの特長
■オンサイトで再生、繰り返し樹脂を使用
■沈降性に優れたMIEX®樹脂

システムの導入効果
■トリハロメタン対策に抜群の効果
■溶解性有機物・色度の除去
■PAC・オゾン注入率の低減
■前処理で消毒副生成物前駆物質（DBPs）を除去
■処理過程で副生成物を生成しない

MIEX®の効果（実験結果）



Aqua Tech 水のマエザワ

前澤工業株式会社 http://www.maezawa.co.jp
〒332-8556 埼玉県川口市仲町5番11号 TEL：048-251-5511 FAX：048-251-9375

●本紙創刊60周年記念特集号

講師が語る「伝える」ことへの思い

～本社創立60周年記念シンポジウム・パネルディスカッション講師インタビュー～

前頁より続く

体として第一歩を踏み出すのはこれからだと思います。

課題を克服するための取り組み

「水道耐震化推進プロジェクト」は一旦、終わりました。しかし、このプロジェクトで取り組んだ活動は継続すべきことであり、一過性のものではなく、ルーティンの中に組み込み育てていくことが重要だと思います。また、広報を考えるとき、現状では難しいのは理解しますが、「できない」からスタートするのではなく「どうすればできるのか」からスタートして欲しいと思います。

「どうすればできるのか」を考えたとき、広報活動をサポートする「しくみ」があれば心強いと思います。時間、費用、ノウハウを支援する「しくみ」がないと継続できません。とはいえ、どこかの誰かが単独で支援しても継続性がありません。広報活動でそれなりの実績を持っている大規模事業体などが中心になり、広報でも広域的なサポートを展開することも一案ではないでしょうか。また、OBの方々にも力を貸していただくことも有効だと思います。そして、これらをバックアップする全国的な「しくみ」を国、県、日水協などがバックアップすることも必要だと思います。

伝えることの思い、パネラーとして特にアピールしたいこと

一口に水道の広報と言っても、規模や地域によってそのスタイルは多様です。そういう意味で広報活動に王道はなく、まず第一歩、失敗してまた一歩と、一歩ずつ進むこと、早く第一歩を踏み出すことが大切です。

一方で、性急に成果を求めてはいけないと思います。水道事業体から水道利用者向けの広報は民間企業の広報とは異なります。「水」を売るための広報ではなく、「水道を理解していただく」ための広報ですから、なんというか、ジワッとしみる「おふくろの味のような広報」がいいと思います。そういう意味では子どもたちへのPRは大切です。人は大人になっても「おふくろの味」は忘れません。大人になってからも水道の大切さをふと思い出すようなPR（Public Relation）が重要だと思います。

これからは水道を取り巻くステークホルダー間で、特に水道利用者との信頼関係を築くことが大切です。そのためには水道事業が抱えている課題、つまり施設の老朽化、耐震化の促進、適切な水道料金水準などをオープンにしていくことが必要です。そして、課題の解決策を利用者の方々にも参加して考えていただく。時間はかかるかもしれませんが、「水道利用者への広報」はますます重要になると思います。

……

株式会社クボタ理事（技術担当）。クボタの技術広報活動、人材育成を担当。一方、事業者団体活動の企画、推進にもあたり、この一環として「水道耐震化プロジェクト」水道PRパッケージ作成WGリーダー

ミス日本コンテスト事務局大会委員長　和田　優子氏

互いのニーズが合致した「水の天使」

ミス日本コンテストはグランプリに加え、4つの部門賞と準ミスを選出しています。「水の天使」は部門賞の1つで、2012年度より選定しています。ミス日本グランプリは年間を通して活動する機会があるのですが、その他の賞は選ばれた日から1～2カ月のみの活動で、その後の10カ月は淡々と過ぎていました。

ミス日本のお嬢さんたちが成長していくためには、何かしらの役割を担って1年の任期を終えることがプラスになると強く感じ、ミス日本の活動の場を広げていくことができないかと様々な分野を探っていました。

ちょうどその頃、国土交通省下水道部の加藤（裕之）さんとお会いする機会があり、こういうことができれば面白いすねと雑談したのが「水の天使」誕生のきっかけです。下水道界とミス日本コンテスト事務局の互いのニーズが合致し、加藤さんと話し合いを重ね実現にたどり着きました。まさに出会うべくして、出会ったのだと思います。

現在では、ミス日本候補生の中で「水の天使」が受賞したい賞のナンバーワンとなっています。先輩たちの活躍を見て、これほど業界にコミットできる賞はないといった点が大きいのではないでしょうか。活動当初は手探り状態でしたが、初代「水の天使」の酒井美帆さんがとても努力家で業界のことを勉強し、発信しようと活動されてきたこともあり、その後の活動方針が定まってきました。

下水道は日本のキレイを支えている

下水道の効果として一番印象的なことは、多摩川がキレイになったことです。子供の頃から多摩川へ行く機会が多かったのですが、今では上流の方で魚が戻ってきました。また、私はマンション住まいで、年に1回、下水管を清掃するためにトイレやお風呂など水を流してはいけない日があるのですが、たった1日でもかなり不便で、下水道の有り難さを実感します。あまりにも世の中が便利になりすぎ、普段は便利さを感じないことにも気付き、反省します。

夢描けるワンフレーズを
役割変化伝えることが〝肝〟

「水の天使」と一緒に下水処理場を見学したことがあるのですが、処理場が24時間・365日運転されていることで、私たちは快適な生活を送ることができるのだと、実際に現場を見ることで理解ができました。日本のキレイを支えているのは下水道で、世界に名だたる衛生国家・日本を支えていることは誇れることだと思います。

また、下水道は未来があると感じています。下水汚泥のエネルギー利活用や肥料化などの様々な新しい技術が開発されていることを知り、下水道の役割が多様化していることに驚きました。これまでの下水道のイメージから大きく変わってきているので、その点を伝えていくことが今後の下水道広報の肝になってくるのではないでしょうか。

伝えたいことは取捨択一で

ミス日本コンテスト事務局を運営する上で、ミス日本の歴史やスローガンなど伝えたいことは山ほどあります。しかし、いくらたくさんのことをお伝えしても情報量が多すぎると聞き手の心には残りませんので、伝える際は取捨択一を心掛けています。私は広報の専門家ではないので詳しいことは分かりませんが、広報にはワンフレーズでいろんな人にいろんな夢を描けることが重要だと思っています。

今はネット社会なので、夢を感じたことは調べようと思えば何でもインターネットで調べることができます。つまり、いかに夢を伝えるかが大切になってくると言えます。これは業界の方に対しても、一般の方に対しても通じることだと思います。その夢を具現化するために、「水の天使」が何か伝えるお手伝いできればいいなと感じています。

……

ミス日本「水の天使」のマネージャーも務め、下水道をはじめ水業界のPRに積極的な活動を展開している。ミス日本コンテスト事務局大会委員長と一般市民として2つの目線から広報戦略を分析している。

国土交通省下水道部の職員を招き、下水道について学ぶミス日本候補生ら

岩手県矢巾町水道サポーター　宍戸　美帆氏

やはば水道サポーターになったきっかけとワークショップに参加した印象

サポーターになったきっかけは、サポーターだった友達に誘われたことです。何を行うものなのか全く知らないまま、漠然と初めて会う人と何か話をしてみたいという軽い気持ちでサポーターになり、ワークショップに参加することとしました。

ワークショップでは、矢巾町上下水道課の職員から資料や映像などで水道について勉強したり、上下水道課職員や他のサポーターの方々と町の水道の計画づくりや広報のあり方などについて意見を言い合ったりしており、2カ月に1回ほどの頻度で毎回25人前後のサポーターが参加しています。

参加する前は、役所が開催しているということで、住民との間に距離がある、堅い会議のようなものをイメージしていました。実際には、家の近所で井戸端会議をしているというわけではありませんが、上下水道課からの問題提起に対して自由に言いたいことを言える雰囲気があると感じています。

一方で、上下水道課とはつかず離れずの関係で、適度な距離感を保っていると思います。水道利用者の立場から時には上下水道課にとっては厳しい声も挙げさせてもらっていますが、そういった意見にもしっかり耳を傾けてもらっています。

水道はあって当たり前の存在
まずは気づくきっかけ作りを

水道サポーターになる前と後での水道事業に対する印象の変化

サポーターになる前は、水道に関して特に関心も興味もなく、蛇口をひねれば出て当たり前のものであり、その向こうになっている水道を守るために蛇口の向こう側で頑張っている方々がいることと、そして水道を守ることの大切さなどを初めて知ることができました。サポーターにならなければこうして水道について考えることもなく、考える機会があったからこそ、後になって苦労してつけを払うことになるよりも今から将来のために少しでも負担を負っておく方が良い、と感じるようになりました。

「伝える」ことについての思い

人に何かを伝えることはとても難しく、興味がないことについて興味を持って振り向いてもらうことは大変ですが、水道について学んでみようとまで思ってもらわなくても、まずはあって当たり前となっている水道の存在に気づいてもらうためのきっかけを作ることが重要だと思います。きっかけとしてサポーターは最適な取り組みだと思います。サポーターとして住民目線でより良い広報の方法について意見を挙げさせてもらい、これまで多くの取り組みを実現してもらっています。

例えば、広報紙では、長い文章で小難しい単語や数字が並んでいると見る気は起きにくいため、文章は簡潔にわかりやすくする一方で上下水道課のキャラクターである「じゃじゃっと君」の絵を大きく用いて読者の目を惹きつけることや、掲載場所も生活面など多くの人が見るようなページに載せることなどを提案させてもらい、現在はその提案を反映したものになっています。そのほか、水道の現状を漫画でわかりやすく説明した冊子の全戸配布や、水道料金のクレジット払い、検針票の裏面への4コマ漫画の記載、町のイベント「矢巾町秋まつり」での水道のPRなどの取り組みは、サポーターの提案により実現したものです。

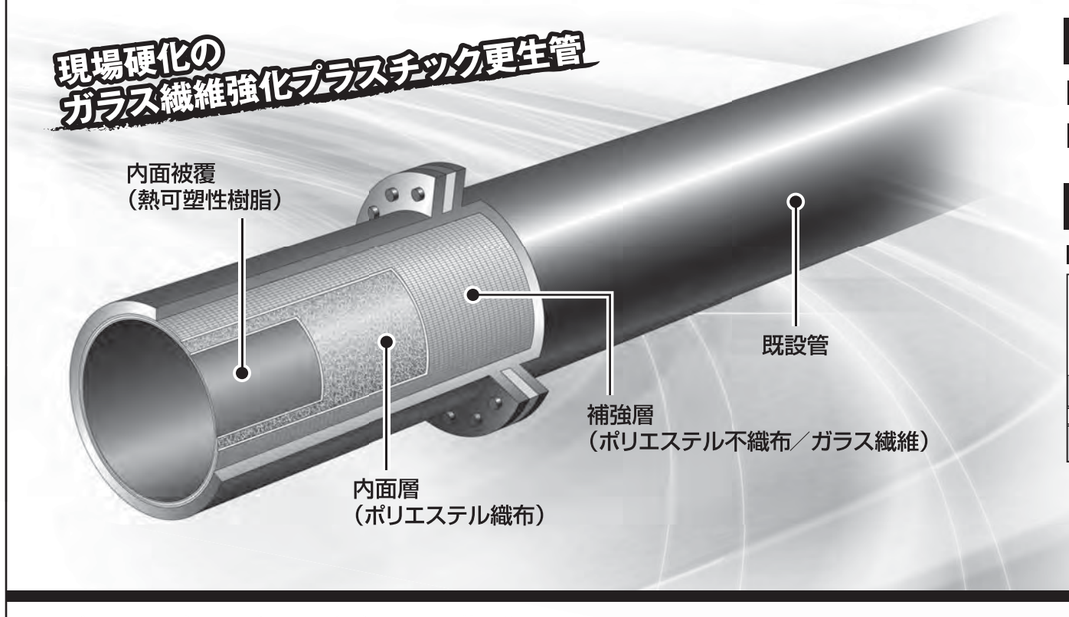
最後になりますが、パネルディスカッションでは、やはば水道サポーターの代表として、感じたことを一般住民の目線で話ができればと思います。

……

宮城県美里町出身で、矢巾町に住み始めてから6年目。やはば水道サポーター歴は約5年で、矢巾町水道事業の経営戦略の策定に向けた審議を行っている「矢巾町水道事業経営戦略策定検討会」の委員を務めている。

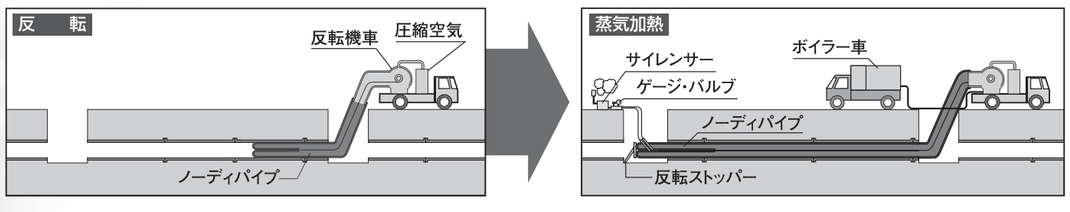
「水道サポーター」との交流が矢巾町の戦略的広報のエキスに

SEKISUI　老朽化した圧力管路を自立管としてリニューアル！



特　長
■ 優れた圧力性能を有する
■ 自立強度を有する
■ 水質が安全である
■ 通水能力の向上
■ 赤水、錆を防止する

施工イメージ
■ 挿入方法
■ 硬化方法



小・中口径管路更生工法　ノーディパイプ工法

積水化学工業株式会社　環境・ライフラインカンパニー　インフラ土木システム事業部　〒105-8450 東京都港区虎ノ門2丁目3番17号（虎ノ門2丁目タワー）

東北支店
土木システム営業所　022(217)0607
東日本支店 土木営業部
東京土木システム営業所　03(5521)0647
関東土木システム営業所　048(646)0160

中部支店
土木システム営業所　052(957)5305

西日本支店 土木営業部
近畿土木システム営業所　06(6365)4546
中国土木システム営業所　082(224)6219

九州支店
土木システム営業所　092(271)1314
積水化学北海道（株）
営業本部　011(737)6330

お客様相談室　【東京】03(5521)0505
【大阪】06(6365)4133

エスロンタイムズ on the Web　http://www.eslontimes.com

●本紙創刊60周年記念特集号

60歳の上下水道人からのメッセージ

使命共有した仕事が財産

前・東京都公営企業管理者・水道局長 吉田 永

法人と個人の違いこそあれ、同じ干支一巡の時を過ごしてきた者として、親しみを込めて…水道産業新聞創刊60周年、おめでとうございます！

また、明治31年に通水した東京水道は、あと数年で〝大還暦150年〟を迎えますが、その過半の長きにわたり、東京水道そして全国の上下水道分野の様々な情報さらにはあるべき姿などを発信し続け、上下水道界の発展に貢献されてこられたことに深く敬意を表します。

さて、私は埼玉県浦和市（現・さいたま市）の生まれ。記憶を遡ると、自宅の台所には自家用井戸の蛇口と上水道の蛇口の2つがあったことを憶えています。どのような経緯でそうなっていたのかは定かでありませんが、恐らく水道が整備されて間もなくの地区だったのでしょう。家の周りの道路は砂利路で、まだオート三輪車も土埃を巻き上げて走っていました。そんな道に「埼玉県南水道」の文字が鋳出された長四角形の鉄蓋があったことを妙にはっきりと憶えています。その後、道路はアスファルト舗装に変わりましたが鉄蓋はそのままだったと思います。

小学生のとき、近所の浄水場に社会見学に行きました。地下水を水源とする塩素処理のみの施設で、沈澱池やろ過池などはなく〝ウィーンウィーン、ゴッゴッゴー〟と音をたてるモーターと鉄管が印象的でした。その後20歳近くまで〝浄水場〟といえば、その時の施設が頭に浮かんでいました。時代はまさに高度経済成長期…公害・環境破壊…がクローズアップされる中、衛生工学に興味を持った私は北海道大学工学部衛生工学科へ。ここで〝上水道〟水処理に出会い、その後の水道人生につながっていったのですが、こうして振り返ってみると、井戸水蛇口や砂利路の鉄蓋が私の水道人としてのルーツなのかも…。

昭和53年4月、都庁に就職、水道局に配属されました。浄水場勤務をはじめとした〝浄水畑〟から始まった水道人としての歩みは、その後、計画、管路、建設、お客さまサービス、研修・開発、広域化など多岐にわたりました。この間、「今日、明日はもとより将来とも……、渇水、台風・豪雨、水質汚染や停電・施設事故などの異常時にも…、安全な水の安定供給という明確な使命」、そして、「その使命を共有し、常に課題に取り組む先人・職員そして組織力のすばらしさ」を胸に、仕事に取り組めたことは私の大きな財産であり、幸せでした。

そうした中で〝ビリッとした刺激〟を与えてくれるもの…それが「水道産業新聞」でした。国・全国の水道事業体・学識経験者そして水道業界の動向や最新情報、そして折々の特別企画等々、『水の総合専門紙』ならではの紙面は、私の大切な情報源、参考書であり、ある意味、栄養剤でもありました。さらに、取材を受ける際などに新聞社の方からお聞きする様々な生の声・情報・感想なども、とても有難いものでした。

今、わが国の水道は世界的にも最高水準のものとなっています。しかし一方では、災害頻発、施設老朽化、高齢化・人口減少、気候変動など顕在化する多くのリスクや困難な課題が山積しています。将来にわたり、安全な水を安定供給するという水道事業の使命を全うする…持続可能な事業運営…のためには、水道事業に関わる全ての人および団体の英知・議論・取り組みを最大限有効活用することが必要となるでしょう。「水道産業新聞」には、これからも〝大還暦〟に向け、益々、多くの関係者に〝英知・議論・取り組みが集うフィールド〟を提供し続けていただけるものと期待しています。

新たな環境技術の英知が結集する場に！

横浜市水道事業管理者 土井 一成

水循環と都市計画の関係

私は北海道生まれで、子供の頃は父の仕事の関係で道内を何度も転勤しました。札幌や帯広のような計画的な碁盤目の町、小樽や函館のような坂道が多い港町、室蘭のような工業の町。子供心に様々なまちの個性に興味を持ち地図が好きになり、都市計画を勉強したいと思い、その後、縁があって横浜市に入り都市づくりを仕事にすることが出来ました。

日本の大都市の多くは大きな河川のそばに作られ、江戸時代の藩の城下町などから成長しています。一方横浜は、幕末期に開港の地として政策的に選定され、良港ですが大きな河川がなく水の条件の悪い所でした。外国人居留地のコレラ対策などのため、英国人土木技師H・S・パーマー氏の指導により、明治20年に日本初の近代水道が整備されました。

44㌔離れた相模川上流部から取水し、水をろ過し鉄管などを用いて有圧で給水しました。当時の給水人口は7万人ですが、現在は370万人の大都市に成長しており、これには近代水道技術が大きく寄与しています。

現在、世界の水危機が叫ばれていますが、水循環と都市計画の関係をしっかり考えることが重要です。水を確保し人々の居住環境をつくるために、気象や地形などの土地の自然システムと都市の上下水道などの人工システムをいかに調和させるかが課題になります。河川上流の水源林を保全し、水質水量を守り汚染対策を行い、省エネルギーを図り効率的な浄水や給水を実施し、確実に処理をして水を自然に戻す。このシステムが無理なく持続可能に維持できるかどうかで、その都市の寿命が決まってきます。

自然と人工の調和した技術発展

今年7月、横浜市水道局は「川井浄水場再整備による環境に配慮した水道システムの実現」により「日本水大賞厚生労働大臣賞」を受賞しました。道志川水系において100年前から水源林を維持保全し、自然流下で川井浄水場まで運び、膜ろ過方式で浄水し31万世帯に給水しています。森の水源涵養機能などの自然システムと最先端の膜処理などの人工システムを組み合わせ、公民連携により水系単位で管理しています。また、地形の高低差の位置エネルギーの活用、小水力発電や太陽光発電の導入により、浄水場の使用電力を半減させました。給水量は市全体の15%ですが、今後は他の水系についても自然流下系施設の再整備を進め、環境に配慮したシステムの更なる拡充を図っていく考えです。60年の歴史は、日本の上下水道界の発展と共にありました。時代は膨大な施設建設の時代から柔軟な管理運営の時代に変わり、地震・台風・火山など様々な自然災害への備えも必要です。産学官のつながりに加えて、市民の多様な声、次世代を担う人材のアイデア、国内外の先進的チャレンジなど、様々な情報や英知が結集する場が求められます。貴紙が、自然と人工が調和する新たな環境技術創出のプラットフォームになるように、これからも大いに期待しています。

目指すべき理想像を共有

川崎市上下水道事業管理者 飛彈 良一

このたび、水道産業新聞が創刊60周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

日本の水道や下水道は、高度経済成長期に代表される拡張期を経て、水道・下水道産業の発展とともに、世界に先駆けた技術開発を行うなど、現在では、世界のトップランナーとしての地位を築いています。また、これまで培ってきた経験や技術を活かすことにより、世界のリーダーとして、国際的な貢献が期待されています。一方で、近年の社会構造の変化や節水型機器の普及などに起因する水需要の低迷により、水道料金、下水道使用料収入が伸び悩む中で、老朽化した施設の更新需要が増えてくるなど、課題は山積しています。

本市の水道事業は、全国に先駆けて、平成18年から「水道事業の再構築計画」に基づく事業規模のダウンサイジングにより、3つの浄水場を1つにする取り組みを進めてきましたが、いよいよ今年度末をもちまして、その長沢浄水場が完成します。また、配水池、配水塔の更新や耐震化を平成30年度までにほぼ終えるとともに、重要施設等への供給ルートの耐震化や、応急給水拠点の利便性を高める取り組みとして、職員による開設不要な応急給水拠点の整備を進めるなど、災害に強い水道システムの構築を進めています。

また、本市の下水道事業は、現在、人口普及率が99・4%に達しておりますが、膨大な下水道施設の中でも、古くから整備を進めてきた地区を中心に、老朽化した施設の更新や耐震化を優先的に進めるとともに、近年の局地的集中豪雨への対応も含め、浸水リスクの高い地区に重点化を図った浸水対策を推進するなど、戦略的に安全で快適な市民生活を守る下水道システムの構築を進めています。

今後の老朽施設の更新需要の増大や人口減少等を踏まえると、今のうちから、重要な施設の整備は計画的に行わなければなりません。このたび、中期計画をはじめとした上下水道事業に関する計画が完了するのにあわせ、上下水道一体で30年、50年先を見据えた、上下水道ビジョンの策定作業に取りかかりました。将来にわたり、限られた財源の中で効率的・効果的に事業を実施するために、事業費の平準化やアセットマネジメント等の手法を導入し、持続可能な上下水道システムを構築することにより、安全でおいしい水の安定的な供給と、汚水を資源と捉え、きれいな水を川や海に戻すという自然界の水循環を守るとともに、雨水による浸水を防ぐなど、将来にわたり市民の生活を守り、産業活動を支える川崎の上下水道を目指します。

最後に、貴社の紙面を通じた情報発信により、今後の上下水道界の目指すべき理想像を共有する重要な役割を担っていただくことを期待し、創刊60周年記念のお祝いのあいさつとさせていただきます。

次の60年後の持続を確信

新潟市水道局総務部長 本間 悟

水道産業新聞が本年6月15日の創刊5000号発刊に引き続き、このたび創刊60周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

私は貴紙創刊と同じ昭和30年に山形県庄内砂丘の湧水で産湯を浴びましたが、当湧水は集落共同で竹樋管を松の丸太ゾケットで繋ぎ、樽で分岐しながら宅地内の地下水槽に引き込んで使用していました。なお、当時感染したピロリ菌は56歳になって除菌しました。

5歳の時に当湧水を水源とする簡易水道になりましたが、断水やマンガンによる黒い水をとがめる住民は皆無でした。小学生になって校区内の未給水集落での疫痢による乳幼児の死亡や赤痢発症地域の隔離騒ぎから水道の恩恵を意識することになりました。以来、水道施設周辺の塩素臭（晒粉使用）が香ばしく思われ、わざわざ嗅ぎに行ったものでした。また、小学3年時の新潟地震では自然流下方式の配水池が割れ、断水した3カ月間、毎日リヤカーで1㌔先の湧水を汲みに行く体験もしました。

その後大学で化学を専攻した縁で昭和53年4月に新潟市水道局に採用され、除草剤CNPに関わったことは、子供時代にDDTを頭髪に浴びせられたわが身の宿命との思いを強くしました。

38年間の水道プロパー人生で貴紙との関わりは2期に分かれます。前半の水質担当時代は、トリハロメタンに始まり水道水源保全三法成立まで、中央の情報を求めて関係記事を読み漁っていました。他に、昭和60年当時の水源税反対の鬼気迫る貴紙の論調は、今も記憶に残っています。

後半は主に総務部門を担当したことから、貴紙は、業務上かつ水道人として目を通してもらいたい記事をマーカーすることによって、コミュニケーションを図ると同時に人材育成の面でも活用させてもらいました。

以上、私の水道にまつわる経験談を書き連ねましたが、貴紙の「水の総合専門紙」としての歩みと共に、私自身も水道の発展を実感し、水道事業に従事しながら還暦を迎えられたことは嬉しい限りです。

最後に、次の60年後の上下水道事業も関係者の英知により持続し発展していると確信しています。そこで、貴紙が創刊以来果たしてきた時代の「鑑＝水鏡」としての役割を、今後は時々の道標として紙面という鑑に刻印し続けていくことをご期待申し上げます。

●本紙創刊60周年記念特集号

GISシステム構築の主担に

豊中市上下水道局 経営部長　南　治孝

創刊60周年おめでとうございます。貴社のますますの発展を祈念いたします。

私は大阪市内の生まれ、幼少の頃の上下水道は共同水道、共同トイレ（汲み取り）で、当時は数軒が一つの蛇口を利用していたことを思い出します。そこには下町独特の風情があり、風呂は銭湯、夕飯の惣菜は一品を多量に作り、数軒で分ける事により色々な味を楽しむことができました。また、学校から帰ると直接蛇口に飛びつき、水道に対しての不安など一切なかったことを覚えています。その後、各家庭に水道が引き込まれ、水洗化、家風呂と、大阪市内に在住していた20年の短期間で水回りの環境は大きく変貌を遂げています。

そのような中、昭和49年に豊中市に土木職員として奉職し、社会インフラの中でも重要な水道事業に従事することになります。今、振り返ると緊張感と充実感に満たされた42年間であったことが率直な感想です。

豊中市の水道事業は、昭和30年代からの人口急増に対応すべく、4次の拡張事業を実施し、量的な整備が昭和47年度に完了しました。しかし、既設配水支管の老朽化が著しく、市域全域で赤水・出水不良・漏水頻発路線が点在し、質的な整備が求められていました。その配水管整備の施工監理・設計を担当したのが水道事業への関わりのスタートです。

その後、維持管理、給水部門を経験し、平成3年度に再度、建設部門に戻り、配水ブロック化を中心とする施設整備等、計画策定が主な業務になります。しかし、各種計画書策定には施設情報の収集や加工、管網解析などに多大な時間を要していました。このことから、情報化の推進を図るため、GIS（地理情報システム）を計画立案するとともに、システム構築の主担を担うことになります。このシステム開発は平成9年から共用開始の平成17年まで8年間を要しましたが、ブロック単位の有収率管理などの維持管理の高度化だけでなく、管路更新（管路評価等）などの計画部門にも活用できる各種業務支援機能を実装したシステムをリリースすることができています。

なお、システムの内容については当時の水道産業新聞の特集により、データ構成や業務支援機能を詳しく紹介していただいたところです。その反響は大きく、各都市やオーストラリア等海外からの視察もあり、改めて貴紙の影響力の高さが窺え、広報啓発の重要性を認識したものです。

その後、技術職でありながら経営企画課長を4年従事し、経営部門を経験することになります。そして、平成20年4月には下水道の公営企業法適用に際し、組織統合を行い、下水道事業も経験することになります。また、平成22年度に技術部長、平成23年度から経営部長の重責を担うことになりましたが、この間、上下水道事業一筋に携われたことを今では誇りに思っています。

上下水道事業は、整備事業が滞ると市民生活や社会経済活動に直接影響を及ぼすため、施設の改築更新や耐震化を着実に進めていく必要があります。また、奉職当時の市内の状況を繰り返さないためにも計画的に進めていくこととしています。最後に、本市では平成29年度に事業ビジョン「とよなか水未来構想」の改訂を予定しており、総務省「公営企業の経営にあたっての留意点」に示される趣旨を取り入れ、「経営戦略」として位置付ける予定です。その際には、持続可能な事業運営を行うため、50年スパンの長期見通しを立てると同時に、施設、財政、人材といった経営基盤の強化を組織的に行うアセットマネジメント手法を本格的に実施していきたいと考えています。

大渇水が水道人生の原点に

福岡市水道局理事　案浦　徳治

水と支えてくれた方々に感謝。

今年度で人生の一つの節目の60歳を迎えます。水を縁に多くの人に支えられて、ここまで来れました。お礼を申し上げますとともに、これまでの水と歩んだ歳月を振り返ってみます。

私が子どもの頃の昭和30年代は高度経済成長期への入り口で、冷蔵庫、テレビなどが普及していく時期でした。福岡市の隣町に住んでいましたが、小さな頃から水道があったと記憶しています。特に生活用水に不自由したという記憶はありませんが、学校での部活の直後などは、のどがカラカラで、われ先にと蛇口から飲んだ水道水が冷たく、おいしかったことが忘れられません。

大学では土木工学を学びましたが、本格的な水との付き合いは、昭和53年に福岡市役所に就職してからです。入庁して水道局に配属されましたが、奇しくもこの年は福岡大渇水の年でした。連日のバルブ操作や運搬給水、お客様対応などで、水の大切さや水道の使命を知らされ、これがその後の約30年にわたる水道人生の原点となりました。

その中での一番の思い出は、当時福岡市の最大の懸案であった水源確保の業務に携われたことです。ダム開発や農業用水・下水処理水の転用、海水淡水化など多様な水源開発に携わりました。工夫して水を生み出し、現実に水道として供給できるものにしていく、とてもやり甲斐を感じる仕事でした。水資源に乏しい福岡市だからこそできたことであり、貴重な経験であったと思っています。

また、毎年のように少雨や貯水量の減少にやきもきしながら水の運用管理を行ったことも忘れられません。

そして、常に心に留め置いたことは、水源地域への感謝の気持ちです。福岡市は水源の多くを市域外に依存しています。この気持ち無くしては安定給水は無いと、心してきました。

これからは、この成熟した水道を後世に引き継ぐとともに、経験や知恵を後輩に伝えていくことが私の仕事であると思っています。

水道事業は人口減少社会の中、大量投資が必要な時代となり、たいへん厳しい事業環境を迎えつつあります。持続可能な水道を確保するためにも、自ら携わる水道事業の将来像を早急に見極め、危機感を持って臨むことが大事だと考えます。

水道産業新聞におかれては、水道界の課題や取り組みの最新情報を発信され、私も大いに参考にさせてもらいました。これからは画一的な答えがない時代であり、ますます多様な情報が必要になると思われます。今後も水道界の発展のために有為な情報を発信されることを願っています。

多くの貴重な体験をさせてくれた水とこれまで支えていただいた方々に改めて感謝を申し上げます。

技術の進歩が社会に染み透った60年

前澤工業社長　松原　正

水道産業新聞創刊60周年、心よりお祝い申し上げます。戦後の日本が大きく変化していく中で、上下水道事業の発展を水の総合紙として支えてきたことは、万人も認める社会貢献であり、その評価は全ての人の心に深く刻まれたものだと思います。今後も更なるご発展を心からご祈念申し上げます。

60年と言えばとても長い年月です。私も昭和30年9月に東京で生まれ、今年60歳を迎えましたので、そうなると御社とは同い年になるわけです。お互い頑張っているから自分を誉めましょうかね。そんな最近、時の流れをとても速く感じて日々驚いているこの頃です。

さて、この60年はまさしく成長と発展をすべての国民が実感した時代だったのではないでしょうか。私の小さい頃を振り返れば、今の子ど↖

信頼へ人材育成が不可欠

広島市水道事業管理者　高広　義明

貴紙におかれましては創刊から60年にわたり、水道に関する様々な取り組みを発信していただき、ありがとうございます。これからも水道界のアンテナとなり、その発展の礎の一端を担っていただくことを期待しています。

私の生家は片田舎で、水道がありませんでした。このため、小学校3年生頃までは、台所の水がめに水を汲んで溜めることが日課でした。当時、炊飯はかまど、洗濯は洗濯板でしたが、三種の神器よろしく、洗濯機・冷蔵庫・白黒テレビが、家のそこかしこに次々と登場してきました。

中でも嬉しかったのは、井戸にポンプが設置され、水汲みから解放されたことです。今でも私にとって、水の一滴は重くて大切なものです。その後、昭和59年に太田川を水源とした上水道が整備され、水の恵みを享受できるようになりました。

就職してから38年が経過し、そのうち35年は水道局で、残りの3年が市民局でしたので、水道については非常に愛着を持っています。35年のほとんどが総務畑でしたから、事故や事件の処理が多かったです。

平成元年には、水道施設情報管理システムの1円入札がありました。消費税の導入元年でもあったため、非常にセンセーショナルなニュースとして取り上げられ、全国のテレビや新聞、英国からもBBCが取材に来ました。落札者は結局、契約を辞退し、再発注になり、その損害賠償の事務を担当しました。損害賠償関係では、離島との間の海底管が、船のイカリでひっかけられて破損した案件もありました。

平成6年には7月から10月まで、西日本が大渇水になり、徹夜でその対応に当たる日々が続きました。昨年は局地的な集中豪雨で、大規模な土砂災害により、多くの被害に見舞われましたが、全国の皆様から多大な義援金、ボランティアによる支援をいただき、心から感謝しております。

水道は市民の暮らしや社会経済活動を支える、なくてはならない重要な役割を果たしています。しかしながら、老朽化する施設の更新、地震や豪雨などに備えた災害対策など様々な課題があります。人口減少時代に伴い、料金収入の減少傾向がさらに加速することが見込まれる中、我々は、これまで以上に、より効率的で効果的に、これらの課題に取り組んでいかなければなりません。

これからも「将来にわたって信頼される水道」であり続けるためには、何よりも人材の育成が不可欠です。これまでの経験則だけに頼るのではなく、新たな発想を生み出す創造力やそれを実現する行動力を培ってほしいと思います。

現在、多くの水道関係者が先進的な取り組みや技術開発、調査研究などを行っておられますので、これらの取り組みから多くの知見を得て、それぞれの水道事業体に合った形で柔軟に取り入れてほしいと思います。こうした取り組みの1つひとつの積み重ねが、持続的な水道構築のための基盤となります。

これからの水道を担う皆さんには、失敗を恐れずに探究心を持ってどんどん取り組んでほしいと思います。

一貫して水道事業の持続へ

日本水道協会大阪支所長　宮内　潔

小さいころは、NHKの「自然のアルバム」という番組が好きで、水をテーマとする放送もあり、将来は自然にかかわる仕事ができたらと思っていました。進路について生態研究（理学）か環境（工学）かで迷ったこともありましたが、当時の環境問題への関心の高まりから環境工学を専攻しました。

大阪市役所では、在職した37年間一貫して水道事業にかかわりました。私にとってはどの業務経験も貴重なものですが、高度浄水処理については、実験段階から需要家への導入に関するアンケート、基本設計と完成した高度浄水施設の通水まで関わることができ、給水水質を大幅に改善できたことは、本当に感慨深いものがあります。また、海外業務には若いころから興味がありましたが、ケニア、エジプト、ベトナムほか、延べ2年半程度、実際に現地で途上国の水道のレベルアップにつながる仕事もできました。

さらに、退職までの約20年間、日本水道協会が組織する様々な委員会に所属し、全国の産官学の水道関係の方々とともに、水道界の発展のための様々な仕事や交流ができたことは、私自身にとっても大きな財産となりました。今まで、これまでの経験を生かした仕事ができることは大変幸せなことで、これまでお世話になった皆様に感謝しています。

この間、水道産業新聞には仕事上継続してお世話になっていますが、上下水道分野に特化した専門紙として、これからも時宜をとらえた記事や特集などで、上下水道界を盛り上げ続けていただきたいと思っています。

私が入職したころ、大阪市ではすでに給水量のピークをすぎて、施設拡張の時代から維持管理の時代に入ったと言われていましたが、約40年経った今では、人口の減少や節水型社会の定着をはじめとする様々な背景として、日本の水道事業全体が事業規模の適正化（縮小）を行いつつ、古い施設の更新やより良いサービスをめざした様々な取り組みを、行っていかなければならない困難な時代に直面しています。

困難な状況の打開には、個々の事業体の経営効率化の努力とともに、水道の広域化が大きなテーマの一つですが、その実現のためにも、また施設更新や喫緊の課題である震災をはじめとする危機管理対策のレベルアップにも投資が必要です。水道界は結束が強く、災害時の応援対応にもみられるように、同じ水道の仕事にかかわる者に強い仲間意識があります。困難な時代であればこそ、水道事業はしっかりと将来を予測するとともに、地域で必要に応じて多様な広域化策を選択し、世代間の負担の公平化を図る上でも必要な投資を継続的に行いつつ、今後も地域に根ざした水道として持続発展を続けていかなければなりません。私も、今の立場で、少しでもそのお役にたてればと思っています。

「成長」と「縮小」時代を生きた世代

清水合金製作所社長　和田　正憲

私は、諏訪湖を源とする天竜川がその中央部を流れる自然豊かな町、伊那谷の北端に位置する辰野町に生まれました。

当時、町の上水道事業が昭和27年に創設されたばかりで水道の拡張期にありました。本当に幼い思い出なので正確な年月は覚えておりませんが、田舎のわが家に水道と電気が備わった思い出は幼い子にも衝撃的な印象でした。そして東京オリンピックに向かう世相は子どもにも世の中が変わっているとわかる程、速いスピードで進んでいきました。私達世代は「成長」と「縮小」の二つの時代を生きた歴史的にも珍しい世代かもしれません。

私が職業人として初めて水道と関わりを持ったのは株式会社キッツが給水装置事業に参入して数年後、この部門を任された時からになりま↖

60周年を迎えた「組織」「施設」「人」

全国簡易水道協議会

牧田久会長（徳島県美馬市長）に聞く

地方創生の原点は水

水道の危機の再認識を

―簡水協の60年の歩みをどう受け止めてらっしゃいますか。

牧田 60年前当時の状況は私自身詳しくは分かりませんが、地域の生活の向上と健康管理、安全・安心の観点から水道を普及せんと先人が取り組んでこられたことに違いありません。

過疎地域や中山間地域に存在する簡易水道の運営はいま、非常に厳しい状態になっています。市町村合併が進み組織も弱体化しています。上水道への統合が求められていますが、引き受ける上水道にとっても荷物になる状況。まさに、簡易水道の存亡の危機に陥っていると言えるでしょう。

今まさに〝地方創生〟が叫ばれていますが、地方創生の原点は、地方できれいな水を飲めるということではないでしょうか。安全・安心な水が供給されているからこそ、都会の人が移住してきてくれるのです。

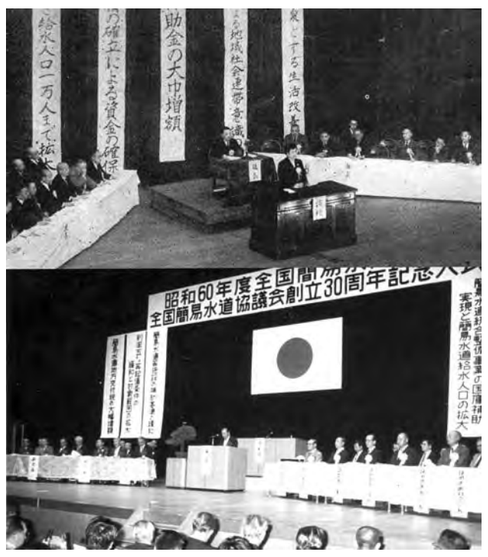
過疎地域や中山間地域

牧田 水道界の情報を常に発信し続けていただいているので、ありがたい存在です。やはり、多くの人に知ってもらわないと、水道の危機が分かりませんから。日本人は、蛇口をひねれば水が出るのが当たり前という認識が一般化しています。いま、水道が危機にあることを再認識していただくためにも、今後もしっかりPRをお願いします。

―ありがとうございました。

◇

全国簡易水道協議会は昭和30年11月に設立された（当初は簡易水道協会連絡協議会、初代会長＝時田季実・長野県豊科町長）。昭和27年度に簡易水道の国庫補助制度が創設され、都市に比べて立ち遅れていた農山漁村を中心に、簡易水道の整備を求める気運が高まっていた。昭和30年当時、水道普及率は37・7％（給水人口3368万人）だった。簡易水道が〝国民皆水道〟と農山漁村社会近代化の牽引役を担い、その役目を果たしてきた。



写真上：第1回全国簡易水道大会（厚生大臣の祝辞を代読する山下春江厚生政務次官、昭和30年11月30日、神田の共立講堂）同下：昭和60年度の創立30周年記念大会（6月5日、静岡市）＝簡易水道整備50年史より

●本紙創刊60周年記念特集号

水道技術に終わりはない

東京設計事務所 副社長 **片石 謹也**

水道産業新聞創刊60周年おめでとうございます。昭和30年北海道に生まれた私も今年で還暦を迎えました。様々な想いを述べる機会をいただいた事を大変光栄に思います。

小学校から高校までは釧路市の愛国浄水場近くで暮らしました。小学高学年の頃は、同浄水場へ新聞を届けていました。今その浄水場の更新設計に参加する機会を得て、大変感慨深い思いです。その頃、毎日のように新釧路川で魚釣りをして遊んでいましたが、数年後には、工場排水で汚染され、子どもの姿も見なくなりました。父親が、新釧路川の鮭鱒ふ化事業に携わっていた関係上、その頃河川水質等の話を聞かされた事を覚えています。その影響もあったのか、大学では、環境問題が注目されていた事もあり、衛生工学の道へ進みました。しかし、実は学部移行時は、建築が第一希望でした。その後設計事務所へ進んだのもその想いがあったからでしょうか。

丹保教授（兼任）、高桑助教授の下水研究室で活性汚泥処理を専門としていたのですが、その後の東京設計事務所では、両先生の下で学んだのならば、当然という事で水道へ配属。当時主流の下水道の道に進みたく、大変不満を覚えていたのですが、その後は水道一家にどっぷり。実に多様な水道業界の諸先輩から、技術そして人生の多くを学びました。

水道計画、施設設計と幅広く経験してきましたが、当時水道のコンサルタント技術は、あまりマニュアル化されておらず、比較的自由に、自分の考えで提案できた事が続けられた理由の一つです。

海外の業務も経験しました。エジプト大都市圏水道計画、インドネシア水道・環境トレセンなど。エジプトでは、説明時に緊張し、恐らくほとんど通じていなかったところ、局長が、「朝起きてここに来るまでのことをまず説明してくれないか?」と返され、出席者の笑いを誘ったことを覚えています。

水道の技術に終わりはなく、次から次と様々な新しい発想での対応が求められています。特に、最近では、各方面の方々と今後の水道について語る時、土木、建築、機械…といった枠ではなく、人の暮らし方、環境との接し方、社会のあり方などを起点に、水道はどう対応していくのがいいのかなどと。若い技術者とともに考える機会を数多くと、日々体力・気力維持に気を使っています。そして、楽しく未来ある水道のために、次の世代を担う学生、若手技術者を呼び寄せる努力も続けていきたいと思っています。

このような背景からも、メディアとしての新聞の役割もさらに重要になってきます。

単に上下水道業界のみならず、他の業界や、次の世代を担う学生、主婦層などのステークホルダー幅広くに興味を持たれるような記事を。そして、従来からタイムリーな話題を、幅広いコメンテーターを集め、やや見る視点を変えて特集する「特技」を今後さらに充実される事を期待しています。

↙もたちのように管理されておらず、元気に夕方まで駈けずり回っていれば親は喜んでいたように思います。汗を沢山かいて家に飛び込み、真鍮でできていた台所の蛇口めがけて、小さな身体を洗い場までエイッとジャンプさせ飛び乗り、蛇口をひねり溢れ出る水に口を横にして近づけ、ごくっごくっと飲んだことを思い出します。この頃は飲み水も井戸水と併用の時でした。トイレなどは現在のように快適さを追求するものではなく、家の端まで廊下を進み、そこにある小さな扉を開け、豆電球の明かりと風切り音に慄きながら用を足していました。そんなセピア映像の時代でした。

一方で、ひたひたと時は動いていました。私は時代を担う人々が技術開発に力を注ぎ、大きく変化させていこうという中で生きていたのでしょう。

もの心がついた頃、祖父とアポロ11号が月面着陸したのを観ていて、『おじいちゃんは明治生まれだから、月面着陸なんて驚いてひっくり返るでしょ』と言えば、祖父の口から『急に明治の時代から昭和になったわけではないから驚かないさ』と言われたのが今でも心の奥底に残っています。同じように、計り知れない技術の進歩が人々に溶け込み、驚きを与えるわけでもなく社会に染み透っていたのが、この60年であったと思います。

水に携わるすべての技術者や関係者が、長きにわたり今の時代を築きあげてきました。水を取り巻く環境は、『持続』をキーワードとして進んでいきそうですが、それを支える私たち民間企業は60年の誇りと伝統を心に秘め、次の60年に向って一歩一歩着実に時代に合った技術を万人のために創出していく使命があると思っております。その中で、水の総合紙としての御社の活躍は働くものに『夢と活力』を与えるものだと思います。

今後とも更なるご発展を祈念いたしまして、心よりお祝い申し上げます。おめでとうございました。

↙す。この事業領域は、建築設備から地下埋設の給水装置の市場に繋がる分野で、官需と民需の両方の特性を持っています。私は、この時初めて水道の世界に足を踏み入れることとなりました。このことによって、東京都水道局をはじめとする日本の水道を背負って立つ方々とお知り合いになることができ、良き先輩にも恵まれ水道のことを色々とお教えいただくことができたことが今の私にとって大きな財産となっております。

その後、平成21年から水道バルブメーカーである清水合金製作所の社長を務めさせていただき水道バルブを通じて日本の水道に少しでもお役に立てるよう努力して参りました。

着任後は鋳鉄管の出荷実績がどんどん低下し非常に厳しい市場環境のなか営業体制の強化を進めるとともに耐震化への投資と超小型の浄水装置の開発に取り組みました。浄水技術は水道界に身を置く企業として是非持っておきたい技術と考えておりました。

そんな中、平成25年新水道ビジョンが発表され小規模集落の水供給がクローズアップされてきました。当社と水道産業新聞とのお付き合いは古いのですが、特に小規模集落への水供給や災害復旧のための超小型浄水装置の有用性について事業体や学会の先生方と議論を深めてゆくことができたのは貴紙のお陰であり、無くてはならない存在となったのはこの頃です。記事の構成や正確さによって、商品のコンセプトが更に磨き上げられてゆく可能性があると感じることがしばしばありました。

さて、「持続可能な」水道の実現に向けて私どもは小さな企業ではありますが新水道ビジョンの指し示す方向性に沿った商品の開発を通して、60年を迎えられた水道産業新聞とともに精一杯貢献いたしたいと考えております。

創刊60年の長きにわたって水道界に情報と知恵を発信するメディアとして貢献してこられた貴紙に敬意を表し、これからもますます発展されることを祈念いたします。

●本紙創刊60周年記念特集号

創設60年、浄水場稼働60年の小千谷市水道事業

水道事業60年の足跡

小千谷市の上水道は、昭和30年4月に創設され、当時の計画給水人口は2万4000人、計画1日最大給水量は4800立方㍍だった。創設時の水源は地下水で、その後、昭和37年の第1次拡張事業で信濃川表流水の取水許可を得る。その後、平成3年までに5次にわたる拡張事業を推進、さらに、第5次拡張事業の変更認可により、計画給水人口4万2000人、計画1日最大給水量2万1500立方㍍の供給能力を確保した。

同市の水道の歴史において最も大きな出来事と言えば、平成16年10月に発生した新潟県中越地震。

同市の佐藤忠之・ガス水道局長は、「全国の多くの水道事業体同様に小千谷市も昭和40年代に水道施設整備が積極的に行われたため、それらの施設の老朽化が大きな課題となっていたわけですが、11年前の震災は老朽施設にさらなる損傷をもたらしました。ただし、我々はその大きな試練をバネに施策の充実を図ってきました」

と語る。同市では震災からの復興事業を踏まえて平成21年度を初年度とする10年計画の地域水道ビジョンを策定、「持続」に向けて積極的な姿勢を打ち出している。

佐藤局長

震災の教訓も糧にビジョン策定

佐藤局長は、「新潟県中越地震による水道施設被害は、避難勧告地区を除く全戸通水に5週間あまり、また、翌年の平成17年の冬には19年ぶりの大豪雪があったことも影響して給水区域全戸の通水復旧はこの年の7月までかかりました」と振り返る。

その後、同市は、平成17年7月に震災復興計画を、また、翌年1月にはまちづくりの最上位計画である『第四次小千谷市総合計画』を策定。総合計画では、小千谷市が将来像として示す「豊かな自然環境と共生するまち（都市基盤）」を進める施策の中で、上水道の整備も最重要施策の1つとして掲げられている。こうした情勢を踏まえ、水道事業に山積する課題解決に向けて今後の総合的な水道事業経営の指針とする『小千谷市水道事業中長期経営計画（水道ビジョン）』が平成21年2月に策定されている。

60年目に浄水場更新着手

震災復興踏まえビジョン策定

「小千谷市の水道ビジョンは、将来の水道を見据え、市民の皆さんが安心して暮らすことのできる『安全・安心・安定した信頼される水道』の実現を基本方針とし、4つの基本施策を明示しています」（佐藤局長）

同市の水道ビジョンで示された4つの基本施策とは、▽安全で安心できる水道▽お客さまサービスの向上▽経営基盤の強化▽環境に配慮する水道―。この基本施策を軸に今後取り組むべき施策の方向性が体系的に整理されているが、「持続」の大きなファクターとなる施設更新のあり方も明確に謳われている。

昭和30年に通水した小千谷浄水場

節目の年に浄水場更新に着手

小千谷市の主力施設・小千谷浄水場は同市の水道事業の創設施設であり、60年間市民生活を支えてきた、まさに基幹施設だ。そして、60年という大きな節目を迎えた今年は新たなスタートの年になった。

「老朽化の著しい小千谷浄水場を抜本的に更新することとし、今年から更新工事に着手しました。本体として約39億円を投じ、4年をかけて工事を進めていきます」（佐藤局長）

工業用水浄水場の敷地に建設が進められている新浄水場

基幹浄水場の更新となると、施設を稼働させながら部分的・段階的に実施するか、あるいは別用地に新施設を建設するのが大半だろうが、同市の更新は地域特性に起因する些かユニークな手法が採られている。

「当局は上水道事業に加えて工業用水道事業を運営しているのですが、その需要が鈍化して施設に余裕があり、しかもユーザーの水質に対する要求水準が高いために凝集沈殿に加えろ過施設も有しています。結果として工業用水道施設と言いながらも上水道並みのポテンシャルを持っており、用地的にも余裕があるために工業用水道浄水場の敷地内に同じスペックの施設を増強します。小千谷浄水場の現有施設能力は日量約1万8000立方㍍ですが、更新施設の規模は約1万1000立方㍍です。これは水需要動向を踏まえた現実的な判断であるわけですが、日量1万7100立方㍍に事業変更し、現工業用水道浄水施設の1系を共用して賄います」

と佐藤局長は説明する。全国的に見てもレアケースだが、ウィンウィンの施設更新になっている。現施設、そして新施設の工事現場にもご案内いただいたが、現在の小千谷浄水場は高速凝集沈殿、新施設は横流式沈殿池ということで運転管理の手法なりノウハウも変わることになりそうだ。

同市の工業用水浄水場は沈殿池に加え、ろ過施設も配備

「新施設が完成する4年後には廃止となりますが、最後の4年間もこれまで同様に市民生活を支えてくれることでしょう」

と佐藤局長は目を細める。実際に高速凝集沈殿池を見ると、躯体の老朽度は若干目につくものの、機械設備は小ぎれいで手入れが行き届いているように見える。同市においても近年は職員定数削減と市長部局との人事異動の活発化により技術継承の困難性に直面しているといい、高いスキルと運転ノウハウが求められる高速凝集沈殿池の運転には長年この浄水場で働いてきた局OBの嘱託工務員が活躍しているらしい。

60年の節目を迎えた小千谷市は「人」も「施設」も〝花道を飾る〟時期に来ていることが分かるが、それは浄水場更新という今後の都市基盤の〝胎動〟と並行してのものであることは言うまでもない。

箱根地区神奈川県営水道

町村の強い要請受け給水開始

神奈川県企業庁（神奈川県営水道）が認可を受けている水道事業は2つある。1つは県中央部の12市5町に給水する事業で、もう1つは箱根町の北側半分の仙石原地区、宮城野地区、強羅地区に給水する事業だ。箱根地区の県営水道は昭和30年1月に給水を開始している。「自分も箱根地区で勤務をした経験がありますので、給水開始60年を迎えたことは感慨深いですね」と話すのは、長谷山信一・神奈川県企業庁企業局水道部長（水道技術管理者）。

長谷山部長

企業庁が給水する前の箱根地区は箱根町、湯本町、仙石原村、宮城野村、温泉村に分かれており、町村や民間企業によって沢水を水源とした簡易水道が運営されていたが、すべての住民に安全な水道水を供給するには水源開発に多大な投資が必要であることなどから、箱根町以外の1町3村が県による事業運営を強く要望し、これを受けて県では水源となる湧水の開発や施設整備、民営水道の買収を行い、まず仙石原地区への給水を開始した。長谷山部長は「当時は液化塩素で湧水を滅菌して給水していました。その後、次亜塩素酸ナトリウムに切り替えましたが、私が勤務していた昭和50年代は、次亜製造装置を使い、塩を電気分解して次亜を製造していました。原料となる塩を運ぶのが大変ということで、現在は購入した次亜を搬入しています」と説明する。

箱根地区県営水道の平成26年度末の給水人口は6185人で箱根町の人口の約半分を占めており、一日最大給水量は26年度の実績で1万0964立方㍍となっている。なお、現在町の南半分は町営水道が給水している。

企業庁では、給水開始後も観光施設や給水人口の増加などによる水需要の増加に対応するため、水源開発を行った。最大の水源である水土野（みどの）水源では、昭和40年代に1号水源の開発を行い、平成8年には2号水源を開発し、計画処理水量1万2800立方㍍／日となった。現在の水源は水土野水源のほか、イタリー水源（計画処理水量4100立方㍍／日）、品ノ木水源（同3100立方㍍／日）があり、計画処理水量は合計で2万立方㍍／日となっている。クリプトスポリジウム対策には、平成15年度から21年度にかけて取り組んだ。イタリー水源と品ノ木水源には膜ろ過施設を整備、水土野水源には紫外線処理設備を整備した。

包括委託に注目集まる

膜ろ過・紫外線設備を整備

箱根地区では現在、「かながわ方式による水ビジネス」の一環として、「箱根地区水道事業包括委託事業」を平成26年度から実施している。途上国の水ビジネスに参加できる国内企業を育てることを目的に、県営水道の他の給水区域から独立しており、取水から給水までを行うことができる箱根地区をフィールドに工事発注や料金徴収を含めて民間に委託する水道界注目の取り組み。今年の日本水道協会の水道イノベーション賞で特別賞を受賞した。事業期間は26年1月から31年3月で、特別目的会社である箱根水道パートナーズが受託している。

日水協水道イノベーション賞で特別賞

引き継ぎ期間を経て、平成26年4月から箱根水道パートナーズによる業務が始まった。事務所となる平塚水道営業所箱根水道センターには当初、平塚水道営業所から4人の職員が常駐し業務をサポートしたが、27年1月からは常駐はなくなり、箱根水道パートナーズ単独で業務を行っている。一方で、モニタリングのため、平塚水道営業所の職員が週一回現地に向かい打ち合わせを行っている。「包括委託を行い1年半以上が経過していますが、業務は円滑に行われています。今年5月に大涌谷において火山活動が活発になり、周辺の立ち入りが規制される事態になりましたが、箱根水道パートナーズが主体性を持って安定給水の継続に努めてくれました」と長谷山部長は高く評価している。

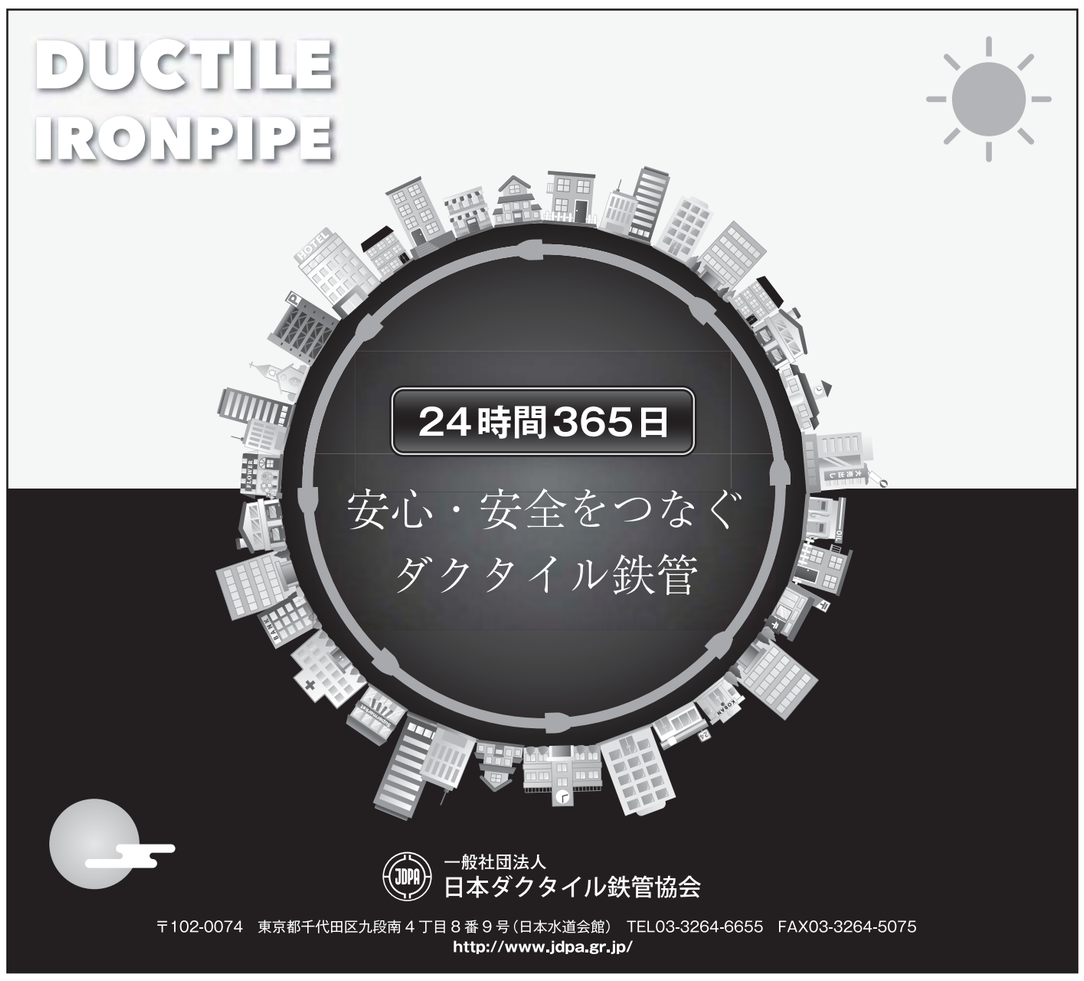
水土野水源の紫外線処理設備

この包括委託では、事業計画の策定は企業庁が行う。工事箇所や内容は企業庁が指定し、それに基づき箱根水道パートナーズが工事発注を行う。長谷山部長は「工事発注は箱根水道パートナーズが行いますが、予算は企業庁から出しています。水道事業運営の根幹を企業庁が担うことで、水道事業の『持続』は担保されています」と話す。

モニタリング手法確立し他の事業体の参考に

今後について長谷山部長は「モニタリング手法を確立することが必要です」と話す。「確立できれば、他の水道事業体での包括委託においても参考になるはずです。日水協の水道イノベーション賞を受賞したことで、この包括委託は公民連携という観点からも重要な取り組みであることを再認識しました。特に中小事業体に役立てていただけるようにこれからも情報発信していきたいと思います」。また、包括委託の実績を積んだ民間企業がさらに周辺の事業体から包括委託を受託することで、新たな形の〝広域化〟につながる可能性も指摘する。「この包括委託が、箱根地区だけではなく全国の水道の安定給水、持続性確保につながればベストだと思います」と、長谷山部長は意欲を語った。

イタリー浄水場の膜ろ過設備



●本紙創刊60周年記念特集号

さいたま市水道局南浦和浄水場

市域拡大に対応するため整備

さいたま市水道局の南浦和浄水場が竣工した当時は、急速な経済成長を迎え、合併による市域の拡大もあり、新たな給水区域への水道整備が急務となっていた。第一拡張事業（昭和29年認可）において、南浦和・高鼻・東浦和・日進浄水場が竣工した。南浦和浄水場が竣工したのは、昭和30年2月13日で、当時の施設能力は8000立方㍍／日。水源を深井戸3本に求め、取水した原水を調整池にて貯留の上、ポンプを直送配水式で給水し、主に高台の浦和市根岸、白幡、岸町と高砂地区、大谷場地区一帯に配水した。

浄水処理方式は除鉄、除マンガンのため、塩素による前処理および重力式マンガン砂ろ過機を使用していたが、昭和40年に圧力式急速ろ過に変更した。

昭和30年は、ソ連が世界初の人工衛星の打ち上げに成功した年であり、当時は給水量に対して需要量が2倍以上と、極端な水不足であった。また、この頃から需要家の公平性を期する目的と節水のため、放任給水から水道メーターを取り付けて計量給水に切り替えを行っている。給水部の老川幹男・副理事は、「計量給水への切り替えを知らせるチラシには『水飢餓が克服できない状態である』、『一滴の水は一滴の血にも当たる』という文面があり、現在のように蛇口をひねれば水が出るのは当たり前となっている状態は感慨深い」と話す。

震災時、渇水時にも活用

今後のあり方検討する時期に

給水量確保のため県営水道から受水

昭和40年代に入ると大阪万博（昭和45年）、日中国交正常化、沖縄県本土復帰（昭和47年）がある一方、右肩上がりに景気が上がり、人口増加にともなう給水量を確保するため、昭和43年には埼玉県営水道からの県水（利根川、荒川系の表流水）の受水を開始。給水量の増加だけでなく、給水区域内に多くの工場が進出したことなどから、地下水（浦和水脈）の補給を上回る地下水が使われることとなり、水位が下がり地盤沈下の弊害が出てきたことも受水の契機となった。

地下水は、非常用の水源として温存しながら水需要の確保を図ってきた。平常時はもとより、震災時、渇水時の非常時においても安定して、かつ安心して利用できる安全な水を供給することに主眼を置き、平成6年度から、より信頼性を高めるための第六期拡張事業に着手。施設の拡充、改良、配水管網の整備、震災対策などライフラインの確保を中心とした施策を進めてきた。

時代の変化とともに水質も変化

現在、場内井戸（4、5号）と場外の井戸（1、2、3号）を加えた施設能力が9000立方㍍／日となっている。東日本大震災の時には、計画停電の対象外地域であったため、影響なく給水が継続できたという。渇水や河川水質事故が発生した場合には、最大限活用できる自己水源施設としての役割もある一方、時代の変化とともに、土壌汚染により水質が劣化し、亜硝酸態窒素が基準値内であるが上昇中であることが懸念されている。

圧力式急速ろ過で浄水処理

同部の吉本俊幸・配水課長は、「同一配水ブロック内にある白幡配水場の配水ポンプ整備・更新工事が完了したことから、同配水場の給水範囲内にある南浦和浄水場の取り扱いについては、老朽化度、井戸の改修を整理し、施設の再構築の検討を考えていく」と話した。

他都市への広がりが喜びに

さいたま市水道局 給水部副理事 老川 幹男

南浦和浄水場を案内していただいたさいたま市水道局給水部の老川幹男・副理事と吉本俊幸・参事兼配水課長は、ともに今年度で還暦を迎える。現役を通じ、水道事業に携わってきた「この道一筋」のお二人に、思い出の仕事について執筆いただいた。

昭和55年（1980年）に奉職し30余年水道事業に携わってきましたが、思い出に残る仕事としては平成22年度から新規事業として立ち上げた「社会福祉就労支援事業」があります。この事業は、検診満期により取り外した水道メーターを分解し、資材を分類する作業を障がい者の人たちに就労機会を提供している授産施設に業務委託をするもので、毎年5、6万個の平形水道メーター（φ13～40）を3つの授産施設に業務委託しています。

これまでは取り外したメーターを一つの競売入札にかけて売却していましたが、売却先はメーターを分解し、再資源化できるものとできないものに分類し、メーターのメーカーなどに売却しており、一手間をかけ金属にした場合のほうが高い価格で売却されていたので、この「仕事の一手間」を切り出し、授産施設へ委託することにしました。

この事業を行うきっかけは、平成21年度にさいたま市で開催された全国水道研究発表会です。新潟市水道局が発表された「公営企業における社会福祉事業への貢献」を聴講し、当局においてもこの事業に取り組みたいと考え、新潟市水道局業務課から情報提供を得て、この情報をもとにさいたま市保健福祉障害者センターの協力を得て19の授産施設の訪問や説明会を開催し、業務の受け入れ状況を検討して3つの施設に決定しました。

経済状況の悪化により、多くの授産施設で仕事の削減や打ち切りが続いている折経営にも苦慮している状況で、施設に来ても仕事がない状況が障がい者の方にとっては一番つらいことだという話を聞き、恒常的な事業を提供できたことは水道人生の中での一番の思い出です。また、水道産業新聞社に記事が掲載されたことにより川崎市や他都市からの照会があり、事業の広がりを見せてくれたことが喜びです。

給水部での36年に感謝

さいたま市水道局 給水部参事兼配水課長 吉本 俊幸

創刊60周年、おめでとうございます。昭和54年に「さいたま市水道局」の前身となります「埼玉県南水道企業団」に就職し、36年間水道事業に携わってまいりました。年が明け3月になりますと私も人生60周年、貴紙と同じく還暦を迎えることとなります。

企業団で最初の職場は、本市で2番目の施設能力を有する「東部配水場」に配属され、交代勤務により夜間は私と業務委託の人の2人で運転管理を任され少々不安を感じたことを思い出します。その頃の配水課、また、企業団には、今を思いますと、かなり個性的な諸先輩が多数いたように記憶しています。

その後、建設課、設計課、施設課、維持管理課など、現在の給水部から離れることなく水道事業に携わってまいりましたが、なかでも「さいたま市水道事業長期構想」の策定に関われたことが印象に残っています。3カ年をかけ、基本計画、審議会、パブリック・コメント等々、初めての経験を経るとともに、年輪を重ね優しい上司となりました諸先輩方に助けられ策定することができました。

最近は、異常気象などによる自然災害が頻発しており、平成23年3月11日に発災した東日本大震災での災害支援活動が記憶に残るところですが、私の場合は、新潟県中越地震の際に応急復旧班として向かったにもかかわらず、2日間の復旧作業の後、体調を崩したうえに救急搬送され、任務を遂行できずに逆に先方に多大なご迷惑をおかけし、恥ずかしく、また、悔しい思いで応急給水班と共に帰路に就いたことを思い出します。

36年間の思い出はいろいろと尽きませんが、本年はさいたま市で日本水道協会の全国会議が開催され、水道研究発表会では座長という大役をさせていただけたことを最後の思い出に、配水課で現役を退くことができることを感謝しながら、後輩に襷を渡したいと思っています。

松原市水道事業

今年2月で市制施行も60周年

吉井部長

松原市は大阪府のほぼ中央に位置し、市域面積約16・66平方㌔、人口約12万人の都市である。今年12月で水道創設60周年を迎える一方、市制施行も今年2月で大阪府内21番目として60周年を迎えた。

吉井和彦・松原市上下水道部長（水道事業管理者職務執行者）は「市制施行と水道創設が60周年の節目を迎えることができましたのも、諸先輩方のご尽力の賜物であり、深く感謝します。私も昭和31年生まれで、来年60歳となりますが、市制と水道とほぼ同じ歴史を歩んできました。今後も近年のインフラ被災を踏まえ、緊急時対応の重要性を再認識し、持続可能な水道事業を実現していきたいですね」と感想を述べる。

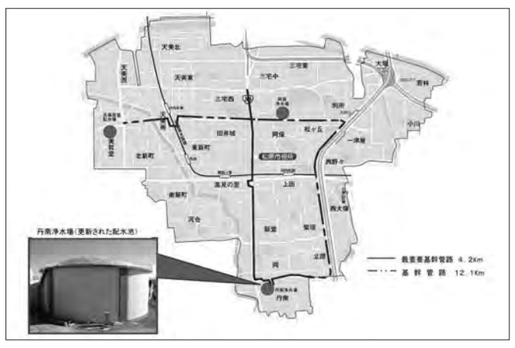
市水道ビジョンの改訂を予定

同市は平成26年度末での給水人口12万2482人、1日最大給水量4万571立方㍍、普及率100％、有収率93・8％、配水管延長460・9㌔などとなっている。

吉井部長は「本市は現在、浄水を実施しておらず、水源は大阪広域水道企業団からの受水に全量を依存しています。給水区域全体を1ブロックとする多点注入方式で、無人化した配水池からポンプ圧送で配水し、市役所内で運転・監視をしています」と説明する。

同市は平成22年度に『松原市水道ビジョン』を策定している。

『松原市水道ビジョン』に沿って、安心、安定、持続、環境の基本施策のもと、老朽施設の更新やバックアップ施設の充実などを進めてきました。しかし、給水量の減少が予測より大きいこと、また、関連事業の計画に変更が生じたことから、全体計画の見直しの必要が出てきました。そこで、平成26年度に『施設整備基本計画』を見直し、それを反映して、『松原市水道ビジョン』の改訂を予定しています」（吉井部長）



松原市内の最重要基幹管路（延長4.2km）と基幹管路（延長12.1km）の位置図

管路耐震化と施設更新推進

市の価値向上に寄与する水道へ

φ500ＰＮ形ダクタイル鉄管の挿入状況

重点事業として、市内配水量の大部分を持つ丹南浄水場の場内配水系統の複数化、基幹管路の耐震化、水質管理の充実などに取り組んでいる。

「丹南浄水場にポンプ設備を増築し、そこを基点として、最重要基幹管路の根幹をなす配水本管の耐震化（φ500、延長4・2㌔）を優先的に進めており、平成28年度末で完成する予定です。また、平成26年度に見直した『施設整備基本計画』では、水需要減を想定した配水本管の見直しと更新および重要給水施設配水管を優先的に更新・耐震化する計画としています。水質の安全性の向上と広域化の観点から、近隣市町村と共同で水質検査を実施し、精度向上を図るとともに、検査基準の標準化も実現しています」と吉井部長は説明する。

上下水道に習熟した「人財」の育成へ

今後については「重要管路の耐震化と適正な施設更新をはじめ、災害時相互応援協定や連絡管の設置、業務共同化など、近隣10市町村との連携強化にさらに努めていきます。また、まちづくりに積極的に関与し、松原市の価値向上に寄与できるような水道事業を目指します。さらに上下水道が統合して来年で10年を迎えます。上下水道事業に習熟した『人財』育成などに努めていきたいですね」と決意を述べた。

水道配水用ポリエチレン管 50～150㎜（JWWA K 144）に対応
ポリエチレン管一体型 ソフトシール仕切弁
What's New Technology!
浅層埋設シリーズ
特許出願中
● 配水用ポリエチレンパイプシステム協会規格（PTC B22）と同等の構造・性能を有しています。
● ポリエチレン管の破壊強度を超える離脱阻止力を保持し、耐震性に優れています。
● バルブ本体は多数の納入実績で実証されている、当社ソフトシール仕切弁の技術を継承し、基本性能にも優れた製品です。
● 日本水道協会規格（JWWA B 120）に準拠しています。
● 内外面エポキシ樹脂粉体塗装により、防錆・耐食性に優れています。
SHIMIZU IRON WORKS CO., LTD.
株式会社 清水鐵工所
ISO9001認証取得
〒522-0082 滋賀県彦根市安清町4番16号 TEL（0749）22-2551（代） FAX（0749）22-2542
営業所:東京・大阪・名古屋・仙台

耐震 モリタの 緊急システム搭載
電動緊急遮断弁 MEE型 UPSタイプ
特長
・弁外部に降下装置などがなく安全です。
・弁を任意の開度で停止できます。
・UPS搭載のため停電時にも安心です。
・UPSはコンパクトで制御盤も安価です。
伸縮 撓み 捩れ に対応。
モリタの伸縮バタ MB-S型 更新
面間最長時
面間最短時
特長
・配管の伸縮、たわみ、ねじれに対応。
・伸縮部の水密性は立証済み。
・狭いスペースでも施工可能で経済的。
水と人とのかかわり ― バルブのモリタ
株式会社 森田鉄工所
URL http://www.morita-tekkousyo.co.jp
本社工場 〒340-0121 埼玉県幸手市大字上吉羽2100-33 ☎0480(48)0891(代) FAX.0480(48)0137
営業本部 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-4-10 ☎03(5820)3088(代) FAX.03(5820)3081
北海道(011)756-2061(代) 仙台(022)306-0234(代) 東京(03)5820-3090(代)
長野(026)223-7066(代) 名古屋(052)856-0423(代) 大阪(06)6262-8771(代)
広島(082)568-2554(代) 九州(092)523-2071(代)

ライフラインに貢献する塩ビ管・継手 RR Long Pipe
1. 取扱いが容易で確実に「施工」できます。
2. 材料コストだけでなく、トータルコストで「経済的」です。
3. 水道用RRロング管の「耐震適合性（耐震性）」が実証されました。
離脱防止金具（耐震管路用）の協会規格を制定しました
4. 実使用品を評価し、「耐用年数50年以上」を確認しています。
✶ 塩ビ管・継手の普及・啓発活動推進中 ✶
正会員 旭有機材工業株式会社/アロン化成株式会社/株式会社ヴァンテック/クボタシーアイ株式会社/信越ポリマー株式会社/積水化学工業株式会社/東栄管機株式会社/日本プラスチック工業株式会社/日本ロール製造株式会社/前澤化成工業株式会社 （50音順）
塩化ビニル管・継手協会 〒107-0051東京都港区元赤坂1-5-26東部ビル TEL.03-3470-2251 FAX.03-3470-4407 URL http://www.ppfa.gr.jp

顧客サービスのプロとして、水道事業の効率経営をサポートします。
検針から収納に至るまで、料金に関する一連の業務を包括的に受託します。
by VEOLIA
私たちは ラインを描いています。
未収金管理業務
検針業務
窓口・受付業務
開閉栓業務
システム開発業務
ヴェオリア・ジェネッツ株式会社
03-6858-3300（代） http://www.jenets.co.jp

●本紙創刊60周年記念特集号

柏市水道事業60年の歴史を振り返る

酒井 美一 水道事業管理者 に聞く

柏市の水道事業は、昭和29年に認可を取得して工事に着手し、30年6月に地下水を水源として給水を開始、今年給水開始60年を迎えた。創設事業における当初の計画給水人口は2万人、計画一日最大給水量は4000立方㍍だった。その後、急激な人口増加と都市化の進展による水需要の増加に対応するため、6次にわたる拡張事業を行い施設の整備などを進めてきた。平成26年度末現在の給水人口は約38万4500人、一日平均給水量は10万9726立方㍍となっている。今回は、酒井美一・水道事業管理者に60年の歴史を振り返っていただいた。

水需要増加対応へ 北千葉広域水道企業団から受水

水道事業に特に大きな影響を及ぼした出来事を伺うと、酒井管理者は昭和54年の北千葉広域水道企業団からの受水開始と、平成23年3月の東日本大震災、24年5月の利根川水系ホルムアルデヒド水質事故を挙げた。

同企業団からの受水開始の背景について「当時、水需要の増加が予想されることに加えて、地盤沈下対策として千葉県環境保全条例により地下水の汲み上げが規制されることになり、新たな水源の確保が必要な状況となったことから、昭和48年に本市を含む1県7市2町が構成団体となる企業団を設立し、利根川水系江戸川の表流水を水源として、54年6月に受水開始しました」と説明する。これまで水需要の増加には受水量を増量することで対応してきた。現在の水源の比率は、地下水が18%、受水が82%となっている。

同企業団では、昨年12月からオゾン処理と生物活性炭処理を組み合わせた高度浄水処理を開始した。その効果について「以前は地下水の方がおいしいと言われていましたが、高度浄水処理の導入により、現在はまったく遜色ないおいしい水になっています。さらに、3年前の利根川水系ホルムアルデヒド水質事故と同様の事態が発生しても、企業団からの受水が停止したことにより、10時間もの間、市内全域で断水が発生する事態となった。事故の影響について「東日本大震災から約1年後というタイミングでこのような事故が起こってしまったため、特に小さなお子様のいる母親に水道への不信感を持たれてしまい、水道水をそのまま飲むことができないと思っている方が多くいらっしゃいます。水道事業者として大変心苦しい状況ですので、水道水の安全性、おいしさを認識してもらうため、様々な手法によるPRに努めていかなければならないと感じています」と語る。

ホルム事故教訓に給水体制強化

安定経営持続へ人材育成を

続けて、「当時、市内各地には災害用井戸や耐震性貯水槽など33カ所の災害時応急給水所があり、水道部と市の他部局の職員・柏市管工事協同組合が連携して応急給水所の開設・運営を行いました。しかし、人手が不足するなどで十分な体制を整えることができず、開設できた応急給水所は18カ所にとどまりました」と当時の対応状況を振り返った。

この経験を教訓として、応急給水所の整備を進め、現在は36カ所となっているほか、応急給水所の開設・運営にあたっては水道部、市の他部局・柏市管工事協同組合に加えて町会、自治会の連合組織である「ふるさと協議会」の協力を得て行う体制づくりを進めた。また、災害時に迅速かつ確実な対応を実施できるよう、今年度は12カ所で関係者が連携した応急給水訓練を行うなど、応急給水体制の強化を図った。

柏市では配水池増強など給水安定化に向けた積極性が目立つ

経営の観点からも「これまで人口は増加を続け、給水量も安定して確保でき、安定的な経営を続けてきました。現在、全国的には人口が減少して給水量は伸び悩み、料金収入も減少傾向にあるなかで、当市では今後10年は人口の増加が続くと見込んでいます。しかし、長期的な視点では当市も人口・給水量が減少傾向に転じると想定されていますので、将来にわたって水道事業を安定的に運営できるような経営体質づくりを今の時点から進めていかなければなりません」と60年を振り返るとともに今後の展望を語った。

施設の更新・耐震化が今後の課題

現在、将来を見据えた取り組みとして、柏市水道事業ビジョンの策定を進めている。「生命の水を未来につなぐ柏の水道」をキャッチフレーズに、平成28年度から37年度の10年間を計画期間として、水道事業者の最大の使命である安全な水の安定供給を持続していくための諸施策を掲げるもので、各施策の着実な実施に向け、それぞれの取り組みの目標を数値化している。

今後に向けた主な課題としては、施設の更新・耐震化を挙げている。市内の管路の総延長は1376キロで、26年度末の耐震化率は21・1%だが、37年度に35・9%まで高めることを目標としている。また、これまで配水池の耐震化を積極的に進めており、26年度末時点で耐震化率は72・3%だが、来年度から残る施設の耐震化工事に着手し、工事が完了する6年後には100%となる見込みとなっており、その後は老朽化した設備の更新・耐震化を重点的に進めていく。これら施設・設備の更新・耐震化にはアセットマネジメントの手法を取り入れ、同市独自の更新基準年数を設定し、事業量を平準化して実施していくという。

また、危機管理対策の充実も大きな課題だとして「これまでも取り組みを進めてきましたが、特に地震など大規模災害時の体制を確立する必要があります。大規模災害時には応急給水活動と併行して管路や施設の復旧作業にあたらなければなりません。特に初動時は応急給水に十分な職員数を確保できないおそれがありますので、ふるさと協議会をはじめとした住民の皆さま、柏市管工事協同組合などとのより一層密接な協力体制を構築していきます」と今後の方針を語った。

最後に、「私が水道事業管理者に就任して3年7カ月になりますが、実際に事業に携わってみることで多くの課題が見えてきました。幸いなことに、当市の水道事業は60年もの間、ほぼ安定的な経営がなされてきましたが、これは諸先輩方の努力の結果で、私たちがそれを受け継いできたことで、今に至っています。今後、後進に引き継いでいく必要があるわけですが、ベテラン職員が減っていくなかで人材育成を着実に進めていくことが肝要です」と将来にわたって事業を安定的に持続していくためのポイントとして、人材育成の重要性を強調した。

大津市膳所浄水場の60年

大津市企業局水道ガス部浄水管理センター・膳所浄水場場長 **柴原 秀樹**

水道産業新聞創刊60周年おめでとうございます。60年を記念して、建設して60年を迎える大津市の「膳所浄水場」をご紹介します。

〈**膳所城と膳所浄水場**〉

大津市には、かつて「琵琶湖の浮城」と言われた美しい水城が4城ありました。それは、大津城、近江坂本城、瀬田城、膳所城であり、この4城の中で、膳所城は明治維新まで存続した唯一の城でした。そのお城は、かつて本丸・二の丸・出丸などで完全な島となって琵琶湖に浮かんでいました。昭和30年に、膳所城二の丸跡地に膳所浄水場を建設し、その時に掘り出された地蔵尊は、現在構内北側（二の丸跡付近）に祀っています。

なお、膳所という名称は、天智天皇の大津京の時代に、ここに魚などを調理する今で言う台所が置かれていたことから「膳所」という名が付いたと言われています。

膳所城二の丸跡地に建設

全国に先駆け高度浄水導入

〈**戦後の水需要の増加と膳所浄水場の建設**〉

本市の水道事業は、昭和5年に給水を始めました。戦後の経済復興とともに、人々の生活が安定してくると、水道布設の要望が各地域から起こってきました。特に、膳所・石山地区の水需要の増加には著しいものがあり、昭和30年10月に「膳所浄水場」（施設能力5000立方㍍／日、緩速ろ過）を建設し、昭和38年には、施設能力を1万立方㍍／日に拡張しました。

昭和42年の市町合併に伴い、市勢の急激な発展による生活様式の向上、下水道の普及等に対応するため、施設能力3万7500立方㍍／日の急速ろ過池を建設し、昭和38年に拡張した緩速ろ過池（2池）を高速凝集沈殿池に改造して、総施設能力を4万5000立方㍍／日としました。

〈**琵琶湖の水質と高度浄水処理**〉

本市の浄水場は、琵琶湖を水源とし、水量の確保は比較的安定しており、恵まれた環境といえます。しかし、この琵琶湖も昭和40年代において急速な富栄養化に見舞われ、カビ臭や淡水赤潮、さらにはアオコ現象などが恒常的に発生する水質的問題が発生し始めました。なかでも、カビ臭となまぐさ臭は、異臭味障害として水道に与える影響は大きく、その対応には非常に苦慮してきました。

膳所浄水場の取水ポンプ室

これらのことから、従来の粉末活性炭設備の整備と合わせて、平成5年に全国に先駆けて高度浄水処理として、セラミックろ材による「生物処理施設」を導入しました。長年の重要課題であった水道の異臭味問題は、これにより大幅に改善され、市民に対して「自然においしい水」を作り出しています。

膳所浄水場は、現在も大津市西南部地域の主要浄水場として運用し、これからもより安全でおいしい水をお客さまにお届けできるよう努めてまいります。

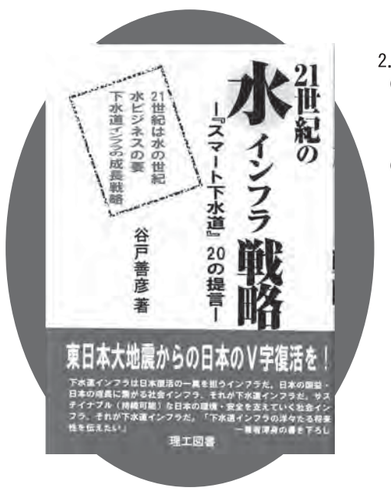
弊社は、建設コンサルタントとして国内で初めて、
ISO 55001: 2014 ※1 の認証を取得いたしました。※2
ISO9001
ISO14001
http://www.nissuicon.co.jp
潤いある未来へ
nissuicon
一般社団法人 全国上下水道コンサルタント協会 会員
株式会社 日水コン
代表取締役社長 野村 喜一
〒163-1122
東京都新宿区西新宿6-22-1新宿スクエアタワー
TEL03（5323）6200 FAX03（5323）6480
※1（アセットマネジメントシステム）
※2（水道事業部・下水道事業部・情報システム部）

65 おかげさまで65年 STEP FORWARD
グローバルに活躍する水と環境のリーディングカンパニー
NJS
一般社団法人 全国上下水道コンサルタント協会会員
株式会社NJS
代表取締役社長 村上 雅亮
〒105-0023 東京都港区芝浦1-1-1
TEL 03-6324-4355(代表)
FAX 03-6324-4356
http://www.njs.co.jp/

誠実に奉仕し
良い作品を残し
技術者を育てる
ティーイーシー
TEC グループ
一般社団法人 全国上下水道コンサルタント協会会員
株式会社 東京設計事務所
TOKYO ENGINEERING CONSULTANTS Co., Ltd.
代表取締役社長 亀田 宏
本社：〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-7-1
TEL：03-3580-2751
http://www.tokyoengicon.co.jp
株式会社 TECインターナショナル
TEC International Co., Ltd.
代表取締役社長 宮本 正史
本社：〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-7-1
TEL：03-3580-2418
http://www.teci.jp

21世紀の水インフラ戦略
—『スマート下水道』—20の提言
谷戸善彦著
A5判 284頁
定価2,160円（本体2,000＋税）

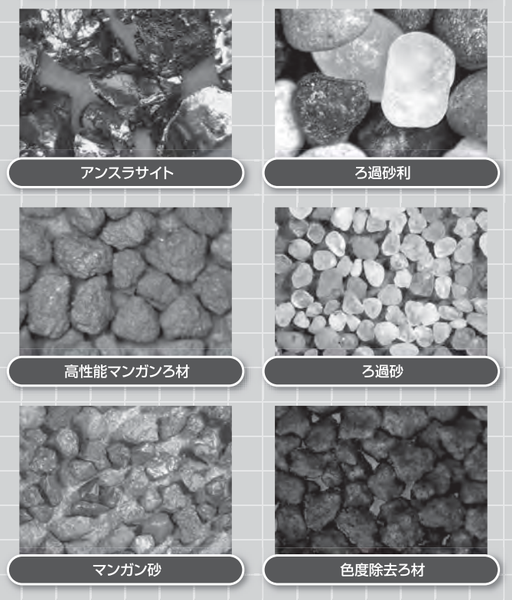
推せん
松尾友矩先生（前東洋大学学長）
田中宏明先生（京都大学教授）



1. 読者対象について
・下水道インフラ関係者のMUST READ BOOK（必読書）
・これから就職・進路を決めようとする環境・水・土木関係の学部の学生、環境・水関係に興味のある学生
・企業・官庁等で異動等により、下水道インフラ関連の業務に初めて携わる社員・職員の方
・環境ビジネス・水ビジネスに関心のある経営者・ビジネスマン
・環境・水に関心のある国民の方々にとっても「下水道インフラの真実」を知るには、格好の書

2. 本書の内容について
(1) 著者の出版意図
・下水道界を元気に←下水道関係者に対し
・下水道インフラのバリューを多くの国民に知ってほしい←国民に対し
・日本を元気に←日本に対し
(2) 本書の特徴
・著者渾身の書き下ろし
・著者独自の分析・提案による下水道インフラ「6つの特徴、10の政策課題、20のスマート下水道提言」
・「下水道インフラの過去・現在・未来」を著者独自の視点で分析・提示
・次の事項を明確に提示
①いまなぜ「下水道インフラ」に注目すべきなのか
②なぜ「日本の下水道インフラ整備」はここ40年劇的な進展を遂げたのか
③「環境・安全」への社会的ニーズの高まりに、どのように下水道インフラ政策は対応してきたのか
④なぜ我が国の下水道インフラ関連技術は革新的進化を遂げたのか
⑤下水道インフラを巡る現下の緊急政策課題は何か
⑥内需・外需両面での下水道インフラ将来に向けての需要見込み如何
⑦我が国の下水道インフラ分野が世界に誇る最先端技術とは
⑧下水道インフラ分野での「資源・エネルギー創出」最前線の動きは
⑨著者独自の視点による日本の成長戦略「スマート下水道」20の提言
⑩下水道インフラの世界からの情報発信の必要性と手法や如何に

おかげさまで創業112年
発行：理工図書株式会社
〒102-0082 東京都千代田区一番町27-2
TEL：03-3230-0221 FAX：03-3262-8247
http://www.rikohtosho.co.jp

水処理用ろ過材のエキスパート


膜の前処理／沈澱槽後のSS除去に最適
繊維ろ過材アクティファイバー

●雨天時など、原水の急な濁度変動にも対応
●逆洗水量が少なく大切な水を有効利用
●高速ろ過が可能で省スペース化を実現
●膜のライフを延命
ろ過材トップメーカー
株式会社 トーケミ
TOHKEMY CORPORATION
ISO 9001 JQA-2755
□本社 〒532-0021 大阪市淀川区田川北1丁目12番11号
電話（06）6301-3141(代) FAX（06）6308-6228
http://www.tohkemy.co.jp
○東京営業部 〒110-0016 東京都台東区台東1丁目19番2号 電話(03)5817-2025(代) FAX(03)5817-2033
○大阪営業部 〒532-0021 大阪市淀川区田川北1丁目12番11号 電話(06)6301-5627(代) FAX(06)6308-7559
○九州営業部 〒812-0008 福岡市博多区東光2丁目17番17号 電話(092)473-4590(代) FAX(092)473-4599
○名古屋営業部 〒466-0854 名古屋市昭和区広路通6丁目12番地 電話(052)752-2511(代) FAX(052)752-2633
○仙台営業所 電話(022)297-2371(代) ○広島営業所 電話(082)568-7877(代)
○北関東営業所 電話(027)330-5670(代) ○岡山営業所 電話(086)245-1152(代)
○札幌営業所 電話(011)595-8611(代) ○宮崎営業所 電話(0985)29-9388(代)
○金沢出張所 電話(076)234-1780(代)

●本紙創刊60周年記念特集号

還暦・和泉市水道事業の歩み

昭和30年9月に給水を開始

太陽光発電など先進的施策も

和泉市上下水道部長 高藤 易元氏に聞く

今年度に還暦となる高藤部長

大阪府・和泉市水道事業は昭和30年に給水開始し、今年60周年を迎えた。同市上下水道部の高藤易元部長も昭和31年2月生まれで、今年度で60歳となる。高藤部長は昭和49年に和泉市に奉職以来、水道一筋に歩んできた。60年を振り返って和泉市水道事業と水道事業に携わってきた思い出などを語っていただいた。

……

―最初に給水60年となった和泉市水道事業の歩みからお話ください。

高藤部長 本市水道は昭和28年に和泉町他2カ町村の上水道組合を継承し、同30年9月に給水を開始しました。

昭和36年には第1回拡張事業に着手し、さらに高度成長期には堺泉北臨海工業地帯の後背地としての大規模な住宅開発に伴い、第2回、第3回と拡張事業を実施し、未給水区域の解消に取り組みました。

平成4年には中央丘陵開発及びコスモポリス計画（テクノステージ）をはじめとする大規模住宅開発や工業団地計画の進展による水需要の拡大に対応するため、第4回拡張事業に着手しました。

平成11年には主要施設を24時間監視する中央監視システムを完成させ、さらに将来にわたる安定給水を図るため、現在も水道施設及び管路の整備を展開しているところです。第4拡は今年度が目標年度となっています。

―現在の主要事業といいますと。

高藤 現在、進めている主要事業につきましては、横山地区をはじめとする南部地域の安定給水の向上及び国道170号沿道の未給水区域への給水を目的に、（仮称）仏並配水場並びに仏並加圧ポンプ場の建設を平成24年度より同28年度までの5カ年の継続事業で行っています。

また本市水道事業は平成23年度に策定した『和泉市水道ビジョン』に掲げる4つの施策目標のひとつである"安心できる水の供給"などを目指し、水道施設の耐震化をはじめとした様々な事業を計画的、効率的に実施しています。

しかし、水需要の動向や社会経済情勢、さらに東日本大震災の経験を踏まえ、水道施設の老朽化などによる改築更新及び耐震化に対する整備の優先度など見直しが必要になっています。このため、計画の進捗状況や実施事業に対しての評価を行うとともに、今後実施する諸事業を改めて整理し、より効率的かつ効果的な計画を作成しているところです。

―はつが野配水場の太陽光発電システムは先進事例として注目を集めていますね。

高藤 はつが野配水場は平成4年3月認可の第4回拡張の中で、中央受配水場と並ぶ基幹配水施設として整備したものです。泉州山手線以南の都市再生機構横区域内、あゆみ野、はつが野地区、さらに周辺の中区配水区の安定給水を目的に整備し、平成11年には1号配水池が稼動しました。

2号配水池は配水場の敷地内に増築し、さらに配水場周辺への給水のため配水塔、送水ポンプなども平成26年3月に整備しました。2号配水池は、1号配水池と同様、容量は9500立方㍍です。

阪神・淡路大震災や東日本大震災以降のインフラとして、非常用給水体制の強化を図っており、2号池の完成により1号池の緊急遮断弁で応急給水用の飲料水確保が確実なものとなりました。

また配水塔は、配水場周辺地域の宅地開発による水需要を考慮し、3階直圧給水にも十分な水圧を供給できるよう高さは33㍍に整備しています。

2号配水池は、外径33・4㍍、高さ18・9㍍、有効水深12㍍で、壁厚30㌢の薄さでも水圧に耐える現場打ポステン円形PC構造を採用しています。屋根はアルミニウム合金製屋根で、骨格部分を支点に144枚の太陽光パネルを並べました。約30kWの発電が可能となり、配水塔への送水ポンプの運転に活用しています。

―高藤部長も今年度に60歳を迎えられますが、幼少時代、"水"についてはどのような思い出がありますか。

高藤 昭和39年に東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された高度経済成長期に幼少時代を過ごしました。昭和44年には名神・東名高速道路が全線開通していますが、その一方で、車社会の到来や工場からの排煙などによる光化学スモッグが発生し、海や川においても工場廃液による汚染で環境破壊が進む時代でもありました。

水についての印象は小学生の頃は各家庭に井戸があり、生活用水のほとんどは井戸です。水道が普及すると一軒の家が水道を引き、その水道を分岐して隣の家、また分岐してその隣と増えていき、炊事や飲み水は井戸水から水道水へと変わっていきました。

私が住んでいた地域の槇尾川は清浄で夏休みには魚釣りや水泳などで毎日のように川で遊んでいたことを思い出します。その近くに和田浄水場があって、槇尾川からポンプで取水していたのです。水道部に入って、浄水課に配属されて初めて水道水源だと知った次第です。

―水道事業に携われて今日までどのような仕事をされてきましたか。

高藤 昭和49年に和泉市役所に奉職し、最初は水道部浄水課の配属となりました。池上浄水場の勤務で、井戸水を原水とする浄水処理に従事しましたが、昭和51年に池上浄水場が休止となったことから、光明池を原水とする和田浄水場の勤務となりました。その後、昭和56年に水道部営業課に異動し、当時は直営で検針から水道料金調定、集金などを担当しました。現在はお客さまサービス課で全てを民間委託しています。

事務職での採用でしたが、昭和62年には水道部工務課に異動し、水道管工事CADシステムの導入で設計業務が容易になりましたので、送配水管の布設や他工事に伴う水道管の移設工事を担当しました。

続いて平成12年には水道部総務課で、電算運用係長として、総務課に配属となり、料金システムの運用とともに、その他、工務課の設計積算CADシステムやマッピングシステムなどのメンテナンスや管理を担当しました。その後、総務課長として予算決算など水道事業の経営全般に携わり、平成19年に機構改革により水道部と下水道部門が統合し、上下水道部となり、今年4月から上下水道部長に就任しています。

―特に思い出に残っている仕事といいますと。

高藤 各部署でそれぞれ思い出がありますが、水道部工務課での経験が印象に残っています。

経済成長期で泉北臨海工業地帯の後背地として大規模な住宅開発により、水道事業も急速に伸長し、第2回、第3回の拡張事業を経て未給水区域の解消とともに中央丘陵の開発やコスモポリス計画など大型プロジェクトが進行している時期でした。

私は工業高校を卒業し、初めて配属されたのが浄水課でポンプやバルブなどの機器の操作などはある程度理解できましたが、水道工事となると土木技術や水道配管などの知識が必要となるため、畑違いの私の知識では対応が出来ない状況でした。それでも、先輩や土木系技術者の後輩の熱心な指導により、何とか工事の設計から発注・施工までこなせるようになりました。

水道工事を通じて経験したことは、道路を掘削して水道管を入れる工事ですが、その工事をするまでには、公共工事の担当者や開発業者との関わり、他工事の担当者や施工業者との関わり、また、水道サービスを受ける市民の皆様との関わりなど、今まで経験しなかった多くの人たちとの協議により、一つの工事が完成することに楽しさを実感できたことが一番思い出に残っています。

また平成26年3月に上下水道部庁舎を和泉中央に移転し、その窓から見える景色の道路の下には自分が施工した水道管が埋まっていると思うと感慨深いものがあります。

将来的な課題としては、緩やかな人口の減少が進行し、今後とも給水量が減り続ける傾向と予測され、水道経営に影響を及ぼすことが懸念される一方、昭和30年から40年代の高度成長期において拡張してきた水道施設が一斉に老朽化を迎え、施設更新の必要性が日増しに高まっています。厳しい財政事情の中で事業展開を図るという高度な水道経営が求められる状況となっています。

このような状況において、持続可能な上下水道への私の思いは、施設のダウンサイジングや施設統合などの効率的な運営により、身の丈にあった事業規模を見極めて、健全経営を持続しながら出来るだけ長期に現状の上下水道料金を堅持していきたいと考えています。

―最後に和泉市水道事業と同じく60周年となりました水道産業新聞社に一言お願いします。

高藤 御社とは古くから水道事業パンフレット『和泉の水道』や『和泉市水道ビジョン』、また和泉市サービス公社を通じた『すいどうだより』の制作に関わって頂き、さらに『和泉市上下水道部ホームページ』の制作とメンテナンスをお願いしています。

これら本市との関わりの中で、貴重な資料やデータを保管していただいているとともに、上下水道業界における最新の情報などを提供していただいたり、本上下水道部のPRなども積極的に行ってもらっています。今後ともご指導、ご鞭撻をお願いしたいと思っています。

本市水道事業、私自身も今年度で還暦です。水道産業新聞も創刊60周年とめでたく還暦を迎えられました。私は42年の長きにわたり水道一筋に歩み、振り返ってみますと水道事業発展のために微力ではありますが努めさせて頂いた事を、感謝しているところです。

―有難うございました。

太陽光発電を整備した「はつがの配水場」

●本紙創刊60周年記念特集号

還暦・鹿児島市下水道事業の歩み

昭和30年、錦江処理場が供用開始

処理場を情報・エネルギー発信基地へ

鹿児島市下水道局
下水道部長
茂岡　実氏に聞く

事業と同じく還暦の茂岡・下水道部長

鹿児島市水道局の茂岡実・下水道部長は昭和30年の生まれ。同市下水道事業も昭和30年に錦江処理場の供用を開始し、60年を迎えた。「今年で還暦を迎え、下水道部で役所生活も終わりとなりますが、折しも本市の公共下水道と同じ年月を送ってきたことに感慨深いものがあります」と語る茂岡部長に鹿児島市下水道60年の歩みや主要事業などをインタビューした。

……

―最初に、鹿児島市公共下水道の歩みからお話ください。

茂岡下水道部長　本市の公共下水道事業は、終末処理場を持つ公共下水道としては、大阪以西で最初であると同時に、全国的にも戦後で最も早い昭和27年に分流式下水道として事業に着手しました。

第1次計画は、昭和27年から39年までの期間で、市街地の中心部の天文館などの繁華街や官庁街のある甲突川以北を対象に、計画処理区域面積300ha、計画処理区域内人口7万人、1日最大計画処理水量約1万9000立方㍍／日で、汚水管布設を行い、甲突川の河口左岸側に活性汚泥法による終末処理場（現在の錦江処理場）を建設し、昭和30年に一部供用を開始、全国7番目の公共下水道のある都市となりました。

その後、市街地の拡大とともに11次にわたる下水道事業計画に基づいて処理区域を拡大し、今年でちょうど60周年を迎えました。

現在の整備状況は、処理区域面積6959ha、処理区域内人口47万7900人で、普及率は事業計画区域面積7387haに対して94・2％、行政区域内人口60万4697人に対して79・0％となります。

処理施設は、錦江処理場を含めた5処理場と2カ所のポンプ場及び下水汚泥堆肥化場1カ所が稼働中で、全体の処理能力は22万8200立方㍍／日。管路延長は2127㌔、マンホール4万7668カ所となります。

―鹿児島市下水道の特徴といいますと。

茂岡　第一は、当初から分流式下水道を採用したことです。第二は、これも当初から経営に地方公営企業法を全面適用していたこと。第三は、水道局の中で上下水道一緒に事業運営を行ってきたことです。

さらに第四としては、昭和27年から41年までの15年間、水道事業の余剰金を財源として公共下水道の運営を行ってきたことです。その他にも、下水汚泥の処理処分として、全量堆肥化し緑農地還元するために有効利用していることなども特徴といえます。

事業当初から『分流式』を採用したのは、合流式下水道の整備には巨額の建設費を要することや、鹿児島市の土質がシラス土壌であることから水の洗掘に対して非常に弱く、降雨の際に土砂類の流入が多くなるからです。

雨水については昭和21年に着手した戦災復興土地区画整理事業に伴い、道路や側溝、水路などの排水施設を整備することによって排除することが可能になっていたことも分流式採用の要因です。

桜島の火山灰も、分流式下水道の汚水系統にはほとんど流れこみません。下水処理場の池にも覆蓋をしていることから放流水にもほとんど影響がありません。

もし一部でも合流式であれば雨天時に多くの火山灰を含む下水が流入し、管は詰まり、放流水の濁度も上がっていたでしょう。先人の方々の取り組みに感謝する次第です。

―次に錦江処理場の概要についてお話ください。

茂岡　錦江処理場は、鹿児島市の一番の繁華街・天文館などの甲突川以北の市街地中心部の汚水を活性汚泥方式で処理するため、甲突川河口左岸側に建設し、昭和30年11月29日に供用を開始しました。今年で60年の還暦となります。

昭和27年当初は、用地確保にあたって、住民や市議会の理解を得るために相当苦労したようで、臭いのない、周囲の環境美化も図った処理場とすることとされました。

昭和45年に、処理水量の増加やそれまで消化汚泥を天日乾燥で処理していたことなどから、エアレーションタンクと最終沈澱池の増設を計画しましたが、住民から、今までの臭い、騒音、し渣の運搬車の出入りなどの不満から増設反対運動となりました。何度も地元町内会と話し合いがもたれた結果、施設増設分は、建物を覆い、屋上は公園化して地元町内会に使ってもらうこととなりました。

ピーク時の昭和50年代前半までは4万4000立方㍍／日の処理能力を有していましたが、平成21年度に、一部廃止し、現有の処理能力は1万9000立方㍍／日です。

汚泥処理については、現在は全発生汚泥を本市最大規模の南部処理場へ圧送して処理していますが、施設の維持管理は、平成12年度から民間会社に委託しています。

平成33年度には、処理場の統廃合により、錦江処理場は全面廃止する予定です。これまでたくさんの職員が錦江処理場から多くを学び、下水道技術者として育ててくれました。そのノウハウは現在も本市の下水道施設建設や管理の礎となっています。

―今後の方針についてはどうですか。

茂岡　本市では面整備の推進により処理区域は拡大していますが、有収水量は減少傾向にあり、投資規模に対して収入が伸びない状況にあります。1件あたりの使用水量は、ここ10年間で13・0％減少しています。

これは節水機器の普及、世帯構成人員の減少や節水意識の高まり、企業の経費節減に向けた合理的な水使用の取り組みなど、近年の社会経済情勢を反映したものです。

さらに人口減少や少子高齢化が進むと予想されている中で、今後もこうした傾向は続くと思われます。

一方、昭和40年代から平成の初めにかけて集中的に整備した多くの施設がこれから耐用年数を迎え老朽化していくため、今後、老朽施設の更新にますます多額の費用が必要となります。このような厳しい経営環境にあって、国・県・市の財政も厳しく、限られた財源を有効に活用し、効率的で適切な更新や適正規模の施設整備を進めていかなければなりません。職員一人一人の危機意識の保持・高揚が一層必要となるでしょう。

そうした中、人材育成は大切です。これまで、良いにつけ悪いにつけリーダーがいました。公私にかかわらず先頭になって、理不尽を引いても功績が余る先輩がいました。だんだんと設計、施工監理、維持管理までやってきた匠や職場の主がいなくなってきますから、将来を見据えた人材育成、組織づくり、人事異動・交流を図っていかねばなりません。

本市では、中長期的な視点に立って計画的に経営を行うため、平成24年3月に『鹿児島市上下水道事業経営計画』を策定し、同33年度までの10年間を計画期間に事業展開を行っています。

経営計画に掲げた重点施策のうち主なものとしては、ソフト面では『全体計画の見直し』、『ストックマネジメントシステムの導入』、『公共下水道台帳の整備及び下水道管路情報データの活用』など、ハード面では『計画的な処理区域の拡大』、『処理場の統廃合』、『処理施設・管路施設の長寿命化』、『下水汚泥堆肥化事業』などがあります。

ハード面の『処理場の統廃合』については、平成16年度策定の全体計画に基づき、これまでの6処理場体制から、33年度には南部処理場と谷山処理場の2処理場体制とするものです。

統廃合によって更新費用の縮減や維持管理の効率化が見込めるほか、廃止対象の処理場は規模が小さく処理単価が高いため、維持管理費の縮減も期待できます。

既に錦江処理場の一部（甲系）と5号用地処理場は21年度に廃止し、現在は5処理場で水処理を行っています。現在、谷山処理場の水処理施設の2池増設工事や桜ヶ丘幹線の汚水を谷山処理場へ流入させるための谷山幹線の整備に取り組んでいるところです。

27年度末には南部処理場脇田分場と1号用地処理場を廃止し、33年度を目標に錦江処理場の乙系を廃止し、処理場の統廃合は完了する予定となっています。

廃止後の処理場の用地については、地元の方々のご意見を聞くなどして有効利用にも努めていきたいと考えています。

―還暦を迎えられて、後輩の方々にメッセージをお願いします。

茂岡　とかくに下水道業務は暗い、臭い、汚いと、晴れがないと思われがちです。職員も処理場の作業着から事務所の制服への衣替えを内心では望んでいるかもしれません。しかし、それは大きな勘違いです。職員は下水道が宝の山であることを再認識し、下水道事業に従事していることを誇りに思うべきです。毎日、エネルギー資源に転換できる脱水汚泥で約110トン、処理水では約17万立方㍍が定期的に手にはいる、そのポテンシャルの高さを活かすべきです。また、市街地に処理場などの広大な土地をはじめとして膨大な資産を先人たちは残していますから、一人一人の創意・工夫の種はいくらでも潜在しているのです。

処理施設の更新時には、市民に愛されるネーミングで、市民が訪れ憩える施設とすることや多種多様な再生エネルギー施設も織り込んだ情報・エネルギー発信基地へ変貌させるなど、新たな意気込みで、知恵を出し合い、夢を語り合って、下水道事業を推進してほしいと願っています。

―最後に茂岡部長、鹿児島市下水道事業と同じく還暦迎えた水道産業新聞に対して一言お願いします。

茂岡　水道産業新聞は、上下水道事業の国や各都市の動向や技術進展などを知ることのできる貴重な情報収集源の一つです。気軽に手にでき、重宝しています。

今後とも各都市の意見交換や宣伝PRの場として活用を期待しています。

―有難うございました。

錦江処理場（1日処理能力は1万9000㎥）

ライフラインの計画的な更新・耐震化を!!

一般社団法人 日本水道工業団体連合会
会長 木股 昌俊　専務理事 仁井 正夫
東京都千代田区九段南4-8-9（日本水道会館）
電話 (03)3264-1654㈹　FAX (03)3239-6369
http://www.suidanren.or.jp

【技術・製品・サービス情報は水団連会員へ】

【団体会員】
アルミニウム合金製屋根工法協会
SDF 技術協議会
塩化ビニル管・継手協会
給水システム協会
（一社）水道運営管理協会
水道バルブ工業会
水道用鉄蓋工業会
スワエール協会
全国 A・S 協会
全国管工事業協同組合連合会
全国コンクリート水槽防食協会
（一社）全国さく井協会
（一社）全国上下水道ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ協会
（一社）全国水道管内ｶﾒﾗ調査協会
全国ヒューム管協会
全国漏水調査協会
ダクタイル鉄管用ゴム輪協会
日本インシチュフォーム協会
（一社）日本空調衛生工事業協会
日本グラウンドマンホール工業会
（一社）日本下水道施設管理業協会
日本サブテラシステム協会
日本水道鋼管協会
日本ダクタイル異形管工業会
（一社）日本ダクタイル鉄管協会
（一社）日本銅センター
日本パイプリバース協会
日本ポリエチレンパイプシステム協会
日本レジン製品協会
配水用ポリエチレンパイプシステム協会
パルテム技術協会
ろ材再資源化促進協会

【会社会員】
愛知時計電機㈱
アウマジャパン㈱
㈱青木メタル
昱㈱
旭興産㈱
朝日鋳工㈱
アズビル㈱
アズビル金門㈱
阿南電機㈱
㈱安部日鋼工業
アルテック㈱
アンリツ㈱
㈱石　垣
石垣メンテナンス㈱
㈱磯村
岩崎電気㈱
ヴェオリア・ジェネッツ㈱
ヴェオリア・ジャパン㈱
㈱ウェルシィ
㈱ウォーターエージェンシー
㈱ウォーターテック
㈱ NJS
NTT テレコン㈱
荏原実業㈱
荏原商事㈱
㈱荏原製作所
㈱大阪防水建設社
大崎データテック㈱
岡田産業㈱
㈱オクダソカベ
㈱オーヤラックス
オリジナル設計㈱
オルガノ㈱
柏原計器工業㈱
川崎機工㈱
㈱川西水道機器
環境電子㈱
管清工業㈱
㈱管総研
岸和田ステンレス㈱
㈱キッツ
九州鋳鉄管㈱
㈱協振技建
共立機巧㈱
協和工業㈱
㈱キョーワ
㈱釧路厚生社
㈱グッドマン
㈱クボタ
クボタ環境サービス㈱
㈱クボタ工建
クボタシーアイ㈱
㈱クボテック
㈱栗田機械製作所
栗本商事㈱
㈱栗本鐵工所
㈱クレハ環境
㈱クロダイト
㈱光明製作所
㈱興和工業所
興和ゴム工業㈱
国際航業㈱
コスモ工機㈱
小林クリエイト㈱
小松電機産業㈱
西条護謨㈱
㈱ササクラ
サンエス護謨工業㈱
三機工業㈱
三協工業㈱
三幸工業㈱
㈱三水コンサルタント
JFE エンジニアリング㈱
㈱品川鐵工場
清水工業㈱
㈱清水合金製作所
㈱清水鐵工所
㈱ジャパンウォーター
㈱昭和螺旋管製作所
シンク・エンジニアリング㈱
㈱神鋼環境ソリューション
神鋼環境メンテナンス㈱
新日本設計㈱
シンフォニアテクノロジー㈱
㈱水機テクノス
㈱水研
水道機工㈱
水道マッピングシステム㈱
水ing㈱
スズテック㈱
寿美工業㈱
住重環境エンジニアリング㈱
角田鉄工㈱
住友重機械エンバイロメント㈱
㈱正興電機製作所
西部電機㈱
積水化学工業㈱
セントラル科学㈱
第一環境㈱
第一高周波工業㈱
㈱第一テクノ
㈱ダイキアクシス
太三機工㈱
大成機工㈱
㈱ダイフレックス
㈱ダイモン
タキロンエンジニアリング㈱
㈱多久製作所
㈱宅配
㈱竹村製作所
㈱タブチ
㈱中央設計技術研究所
千代田工業㈱（滋賀県）
月島機械㈱
月島テクノメンテサービス㈱
鶴巻工業㈱
㈱ティーム
㈱デック
㈱電業社機械製作所
東亜ディーケーケー㈱
東海鋼管㈱
東京ガスエンジニアリングソリューションズ㈱
東京水道サービス㈱
㈱東京設計事務所
東京都市開発㈱
㈱東芝
東洋計器㈱
東洋濾水機㈱
㈱遠山鐵工所
ドコモ・システムズ㈱
㈱トシマ
㈱トミス
㈱ナガオカ
長島鋳物㈱
中日本建設コンサルタント㈱
㈱ニイミ
㈱西原環境
日軽金アクト㈱
㈱日水コン
日鉄住金パイプライン＆エンジニアリング㈱
㈱日邦バルブ
日本ヴィクトリック㈱
㈱日本ウォーターテックス
日本エンヂニヤ㈱
日本ギア工業㈱
日本原料㈱
日本ジッコウ㈱
日本信号㈱
日本水機調査㈱
日本水工設計㈱
㈱日本水道設計社
日本鋳鉄管㈱
日本ハイコン㈱
日本フローセル㈱
日本濾研㈱
ノダック㈱
パシフィックコンサルタンツ㈱
橋本総業㈱
幡豆工業㈱
㈱光合金製作所
㈱日立製作所
日立造船㈱
㈱日立ハイテクソリューションズ
日之出水道機器㈱
㈱ PUC
福山商事㈱
冨士機材㈱
フジ地中情報㈱
フジテコム㈱
㈱フソウ
富洋設計㈱
兵神装備㈱
㈱ベルテクノ
㈱堀場アドバンスドテクノ
前澤化成工業㈱
前澤給装工業㈱
前澤工業㈱
三井金属エンジニアリング㈱
三井住友建設㈱
三菱電機㈱
三菱電機プラントエンジニアリング㈱
㈱村瀬鉄工所
明協電機㈱
㈱明電舎
明和工業㈱
㈱明和製作所
メタウォーター㈱
㈱森田鉄工所
森松工業㈱
八洲電機㈱
安田㈱
ヤマトガワ㈱
横河ソリューションサービス㈱
横手産業㈱
リオン㈱
理水化学㈱
ロトルクジャパン㈱
ワセダ技研㈱

『 信頼と正しい技術 』で
未来を創る

水と空気の環境エンジニアリング企業

三協工業株式会社　本社／東京都品川区西五反田7－20－11
フリーコール 0120－411－737　Phone:03-5496-2866(ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ) Fax:03-3495-2293
http://www.sankyo-kogyo.co.jp

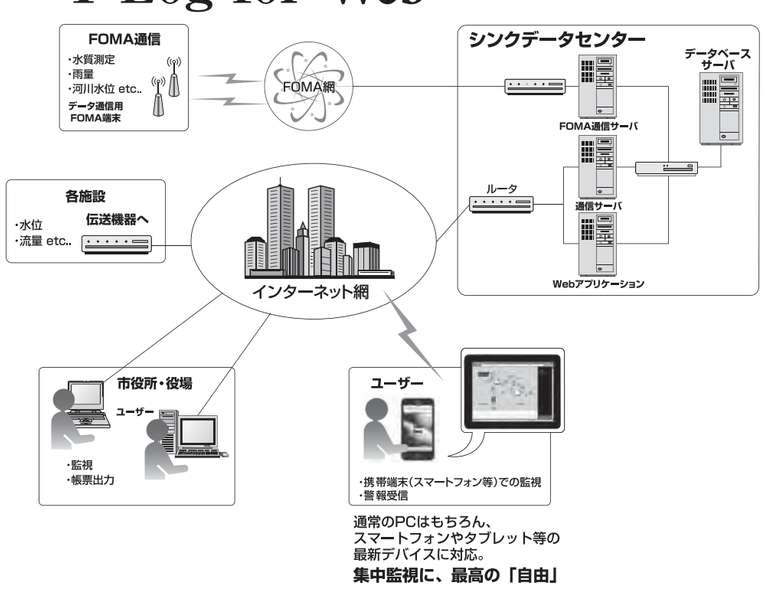
T-Log for Web

上下水道監視システム
T-Log for Web

上下水道施設監視システム「データロガ」の操作端末として、各種ウェブ端末を利用できます。

WINDOWS 搭載パソコンに加え、最新スマートフォン、タブレット等携帯端末に対応。あらゆる場所で高水準監視が可能です。

データロガの基本性能も向上、データベース機能を強化し、施設運転の最適化に貢献します。



ISO9001 認証取得 ／ ISO14001 認証取得 ／ ISO27001 認証取得

命の水と生活の水を守る
シンク・エンジニアリング株式会社
URL http://www.think-tech.co.jp/
■ 本 社　東京都目黒区自由が丘3-16-15　TEL.03-3724-7201（代）
※記載されているサービス名等は各社の登録または登録商標です。

●本紙創刊60周年記念特集号

本紙初代編集長・黒岩重吾氏の「伝説の座談会」を振り返る

～昭和34年座談会出席者の"証言"～

作家の故・黒岩重吾氏は、本紙が創刊した3年後の昭和33年（1955年）に創業者・河添佑之助の強い要請により「破格の厚遇」（本人談）で初代編集長として入社。その後、昭和35年に『背徳のメス』で直木賞受賞を機に退職するまで2年間本紙新聞制作をリードした。今やその活躍ぶりは本紙バックナンバーで窺い知るのみだが、黒岩編集長が京都大学の岩井重久教授（当時。故人）の協力を得て実施した「衛生工学を学ぶ学生座談会」に出席した当時の学生の中に元・日水コン社長の平野栄一氏、元・神奈川県内広域水道企業団副企業長の青木秀之氏と、後に上下水道分野のリーダーとして活躍したお二人が含まれていることが分かった。本紙では、両氏に本紙黎明期である当時を振り返っていただいた。

元・日水コン代表取締役社長
平野　栄一氏

元・神奈川県内広域水道企業団副企業長
青木　秀之氏

技術者の卵抱負を語る
衛生工学を学ぶ学生の座談会
真摯な理想に青春の夢
＝京大岩井教授を囲んで＝
未知の分野衛生工学
勤め人根性になるな
懸賞コント募集
一席二千円　二席千円
詩、短歌、俳句も募集

京都大学に在学中の平野氏、青木氏が出席した座談会の紙面。女性２人は奈良女子大学の学生

学生生活を振り返り

―今日はお二人ご一緒にお時間をいただき、誠に有難うございます。上下水道界で長くご活躍されていたお二人が学生時代に本紙の座談会に出席されており、我々新聞社の現役世代では「伝説」として語り継がれている黒岩初代編集長の仕事振りを「証言」いただけるものと期待しております。どうぞ宜しくお願い致します。はじめに、京都大学工学部に進学された経緯等についてご発言いただけますか？

平野　私は名古屋の出身で中学時代から歴史、特に日本史にかぶれていたので、大学の志望は文学部の史学科でした。ところが、父親に「文学部ではメシが食えない」と一喝されて（笑い）、ならば「医学部を」と言ったところ、今度は「6年も面倒は見られない」と言われ、工学部を選びました。それで、京大の理学部に親しい先輩がいて、「京都はいいぞ、来たらどうだ」と薦められて京大を受験しました。当時の京大は学科ごとに受験することになっていて、私は建築のような図面をたくさん描いたりするようなことが苦手だったので土木を選びました。入学は昭和29年です。

青木　私は父親が満鉄に勤めていたので生まれは大連ですが、戦後は東京に住んでおりました。高校時代はラグビー部に入っていて当時の強豪校とも試合をしたことがありましたが、雨の日に明治大学の八幡山グランドで試合をしていた時に背中を傷めたために長期の療養を余儀なくされ、卒業後の夏から受験勉強を始めて気分一新のつもりで京都に行きました。当時の入試の配点が他の学部と比べて英語・数学・理科が多かったこともあって工学部を選びました。特に土木を選んだ理由はありません。入学は昭和31年です。

―次に、学生生活を振り返っていただけますか？

平野　入学直後の教養部時代は、論理体系の美しさに魅せられて数学に興味を持ち、数学と物理は結構勉強していましたね。3年目から専門課程になって、土木工学とは経験を論理化していく学問だと認識し、他のいろんな分野にも首を突っ込みました。今振り返ってみると、大学というのは「学問とはどういうものか」という入り口をしっかり教えられる場所だと思っています。そして、このことで徹底的にしごかれ、論文の「てにをは」はもとより、句点の位置まで厳しく指導されました。しかも、コンピューターのない時代ゆえに全て定式解を出さねばならず、そのため、論理展開が適用可能な範囲を設定することが許されます。その代わり、境界条件とか前提条件、それらの普遍性とかデータの検証を厳しくしなければなりません。今はコンピューターが発達し、シミュレーション解析などが楽になりましたので、周辺条件も割合内部化できるようで、昔と比べて問題を取り扱う際の間口は拡がりますが、その反面、奥行きが浅くならないかと気にしています。

こうやってお話しすると勉強ばかりやっていたようですが、実際はそんなことはなく、岩井先生から「目を離すとすぐにどこかに遊びに行ってしまう」と言われて、同級の奥野君（長晴氏。元東京都下水道局部長、元滋賀県立大学教授）と先生の隣の部屋に"軟禁"されていましたね（笑い）。

就職してからは専ら下水道関係の仕事が主だったのですが、学部の卒業論文のテーマは『地下水汚染』でした。

青木　とにかく経済的に厳しい生活を送っていて、家庭教師や入試の模擬テストの採点などのアルバイトに明け暮れて学業の方は些か疎かになっていました。戦後10年以上経っていましたが、未だ食糧事情も厳しいものがあり、入学当初は「外食券」制度がありました。4回生になると学生は研究室配属になるのですが、私は志願者の少ない都市計画教室に入り、卒論は『待ち行列を用いた駐車場の設計』というテーマでした。私の在学時は衛生工学科ができる直前の時期でしたけれども、岩井先生の『衛生工学第一』、『衛生工学第二』という講義を履修しましたが、ほとんど英語で講義をされ、試験も英文でした。先生の講義で印象に残っているのは、「水俣病に関連して水質汚染は衛生工学がまとめ役になって解決したい」「水道の処理・消毒等の研究が戦争によって疎かになったので、これから力を入れるべき」とおっしゃったことで、また、淀川の水質調査は水道事業者間でしっかり連携が取られていることも教わり、これは後に神奈川県で見習うことになりました。試験の成績はあまり良くなかったと思いますが、私が水道に就職することに配慮していただいたのか「優」をいただきました。

座談会の様子

―それでは、本日の本題となります座談会を振り返っていただきたいと思いますが、お二人にはどのような経緯で座談会への依頼がなされたのでしょうか？

青木　岩井先生がひょっこり現れて「晩飯を食べさせてやるから」と言われて…。喜んで付いて行きました。確か会場は学内の楽友会館でしたね。

平野　正直、私は座談会のことについてあまり記憶がないのですが、岩井先生はいつも急に「どこそこに来い」とか「どこそこに行け」といった指示というか命令をされるのでその時も同じように言われて参加したのだと思います。

―黒岩編集長とはそれまで面識はありましたか？

平野　一度、お会いしたことがあったかもしれません。私が発表を行った研究発表会の取材に黒岩さんが来られた折に、その場で岩井先生にご紹介いただいたように思います。先生は、学界だけでなく官界や産業界など幅広い人脈をお持ちだったので業界紙に知己

印象深い岩井教授の講義…青木

論理的整理で鍛えられ…平野

↙がいらしても違和感を持つようなことはなかったですね。

青木　私は初対面でした。

―座談会における黒岩編集長の様子などについてはいかがでしょうか？

平野　それがほとんど記憶に残っていないんですよ。座談会自体、随分昔のことで覚えてなかったわけですが、こうして記事を読み返してみても当時の姿を思い起こせないですね。

青木　私も岩井先生の様子は思い出せても黒岩編集長のことは…。

平野　紙面からも窺えますが、座談会も岩井先生がリードしていたようで、その分、新聞社の人の記憶が残っていないのかもしれません。

青木　ただ、あの時に新聞社の人は、録音はもとより、メモも取っておらず、それでいて出来上がった紙面にはしっかり私達学生の語らいが再現されていたので、随分驚いたことは覚えています。

―新聞の作り手としてもメモも取らず、録音もせずというは驚異的なことで、だからこそ「伝説の座談会」なのですが…。このほか、思い出されたことがあればお聞きしたいと思います。他の出席者の方々とはその後の交流などはございせんか？

平野　残念ながらあまりありませんね。当時、奈良女子大学の学生として出席されていた木村玲子さんは後に母校の教授になられたと思いますが…。

―岩井先生の教え子だけでなく、他の大学の学生も参加されていますね。

平野　座談会の記事にも説明があるように奈良女子大学の津田松苗先生が生物学の分野から衛生工学に関わって来られたことで岩井先生と親しく交流されていました。そのことが背景にあると思います。

―お二人が黒岩編集長に会われたのはこの座談会が最後になりますか？座談会からおよそ1年経った昭和35年下期に黒岩編集長は直木賞を受賞されて本紙を退職されていますので、ほとんど機会はなかったとは思いますが…。

青木　後にも先にもあの座談会だけでしたね。

平野　私はその後も1度だけお会いしています。昭和35年4月に就職してあまり時間が経っていない頃だったと思いますが、不意に会社を訪ねて来られて30分ほどお話をしました。その会話の内容もほとんど記憶に残っていませんし、記事になったのかどうかも知りませんが…。

―それは興味深いエピソードですね。社に戻ったら、その取材記事が存在しているのかどうかを確認するように致します。

上下水道人としてのスタートは…

―座談会における黒岩編集長の印象が稀薄ということがお二人に共通しているのはこの企画を発案した者として残念な結果ですが、それでもお二人から当時の様子など興味深いお話しを多々伺うことができました。最後に、大学を卒業され、上下水道人としてスタートされた直後の時代を振り返っていただきたいと思います。平野さんは、座談会では、日本水道コンサルタント（＝現・日水コン）を就職先に選んだ理由として、「新しい会社で、自由に仕事ができると思いまして…」と発言されていますが、実際に就職されていかがでしたか？

平野　あの時、私は型にはまった生き方はしたくないと思っていて、特に役所には行きたくないと思っていました。それで、実際に新しい職種であるコンサルタント会社に就職したわけですが、それまで教えられ、自分としても懸命に努力して学んだ「論理」が通用しない実学の世界であることが分かり、入社早々に価値観がガラッと変わりましたね（笑い）。それまで勉強してきた論理体系の枠に収まらない広い世界で「解」を出さねばならず、1つの単位、1つのパラメーターに「換算できない」もどかしさがコンサルタントの実学にあることを強く実感させられたわけです。

例えば、「建設」と「維持管理」それぞれに異なる価値観があり、モノを造るだけでなく動かさなければならない。すなわち、施設の竣工式は終わりではなく、新しいスタートラインになるわけです。そして、そのような現実から我々が抱く価値観というのは、施設整備なり事業運営の段階ごとに変わってくるのです。この辺りは大学で学ぶことのできるものではありませんが、それでも論理体系について厳しく指導されていたからこそ、実学に触れて得られた価値観も認識した上で仕事に臨むことができたとは思っています。

―青木さんは、座談会で「私は上水道の方へ進みますが、うんと勉強して大きな立場で物を見るエンジニアになりたい」と発言されていますが、実際、神奈川県内広域水道企業団のリーダーとしてその夢を実現されたと思いますが…。

青木　今、改めて私が横浜市水道局に入局した時の上下水道事業をデータで見てみますと、水道は市街地では普及しておりましたが、下水道はほとんど未普及という状況にあり、人口が約140万人で普及率77％ですので、何と約32万人の市民が水道のない生活をしていたわけです。今では信じ難いことですね。横浜市水道局に入って、最初は工業用水道の施設整備、その後は小雀浄水場の整備に代表される横浜市の拡張事業に関わることで水道技術者として貴重な経験を積むことができました。その後、神奈川県内広域水道企業団に移り、酒匂川の開発、宮ヶ瀬ダムに関わる仕事に携わることができたのは幸運だったと思っています。

―「技術者の卵抱負を語る」と題したこの座談会が行われたのは本紙が創刊して4年目のことですが、それから半世紀以上が経過し、座談会の出席者が実際に上下水道分野をリードされたことは、手前味噌ながら初代編集長の慧眼を感じずにはおれません。本日は興味深く示唆に富んだお話を多々伺うことができました。有難うございました。

後記

お二人に共通して黒岩編集長の印象が稀薄というのは、岩井教授の存在感を差し引いても不思議な気にさせられる。敢えて黒子に徹するような意図があったのかもしれない。また、平野氏の入社後に改めて取材に訪ねて来たことも興味をそそるものがある。早速、社のバックナンバーのデータベースで検索してみたが、該当しそうな記事は未だに見つかっていない。座談会出席者の中でも意欲的・積極的な発言の目立った学生の後日談でも取ろうとしたのか…。初代編集長の行動はミステリアスだ。

（編集長・福島）

更生工法で耐用年数が伸びる
さまざまな場面で活躍するパルテム工法　困ったとき、ご相談ください
パルテム®
管更生工法を創生して38年目
反転工法
ホースライニング工法
形成工法
パルテム SZ工法
パルテム フレップ工法
製管工法
パルテム フローリング工法
ひとつの協会となり10年目
管更生の協会を創立して32年目
下水道管路の更新とともに・・・
環境・循環・暮らし・安全・水
パルテム技術協会
Paltem Systems Assosiation
http://www.paltem.jp/
本部事務局　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2丁目6番9号 佐藤産業ビル
TEL(03)5825-9455　FAX03(5825)9456
北海道支部／東北支部／関東支部／中部支部／関西支部／中国・四国支部／九州支部

水圧
流量
データ蓄積
DLS-H21
UFP-20
管路の維持管理には、管路の現状把握が不可欠です
管路の現状把握は、データ収集から
音圧
流方向
フジ維持管理機器で管路の健康診断をはじめませんか？
LNL-1
FLD-200
それぞれに最適な ご提案を致します
ISO 9001 認証取得（QM4215）
管路システムのサポートメーカー
フジテコム株式会社
http://www.fujitecom.co.jp/
本社　〒101-0025
東京都千代田区神田佐久間町二丁目20番地
翔和秋葉原ビル3階　☎(03)3862-3196
札幌☎(011)864-9511　北日本☎(022)222-2011　東京☎(03)3865-2960　信越☎(026)232-3521　中部☎(052)933-4891　大阪☎(06)6362-6755　広島☎(082)261-0939　九州☎(092)474-3225

水道産業新聞・創刊60年～創業から現在までを紹介～

水道産業新聞社は、河添佑之助が昭和30年11月３日に創業し、様々な変遷を辿りながら今日まで新聞発行を継続してきた。また新聞部門と、もうひとつの柱となる企画出版部門では、上下水道事業体や各種団体の広報パンフ・ＤＶＤの制作、イベント企画事業なども展開している。水道産業新聞の創業時のエピソードとともに、企画制作部の事業、さらに昭和34年から開催する『水の写真コンテスト』、本社が事務局を務める関西ウォータークラブ、「健康のため水を飲もう」推進運動などの諸事業を紹介する。

●本紙創刊60周年記念特集号

小冊子『水道産業新聞』に見る創業当時

河添佑之助は「創業からの記録を残しておくことは、創業者の義務と思う」という書き出しで、小冊子『水道産業新聞』（平成22年発行）をまとめている。創業時の苦闘や人間模様について思い出すままに書き連ね、弊社唯一の、貴重な社史となっている。この小冊子から、創業時のエピソードなどを拾っていく。

……

創業前、河添は、水道管路関連の営業をしていた。「どうしても商売は私の性に合わない」と思い、水道の知識を生かした新聞発行の構想を始める。しかし、生活の安定したサラリーマン生活をなげうっての転職は妻や親戚から大反対だった。当時、幼子が3人いた。

それでも、ジャーナリズムへの憧れは強く、昭和30年11月3日に水道産業新聞社を立ち上げた。

事務所は大阪市西区の立花通商店街にある堀江ビルの3階を借りた。「戦災の焼け跡もなまなましいほろビル」だった。

河添の義兄が営業を手伝い、創刊号、2号と順調に発行し、3号目の印刷に入った時、印刷所が全焼する。印刷所の社長からは「くじけないでください。初めからやり直しましょう」と逆に励まされたという。新しい印刷所を紹介してもらい、徹夜で原稿を書き直してなんとか発行日に間に合わせた。

昭和30年11月３日付け創刊号

戦災の焼け跡生々しい大阪で

初代編集長に黒岩重吾氏

半年ほどで、社業は軌道に乗り、社員を雇うことも可能になった。

営業、編集の増員を図り、安定してきたなか、大学予科の同級生・黒岩圭吾が訪ねてくる。圭吾は夜間中学の英語教師をしていた。昼間は暇ということで、社長訪問の連載記事を引き受ける。その時、圭吾は「ひとつ頼みがある」と切り出す。「大阪の釜ケ崎に巣くって小説を書いている兄も一緒に雇ってくれないか」というのだ。この兄が初代編集長となる黒岩重吾だった。

河添と会った重吾は「夜中は小説を書いている。これまでの経験を活かし、きめ細やかな運営などにも携わっている。

上下水道事業に関する住民意識調査なども行い、細分化する使用者の情報を把握し、今後の事業展開に役立つ情報を提供している。

その他、当社の情報収集能力を活かし、上下水道年史の資料収集・編纂・制作業務や、散逸しがちな各種情報のアーカイブ制作、上下水道年鑑や専門分野の書籍発行なども行っている。

また、厚生労働省にご後援いただき、「健康のため水を飲もう」推進運動などのキャンペーンを行い、水道に対する住民の意識レベルの底上げにも寄与している。

このように複雑化する訴求対象者に対し個別の広報展開を行うことはもちろん、上下水道事業の広報トータルプランニングも行っている。

水道事業運営に関し情報提供量が増えているにも関わらず、既存の広報媒体だけで理解・周知いただくことは困難であると考えている。そこで、当部ではエンドユーザーに対してさらにきめ細かな広報を行えるよう、また、上下水道業界の皆さまへ様々な媒体をプロデュースできるよう日々研鑽を重ね、業界の発展の一助となるべく日々活動している。（企画出版部）

大阪市西区・堀江ビルからスタート

企画出版部

企画出版部は、昭和35年9月、伸び続ける上下水道事業を住民に分かり易く伝え、円滑な上下水道事業の一助となるべく誕生した。

業務内容として、上下水道事業体や企業、業界関連団体のオリジナル広報の制作、事業紹介パンフレットや広報紙・機関誌の作成・発行を行い、上下水道専門紙の観点から幅広い年齢層の訴求対象にも的確に事業の情報をお知らせしている。

また、ＤＶＤなどの映像制作も手掛けており、映像で分かり易く上下水道事業を理解してもらえるよう構成し、あらゆる広報シーンで活用していただけるよう制作に尽力している。さらには、オリジナルホームページの制作・運営も行っており、各種広報媒体を総括した広報のネットワークを構築している。

上下水道に関するイベント・展示の企画・立案

事業体や企業の広報紙制作など

イベント・展示の企画立案も

上下水道事業体のパンフレットなど

ＤＶＤの映像制作

イベント時の展示を企画

Be Alive City-Life　TOMISU
“トミスは新しい都市環境創りをめざし日々躍進しております。”
株式会社トミス
代表取締役　戸簾　俊久
本社 〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-15-5
TEL.03(3370)6107(代) FAX.03(3370)7686
URL http://tomisu.info

水・水・水なんでもどうぞ
—水処理総合プラント—
横手産業株式会社
代表取締役　横手政英
本社：大阪市淀川区西中島4—2—21
電話：06（6308）7493

埋設管の維持管理に
中間軸〈D.I.S〉
DEPTH INVESTIGATION SHAFT
L=30cm (3.64kg)　L=50cm (4.79kg)　L=70cm (5.65kg)　L=100cm (7.20kg)
管路の防災対策には中間軸の整備が必須です！備えあれば憂いなし
※情報タグ埋込型中間軸やフリーサイズ中間軸、心ズレ・傾斜角補正中間軸をはじめ、バルブキー、マンホールキーなど関連商品も取り扱っています。
いいもの いつまでも・・・・
仕切弁用各軸中間軸（継足キー）・各種回栓キーのご用命は
日本水道工業団体連合会会員
株式会社ティーム
〒700-0945 岡山市南区新保105-8
Tel. 086-225-7555 Fax. 086-225-7017
ホームページ http://www.t-eam.co.jp
Eメール dis.kt@t-eam.co.jp

水道管洗管SCOPE工法
不断水挿入式 管内調査カメラ
日本水機調査株式会社
代表取締役社長　山本　政和
本社 〒673-0023 兵庫県明石市西新町2丁目12-22
TEL.078-927-0301 FAX.078-927-0303
関東営業所 〒327-0831 栃木県佐野市浅沼町373 サニーハイツⅡ103号室
URL http://www.jwmi.co.jp E-mail suiki@jwmi.co.jp

mopit シリーズ
MORIMATSU
ステンレス配水池のパイオニア
mopit-XT 高低差のある地域にも対応
mopit-P 設置場所を選ばない設計が可能
mopit-X 画期的な短工期
mopit-AT 震災時に無くてはならない水を確保
優れたメンテナンス性　安定した品質　優れた施工性
mopit-Z 美しさと機能を兼ね備えた 10,000㎥
森松工業株式会社
水道事業部 〒501-1205 岐阜県本巣市曽井中島2223-1
TEL(0581)34-4211 FAX(0581)34-4110
http://www.morimatsu.co.jp
本社／TEL(058)323-0333　福岡支店／TEL(092)724-3060　金沢営業所／TEL(076)263-4001
東京支店／TEL(03)5360-3551　東北営業所／TEL(022)727-7501　広島営業所／TEL(082)568-8511
名古屋支店／TEL(052)222-3456　北関東営業所／TEL(048)447-8068　高松営業所／TEL(087)866-3681
岐阜支店／TEL(058)323-0336　長野営業所／TEL(0263)40-2120　宮崎営業所／TEL(0985)47-3050
大阪支店／TEL(06)6100-2055　静岡営業所／TEL(054)275-2125　鹿児島営業所／TEL(099)219-1801

水源から浄水まで！
トータル“水”ソリューション
株式会社ナガオカ
代表取締役社長　三村　等
本社／大阪府泉大津市なぎさ町6番1号（きららセンタービル）〒595-0055
Tel.(0725)21-5750(代表)　Fax.(0725)21-2266
東京営業所／東京都港区浜松町2-5-3（ニュー浜松町ビル）〒105-0013
Tel.(03)3434-0694　Fax.(03)3434-0330
URL：http://www.nagaokajapan.co.jp

ユーザーの視点にたった開発製品
～維持管理専門業者がみなさまにご提供します～
「総合施設管理」
最小点数機器のサイズ：幅400×奥行200×高さ400
「地理情報」
～スマートメンテナンスの必需品～ 遠隔監視装置「TENJIN」
～アセット・長寿命の必需品～ 「総合施設管理」「地理情報」
日本メンテナスエンジニヤリング株式会社
〒530-0035 大阪市北区同心一丁目7番14号　URL：http://www.jme-net.co.jp/
電話 06-6355-3000(代)　FAX 06-6882-5568

Ecologically Clean
おいしくて安全な水道水づくり
Ecologically Clean
オルガノ
本社 〒136-8631 東京都江東区新砂1－2－8 TEL. 03－5635－5180

時代の要請に応える
環境ソリューション企業
株式会社神鋼環境ソリューション
取締役社長　粕谷　強
本社 神戸市中央区脇浜町1丁目4－78号 TEL(078)232-8018
東京支社 東京都品川区北品川5丁目9番11号（大崎MTビル） TEL(03)5739-5809
大阪支社 大阪市中央区備後町4丁目1-3（御堂筋三井ビル） TEL(06)6206-6751
九州支社 福岡市博多区博多駅中央街1-1（新幹線博多ビル） TEL(092)474-6565
北海道支店 札幌市中央区北四条西5丁目1-3（日本生命北門館ビル） TEL(011)241-4647
URL:http://www.kobelco-eco.co.jp

エアーバッグ式止水工法
スピーディ、コストパフォーマンスが評価され、
5,000件/年の施工実績
ストップ
配管を素早く止めて
高圧用を新開発
0.7MPaに対応
(∅75、∅100、∅150)
エアーバッグ
株式会社クロダイト
URL http://www.kurodite.co.jp/
営業本部 愛知県高浜市八幡町1丁目1番地1 電話(0566)53-0901
東京営業所 電話(03)5284-3609　札幌営業所 電話(011)722-3343
大阪営業所 電話(06)6309-5033　仙台営業所 電話(022)283-5959
福岡営業所 電話(092)731-8224

●本紙創刊60周年記念特集号

水道産業新聞 60 年のあゆみ

年代	水道産業新聞社　関連	その他
昭和 30 年（1955 年）	・河添佑之助が上下水道、工業用水道、簡易水道に関する専門紙「水道産業新聞」を創刊（11 月 3 日）	・全国簡易水道協議会設立
昭和 32 年（1957 年）	・法人化　株式会社水道産業新聞社設立（11 月）	・水道行政三分割 ・水道法制定
昭和 33 年（1958 年）	・東京支社を開設（1 月）	・下水道法制定 ・工業用水道事業法制定
昭和 34 年（1959 年）	・水道産業名鑑（現在の水道年鑑）を創刊（4 月） ・第 1 回水の写真コンテスト（7 月）	・第 1 回水道週間の実施
昭和 35 年（1960 年）	・各種宣伝、広告企画の立案・制作及び印刷業務を開始（9 月）	
昭和 38 年（1963 年）	・名古屋支社を開設（11 月）	
昭和 39 年（1964 年）	・水道産業新聞を週 2 回（月・木曜）発行とする（2 月）	・日本下水道協会設立
昭和 41 年（1966 年）		・日本水道工業団体連合会設立
昭和 45 年（1970 年）	・水道産業新聞 1000 号（2 月） ・小林康彦著「水道入門」を発刊（2 月） ・英文誌「ウォータージャパン」第 1 号を発刊（12月）	・下水道法改正
昭和 46 年（1971 年）	・下水道年鑑を創刊（7 月）	・建設省下水道部設置
昭和 47 年（1972 年）		・下水道事業センター（現在の日本下水道事業団）設立
昭和 52 年（1977 年）	・小林康彦著「新水道入門」、栗林宗人編「新下水道入門」を発刊（4 月）	・水道法改正 ・第 1 回水の日・水の週間の実施 ・下水道事業推進議員連盟が発足
昭和 55 年（1980 年）	・水道産業新聞 2000 号（9 月）	
昭和 56 年（1981 年）		・日本下水道施設業協会設立
昭和 60 年（1985 年）		・全国上下水道コンサルタント協会設立
昭和 62 年（1987 年）	・東京支社を港区芝浦 2 丁目へ移転（12 月）	・近代水道 100 周年記念式典が開かれる
昭和 63 年（1988 年）		・水道管路技術センター（現在の水道技術研究センター）設立
平成 4 年（1992 年）	・創業社長 河添佑之助勇退、相談役に就任（10 月） ・第二代 代表取締役に田川憲彦就任（10 月） ・水道産業新聞 3000 号（1 月）	・下水道新技術推進機構（現在の日本下水道新技術機構）設立
平成 6 年（1994 年）	・「水道・21世紀へのビジョン」を発刊（4 月）	
平成 7 年（1995 年）		・阪神・淡路大震災が発生
平成 10 年（1998 年）	・「水道法改正の解説」を発刊（6 月）	
平成 14 年（2002 年）	・第二代代表取締役 田川憲彦勇退、相談役に就任（4月） ・第三代代表取締役に赤木嶺夫就任（4 月）	・水道法改正
平成 15 年（2003 年）	・水道産業新聞 4000 号（7 月）	
平成 16 年（2004 年）	・東京支社を港区芝浦から現在地に移転（2 月） ・東京支社を「東京本社」に呼称変更（8 月） ・中国向け上下水道情報誌「中日水務信息」を発刊（9 月）	・厚生労働省が「水道ビジョン」を公表 ・新潟県中越地震が発生
平成 17 年（2005 年）	・創刊 50 周年記念シンポジウム（大阪・東京）を開催（11 月）	・下水道法改正 ・国土交通省が「下水道ビジョン 2100」を公表 ・全国簡易水道協議会が創立 50 周年
平成 18 年（2006 年）	・「下水道ビジョン 2100」を発刊（5 月） ・石丸浩著「水音～水の語り部が綴る 水のちょっといい話」を発刊（3 月）	
平成 19 年（2007 年）	・第三代代表取締役 赤木嶺夫退任、会長に就任（10月） ・第四代代表取締役に西原一裕が就任（10 月）	・新潟県中越沖地震が発生
平成 23 年（2011 年）		・東日本大震災が発生
平成 24 年（2012 年）	・「全国浄水場ガイド 2012」を発刊（8 月）	
平成 25 年（2013 年）	・「水道資機材総合事典 2013」を発刊（7 月） ・大阪本社を北区堂山町から現在地に移転（8 月） ・熊谷和哉著「水道事業の現在位置と将来」を発刊（10 月） ・大津孝雄著「水音～ 360 文字で綴る 水のちょっといい話」を発刊（11 月）	・厚生労働省が「新水道ビジョン」を公表 ・自民党の水道事業促進議員連盟が発足
平成 26 年（2014 年）	・「東日本大震災　水道施設被害状況調査最終報告書」を発刊（3 月） ・「下水道資機材・工法総合事典 2014」を発刊（7 月）	・国土交通省と日本下水道協会が「新下水道ビジョン」を公表 ・水循環基本法施行 ・日本下水道協会が創立 50 周年
平成 27 年（2015 年）	・水道産業新聞 5000 号（6 月 15 日） ・「管路データ集 2015」を発刊（8 月）	・「水防法等の一部を改正する法律案」が成立

水の写真コンテスト

水道産業新聞社主催（水道週間協賛事業）の『水の写真コンテスト』は、1959年にスタートし、今年（2015年）は第57回目となった。半世紀に及ぶ同コンテストの歴史は日本の水道普及と軌を一にし、水道界や写真愛好家の方々に浸透したイベントとなっている。

昨今、環境意識の高まりの中、市民の方々の「水」に対する関心が高まりを見せており、水道産業新聞社ではこのような状況の中で、『水の写真コンテスト』を「水道」あるいは「水」について多くの方に考えてもらう「きっかけ」にしたいと開催している。さらに市民の方と水道事業体はじめ「水」問題に関心を持ち活動する様々な団体・企業が出会い、繋がる「場」としても位置づけ、今後も積極的に展開していく方針だ。

写真コンテストの審査に当たっては、写真家の丹地保堯氏が審査委員長を務める。丹地氏は長年にわたり「水」や「森」など自然と向き合い独自の境地を切り拓いてきた写真家。写真のみならず、カレンダーの制作でも数々の賞を受賞されているほか、「写真画」という新たなジャンルの開拓にも取り組んでいる。

写真応募に当たっては、毎年、募集のポスター、チラシを制作。全国の水道事業体、関連団体、スポンサー企業に配布し、ポスターの掲示とチラシの配布を依頼するとともに、水道産業新聞紙上、写真専門誌「フォトコン」やインターネット上のコンテスト情報サイト、全国の「富士フイルム・フォトサロン」で、コンテストの開催をPRしている。

横浜市の京急百貨店で展示（2014年度作品）

毎年4月下旬から、後援団体、協賛企業への協力要請を開始、5月中旬から応募のポスター、チラシの制作と配布、6月から作品の募集を開始する。9月初めに作品応募を締め切り、9月末の審査会においてグランプリを初め、日本水道協会全国会議開催地の水道事業管理者賞、水道産業新聞社社長賞、特別賞、入選、佳作など選考する。

第57回は応募総数は2985点となった。

なお、前回の第56回（2014年）の入選作品は、2014年10月29～31日に名古屋市で開催された平成26年度日水協全国会議（水道研究発表会）会場で展示したほか、2015年1月26日～2月10日に横浜・みなとみらいリーフ「モンベル」、2月26日～3月11日に横浜・京急百貨店、3月20日～4月8日に横浜水道記念館、6月の水道週間期間中に東京・飯田橋のショッピングセンター「ラムラ」でそれぞれ展示し、好評となった。

第57回入選作品も水道産業新聞紙上で発表の後、2015年10月21～23日にさいたま市で開催された平成27年度日水協全国会議（水道研究発表会）で展示したほか、昨年同様に各所で展示する予定になっている。

第57回『水の写真コンテスト』の後援は▽厚生労働省▽日本水道協会▽全国簡易水道協議会▽日本水道工業団体連合会▽水道技術研究センター▽給水工事技術振興財団▽全国上下水道コンサルタント協会―。協賛は▽石垣▽クボタ▽栗本鐵工所▽コスモ工機▽小松電機産業▽ヴェオリア・ジェネッツ▽清水鐵工所▽第一環境▽大成機工▽宅配▽月島機械▽日本ダクタイル鉄管協会▽日本鋳鉄管▽日之出水道機器▽フジテコム▽ライフライン情報社▽フジ地中情報▽ベルテクノ▽前澤工業▽森田鉄工所▽森松工業▽リコーインダストリアルソリューションズ▽富士フイルムイメージングシステムズ▽日本写真企画―。

「健康のため水を飲もう」推進運動

水道産業新聞社は『「健康のため水を飲もう」推進運動』の推進委員会事務局を務めている。

水の摂取量が不十分であることから、生徒・児童を中心に、熱中症による死亡事故が後を絶たず、また中高年で多発する脳梗塞や心筋梗塞なども水分摂取量の不足が大きなリスク要因になっている。

甲子園球場でポスター上映

そうした中、『健康のため水を飲んで、熱中症や脳梗塞など重大な事故から尊い人命を守る』を主旨として、2007年に「健康のため水を飲もう委員会」を10人の発起人で立ち上げた。委員長は、発足以来、武藤芳照・日本体育大学日体大総合研究所所長（発足当時・東京大学大学院教授）が就いている。

同委員会では、厚生労働省局水道課の提言・指導により、健康のため水を飲むという習慣を広く全国に普及させるための運動を展開。水道水など身近にある水の大切さを再認識し、水をこまめに飲むことの効用を訴えるためのポスター制作を行い、全国の官公庁掲示板・学校・保健所などの公共施設等に掲示し、啓発活動を展開している。

日本高等学校野球連盟と連携し、夏の全国高等学校野球選手権大会では甲子園球場のバックスクリーンフリーボードにポスターを上映し、注意喚起のアナウンス放送も行うほか、日本水泳連盟などのスポーツ団体とも連携している。

「健康のため水を飲もう」推進委員会の委員は厚生労働省、日本水道協会、日本水道工業団体連合会、日本高等学校野球連盟、日本体育協会、日本水泳連盟など。

関西ウォータークラブ

水道産業新聞社が事務局を務め、同社大阪本社内にKWCサロンを有する関西ウォータークラブは、水関連の事業体や企業に携わる人々の総合クラブとして1963年9月に創立した。

50周年記念式典

設立総会時の会員数は個人会員23人、団体会員45人の計68人。初代理事長は大阪市水道局長だった清水清三氏、専務理事は水道産業新聞創業者の河添佑之助、理事は当時の大阪府水道部長・沢竹慶三氏、奈良市水道局長・岩野政一氏、さらに久保田鉄工、栗本鐵工所、浄水工業所、住友金属工業、横手産業で構成した。設立当初の事業は隔月での定例会のほか、臨時会（研究会、懇談会）、同好会などを行った。同好会は、浄水場を背景に使った撮影会や国内外の旅行なども行っていたが、現在はゴルフ、囲碁などを通して、会員の親睦を図っている。

創設総会の後、創立10周年祝賀会、30周年記念式典、40周年記念式典、50周年記念事業と節目ごとにイベントを実施してきた。創立総会では佐藤義栓・大阪府知事が『これからの近畿』と題して特別講演を行った。その後、"関西ウォータークラブの歴史は講演会の歴史"といわれるほど充実した講演会の開催を続け、国会議員や学識者、TVタレント、ジャーナリスト、落語家など多彩な顔ぶれが講師となっている。また、地元で発生した阪神・淡路大震災や東日本大震災では、他地域のウォータークラブとともに見舞金を送るなどの活動も行った。

関西ウォータークラブを皮切りに、中部ウォータークラブ、中国西国ウォータークラブ、九州ウォータークラブが発足し、上下水道のみならず"水"に関係する人々の集まる場として貴重な役割を果たしている

関西ウォータークラブは、2015年8月現在で会員数は事業体が56人、個人会員が61人、団体会員が57人の計174人。理事長は寺川治・元大阪市水道事業管理者、専務理事は西原一裕・水道産業新聞社代表取締役、理事は事業体現職・OB、企業など22人で構成する。

水道産業新聞60周年おめでとうございます

クラウド統合水管理システム
やくも水神 yakumo Suishin
2000年発売以来
390自治体
8700施設
でご採用いただいております。
2015年11月現在
建設費・維持管理費を大幅削減
水のICTであなたの街が日本 世界が変わる

現場の情報を関係者で共有し、場所を選ばず確実な施設管理が行えます。
小松電機産業株式会社 TEL 050-3161-2490
https://www.komatsuelec.co.jp/suishin/ 〒690-0046 島根県松江市乃木福富町 735-188

八雲立つ 出雲から陽が昇る
水の総合管理システムやくも水神とhappy gate門番が先駆となり
世界平和への潮流を!!

企画：小松昭夫　制作：寺戸良信

上下水道はいかに…

●本紙創刊60周年記念特集号

60年前に現在の日本社会、上下水道の姿をどれだけ想像できたのだろうか？そして、私達は60年後の日本・上下水道をどれだけ想像できるのか？本紙では、創刊60周年の節目を機に「60年後の上下水道」というバーチャル小説によって未来像を探ってみた。小説は望ましい未来像を軸に描いてみたが、番外編として「これだけは避けたい」最悪の世界版も掲載した。

小説①

望ましい未来像

◆黒岩記者の出勤

今日の編集会議は、本紙創刊120周年特集の企画内容を固めるものなので、開始時刻に遅れるわけにはいかない。1分でも遅れたらスピーカーにノイズが入るほどの声量で編集長に怒鳴りつけられることだろう。しかしながら、今朝は妻が職場から緊急の呼び出しがかかって早朝からいないので、5歳の娘を保育園に送り届けてから職場に向うことになり、あまり時間に余裕はない。しかも車の燃料も殆ど残っていない。やや娘を急かしてから車に乗り込む。

「ママはどうしてこんなに朝早くから仕事に行ったの？」

車が動き出してから娘が尋ねてきた。

「昨日の夜に大雨が降ったからグランドのお手入れをやりに行ったみたいだよ。今日は昼間からゲームがあるんだって。だから、今日はお迎えもパパだからね」

妻は市内のラグビースタジアムに勤務しており、グランドをはじめとする施設の維持管理を担当している。秋も深まりラグビーシーズンが本格化すると彼女の仕事は天候に左右される突発的な出勤も珍しくなくなる。昨日の夕方から降り始めた激しい雨は未明まで降り続き雨量は500㍉を超えたというから、出勤が避けられなかったのも無理はない。

「あれ？いつもと違う道じゃない？」

娘がこちらに顔を向けて叫ぶように言った。

「うん。車の燃料がなくなりそうだから、水素ステーションに寄っていくんだよ」

娘の誕生に伴う転居先に迷わず下水処理施設の近くを選んだのは正解だった。ドア・トゥ・ドアで20分の職住接近といえども、やはり、自宅の近くに水素ステーションがあるのは大きい。5分もしないうちに緩い傾斜の上に広がる畑が目に入ってくる。畑の脇のステーションに車を入れると顔馴染みの店員がいつも同様の張りのある声で車を誘導してくれた。

「黒岩さん、おはようございます。明日からジャガイモの収穫が始まるそうですよ」

「知ってるよ。来週の金曜から上下水道局庁舎で新ジャガフェアが開かれる」

3日前に下水道部長に別件で取材した時に聞いた話をすると店員もにっこり微笑んで頷いた。

「そりゃ、上下水道局に出入りしている記者さんの方が情報は速いですよね。でも、ここのジャガイモ、本当においしいですよね？」

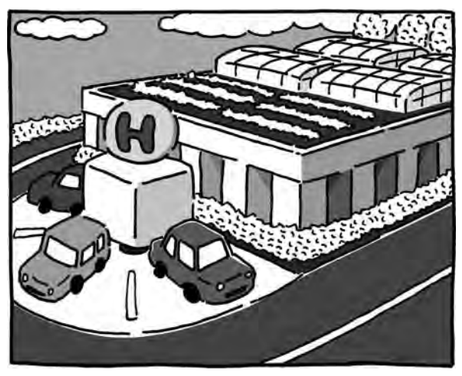
「そりゃそうだろ。畑の下に肥料とエネルギーの宝庫があるんだから。特に5年前に開発された処理施設上部の土壌を温度管理できるようになったのも大きいと思うな」

私が住むこの街では3カ所ある下水処理施設の上部と周辺を農地にしており、下水汚泥からは水素以外にも肥料、ガス、電力を得て自立的に農地に還元している。これは、住民としての贔屓目を差し引いても高く評価できるものだ。思い起こせば、30年前に当時の市長が「下水道と農業の融合」を主要施策として打ち出したことが奏功したものだが、このことは今日の編集会議でも120周年特集の「時代を変えた出来事」に絶対に入れたいと主張するつもりだ。

娘を保育園に送り届けてから事務所のある川向こうを目指すが、橋のほとりで車を停め、普段とは打って変わった濁流に目を向ける。濁度は有に5000度は超えるように思われるが、今や1万度の濁度もクリアできる水道システムは豪雨大国日本の厳しい気象環境が育んだ世界に誇れる技術力が支えているのは言うまでもない。そして、システムの進化は勿論だが、やはり根底にあるのは「人」である。「水道は愛と規律」が口癖のこの街の水道技術管理者の顔が思い浮かぶ。古来使用し続けてきた凝集沈澱・急速ろ過をベースにしながらもそれを構成する要素技術は進化し続けているわけだが、それも高い使命感・責任感を持って日々水道施設の維持管理に当たっている「人」の目があればこそであり、数十年前までの主流だった「機械偏重・無人化ありき」からシフトチェンジした以降は「人」と「機械」の調和を軸にした進化は顕著なものになっている。

◆編集会議の形態は…

事務所には会議の開始時刻の30分前に到着できたので、資料庫の現況確認を兼ねて本紙バックナンバーの節目の号に目を通すことにする。紙の新聞から電子情報媒体に完全移行して既に久しく、紙のみの時代のものも含めてデータベース化されているが、それでも古（いにしえ）の新聞原紙を半年ごとに製本している〝綴じ込み〟は温度・湿度管理を施してこの事務所に保存されており、その紙に触れるのが私のささやかな楽しみの1つになっている。綴じ込みの2010年代の列から1冊取り出そうとしたところで、背後の壁に埋め込まれているモニターが起動し、音声が流れてきた。



「黒岩君、資料庫の整理ご苦労さま。ただ、もう編集会議の開始時刻が迫っている。既に他の編集部員は全員揃っているので、所定のポジションに移動して下さい」

モニター内にはカリユシ姿の谷崎編集長の姿が映っている。声に反応してモニター（正確にはモニターの上部のこちらを映しているカメラだが）に向って頷くと、資料庫を出て自分のデスクのある隣の部屋に入った。

デスクの上部に埋め込まれた大型のモニターに目を向けると、こちらも起動していて、上下2列で10分割された映像にはそれぞれの編集部員の姿が映し出されている。編集部が東京・大阪の2事務所体制から、編集部員が各々に希望する任地で取材活動するようになってもう何年経つのだろうか？恐らく現役の編集部員で旧体制を知るのは谷崎編集長の前任で現在は論説委員の永井さんだけだろう。半世紀以上前から比べると、航空網、そして何よりもリニア交通網の整備により、地方都市への移動には時間がかからなくなったこと

下水処理場の上部は農地
自動車燃料補給基地の役割も

地熱発電と水インフラが
耐震管100年で記念式典

震度7でも断水・死者ゼロ
政治家の禁句は「料金値下げ」

↙で、このような取材体制に落ち着いたのだが、ライバル紙はその交通網の利便性に着目して全社員が東京にいるのと比べると好対照をなしている。どちらが合理的かは議論の分かれるところであり、一貫して東京に住み続けている田辺デスクは東京重点主義を唱えているが、彼女の主張は社内では少数派に過ぎない。

東京には田辺デスクのほか、入社5年以内の若手部員2人が詰めているが、原則5年在籍して編集長がその実力を認めたら、彼らも希望の任地に移り住むことになるだろう。私自身、編集長のお墨付きをもらってすぐに地方勤務の希望を出した。どこに住んでいても東京への交通アクセスは良いので、気に入った地方都市に住んだ方が快適な日常を過ごせると私は思っている。

「それでは、編集会議を始めましょう…」

ややハスキーなデスクの声が室内に響く。

「既に伝達した通り、今日の中心議題は本紙創刊120周年記念特集の取材進捗状況の確認です。はじめに編集長から一言お願いします」

「皆さん、おはようございます。永井先輩の所はもとより、皆さん、秋も深まって随分涼しくなったことでしょう…」

谷崎編集長の勤務地は沖縄県、それも小さな離島で、4年前に移住を表明した時はさすがに社内でも物議を醸したが、本人は社内の反対意見にも全く意に介さず離島の住民になってしまった。

「120年という年月の重みがどれだけのものかということは若い人も含めて認識していると思いますが、ここで改めて言いたいのは創刊時はもとより、50年前も20年前もそれぞれの時代で先輩達が上下水道の持続と発展を見据えた関係者の努力ぶりをしっかり報道してきたことの意義です。長い歴史、過去を真摯に振り返り、検証することで将来の発展に向けた問題提起ができる特集にしましょうね」

編集長の言葉にモニター内の編集部員はそれぞれに頷いている。

「それでは、いつものように北から順番に発言をお願いしたいと思います」

デスクの呼びかけに北海道の小規模都市に住む永井論説委員が頷いた。

「皆さんもよくご存知のように私の住む街では地熱発電と水インフラの一体的な運営を盛り込んだ都市計画が奏功し、非常に安全で快適な市民生活が確保されています。既に関係記事はほぼ書き上がっていますが、来週、この地域の都市政策の歴史に詳しい北海道大学の先生に取材した上で記事を取り纏めたいと思っています」

永井さんの住む街の都市計画の成功は、火山噴火の危険度を踏まえて集落の再配置・集約を実現できたことが大きく、都市として水インフラの効率化の素地が整ったことで水インフラ企業の誘致に成功し、地熱発電と水インフラを併せてこの会社が運営している。

「次に、津島君お願いします」

私より2年先輩の津島さんは東北地方の故郷に戻って3年目だが、互いの東京時代は音楽など共通した趣味も多かったことから公私にわたり行動を共にした人だ。

「昨年、大々的に特集させていただきました水道管路耐震化100周年記念のイベントを軸に日本の水道管路の耐震化の足跡をドラマ仕立てで纏めています」

彼の任地は耐震管を日本で初めて採用した所でそれは今から101年前の1974年になる。

「昨年の記念イベントでは1区間だけ残されていた最後の500㍍を開削工法による布設替を多くの市民や関係者の前で披露されたわけですが、その時の描写を起点に過去へと遡るような構成で、耐震管路そのものは勿論、関係施工技術や道路舗装の技術も含めて管路耐震化100年の足跡を紹介するつもりです」

昨年の記念イベントは私も応援取材したが、その光景は実に壮観なもので今でも目蓋に焼き付いている。現在では、非開削工法やロボットによる管接合など管路更新には多様な選択肢もあるが、1世紀前には道路の舗装部分から直接掘削して管を吊り下ろし、人の手で接合を行うのが一般だったという。それから100年経ってもなお、その接合技術を持つ「人」の存在は素晴らしいことだと思う。一部では全て非開削とロボットだけでという議論も出ているが、私は絶対に残すべきだと思っている。そう思い至った時、津島さんがまさにその思いを口にした。

「改めて管路工事の100年の足跡を調べて、人から人へしっかり管路施工に関わる技術が継承されていて本当に良かったと思っています。ロボット施工も今では不可欠の技術ですが、元々は省力化から出発したこの技術も歴史的な役割という面では人口減少の流れの中での施工技術者不足を補うという要素が強いことを改めて再確認できました。それと、舗装と掘削技術の進化も大きく関わっていますね」

ロボット施工技術の進展も「人」が技術を保持しているから改良に向けた検討もスムーズになされることに疑問の余地はない。これは、水処理の現場にも言えることだ。

「次に黒岩君、お願いします」

「私は〝雨〟をキーワードに都市の進展の歩みをレポートすることにしました」

「あら、下水道と農業じゃなかったの？」

「それは、別途トピックスとして入れさせていただければと思いますが、メインは〝雨〟で行きたいと思います」

内水・外水排除はもとより、浄水処理の高濁度対応の進化の歴史を整理して記事にするつもりだ。勿論、雨対策以外にも私が住む街は「食とのコラボ」やエネルギー対策、あるいはリスクマネジメントでも他所に胸を張れる取り組みは少なくないが、これらの取り組みの紹介なり取材は他の編集部員もやりそうなので、今回は敢えて〝雨〟に特化することにしたのだ。

「それでは筒井さん、お願いします」

田辺デスクと同期の筒井さんは管理部や企画出版部のある大阪本社に詰めている唯一の編集部員で、日常的に事務所通いをしている編集部員は東京と私以外では筒井さんだけで、他の部員は住居兼用である。

「私は耐震で行きます。津島君と近い題材になりますが、何しろ3年前の大地震に触れないわけにはいかないでしょう」

この筒井さんの発言は編集部員全員が予測していたものだと思う。3年前に震度7の直下型地震に見舞われた関西地区だが、断水ゼロ、死者ゼロを記録し、当時は「今や〝震災〟という言葉は死語になった」と言われたものだ。

「私は〝首長と料↖

上下水道はいかに…

●本紙創刊60周年記念特集号

60年前に現在の日本社会、上下水道の姿をどれだけ想像できたのだろうか？そして、私達は60年後の日本・上下水道をどれだけ想像できるのか？本紙では、創刊60周年の節目を機に「60年後の上下水道」というバーチャル小説によって未来像を探ってみた。小説は望ましい未来像を軸に描いてみたが、番外編として「これだけは避けたい」最悪の世界版も掲載した。

小説①

望ましい未来像

◆黒岩記者の出勤

今日の編集会議は、本紙創刊120周年特集の企画内容を固めるものなので、開始時刻に遅れるわけにはいかない。1分でも遅れたらスピーカーにノイズが入るほどの声量で編集長に怒鳴りつけられることだろう。しかしながら、今朝は妻が職場から緊急の呼び出しがかかって早朝からいないので、5歳の娘を保育園に送り届けてから職場に向うことになり、あまり時間に余裕はない。しかも車の燃料も殆ど残っていない。やや娘を急かしてから車に乗り込む。

「ママはどうしてこんなに朝早くから仕事に行ったの？」

車が動き出してから娘が尋ねてきた。

「昨日の夜に大雨が降ったからグランドのお手入れをやりに行ったみたいだよ。今日は昼間からゲームがあるんだって。だから、今日はお迎えもパパだからね」

妻は市内のラグビースタジアムに勤務しており、グランドをはじめとする施設の維持管理を担当している。秋も深まりラグビーシーズンが本格化すると彼女の仕事は天候に左右される突発的な出勤も珍しくなくなる。昨日の夕方から降り始めた激しい雨は未明まで降り続き雨量は500㍉を超えたというから、出勤が避けられなかったのも無理はない。

「あれ？いつもと違う道じゃない？」

娘がこちらに顔を向けて叫ぶように言った。

「うん。車の燃料がなくなりそうだから、水素ステーションに寄っていくんだよ」

娘の誕生に伴う転居先に迷わず下水処理施設の近くを選んだのは正解だった。ドア・トゥ・ドアで20分の職住接近といえども、やはり、自宅の近くに水素ステーションがあるのは大きい。5分もしないうちに緩い傾斜の上に広がる畑が目に入ってくる。畑の脇のステーションに車を入れると顔馴染みの店員がいつも同様の張りのある声で車を誘導してくれた。

「黒岩さん、おはようございます。明日からジャガイモの収穫が始まるそうですよ」

「知ってるよ。来週の金曜から上下水道局庁舎で新ジャガフェアが開かれる」

3日前に下水道部長に別件で取材した時に聞いた話をすると店員もにっこり微笑んで頷いた。

「そりゃ、上下水道局に出入りしている記者さんの方が情報は速いですよね。でも、ここのジャガイモ、本当においしいですよね？」

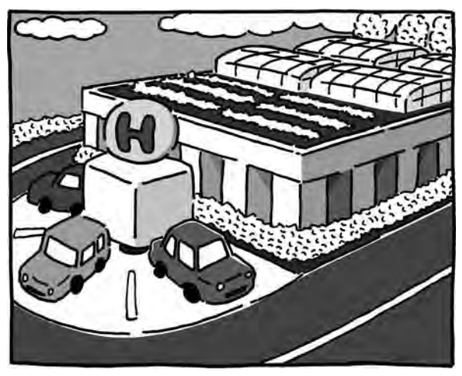
「そりゃそうだろ。畑の下に肥料とエネルギーの宝庫があるんだから。特に5年前に開発された処理施設上部の土壌を温度管理できるようになったのも大きいと思うな」

私が住むこの街では3カ所ある下水処理施設の上部と周辺を農地にしており、下水汚泥からは水素以外にも肥料、ガス、電力を得て自立的に農地に還元している。これは、住民としての贔屓目を差し引いても高く評価できるものだ。思い起こせば、30年前に当時の市長が「下水道と農業の融合」を主要施策として打ち出したことが奏功したものだが、このことは今日の編集会議でも120周年特集の「時代を変えた出来事」に絶対に入れたいと主張するつもりだ。

娘を保育園に送り届けてから事務所のある川向こうを目指すが、橋のほとりで車を停め、普段とは打って変わった濁流に目を向ける。濁度は有に5000度は超えるように思われるが、今や1万度の濁度もクリアできる水道システムは豪雨大国日本の厳しい気象環境が育んだ世界に誇れる技術力が支えているのは言うまでもない。そして、システムの進化は勿論だが、やはり根底にあるのは「人」である。「水道は愛と規律」が口癖のこの街の水道技術管理者の顔が思い浮かぶ。古来使用し続けてきた凝集沈澱・急速ろ過をベースにしながらもそれを構成する要素技術は進化し続けているわけだが、それも高い使命感・責任感を持って日々水道施設の維持管理に当たっている「人」の目があればこそであり、数十年前までの主流だった「機械偏重・無人化ありき」からシフトチェンジした以降は「人」と「機械」の調和を軸にした進化は顕著なものになっている。

◆編集会議の形態は…

事務所には会議の開始時刻の30分前に到着できたので、資料庫の現況確認を兼ねて本紙バックナンバーの節目の号に目を通すことにする。紙の新聞から電子情報媒体に完全移行して既に久しく、紙のみの時代のものも含めてデータベース化されているが、それでも古（いにしえ）の新聞原紙を半年ごとに製本している〝綴じ込み〟は温度・湿度管理を施してこの事務所に保存されており、その紙に触れるのが私のささやかな楽しみの1つになっている。綴じ込みの2010年代の列から1冊取り出そうとしたところで、背後の壁に埋め込まれているモニターが起動し、音声が流れてきた。



「黒岩君、資料庫の整理ご苦労さま。ただ、もう編集会議の開始時刻が迫っている。既に他の編集部員は全員揃っているので、所定のポジションに移動して下さい」

モニター内にはカリユシ姿の谷崎編集長の姿が映っている。声に反応してモニター（正確にはモニターの上部のこちらを映しているカメラだが）に向って頷くと、資料庫を出て自分のデスクのある隣の部屋に入った。

デスクの上部に埋め込まれた大型のモニターに目を向けると、こちらも起動していて、上下2列で10分割された映像にはそれぞれの編集部員の姿が映し出されている。編集部が東京・大阪の2事務所体制から、編集部員が各々に希望する任地で取材活動するようになってもう何年経つのだろうか？恐らく現役の編集部員で旧体制を知るのは谷崎編集長の前任で現在は論説委員の永井さんだけだろう。半世紀以上前から比べると、航空網、そして何よりもリニア交通網の整備により、地方都市への移動には時間がかからなくなったこと

下水処理場の上部は農地
自動車燃料補給基地の役割も

地熱発電と水インフラが
耐震管100年で記念式典

震度7でも断水・死者ゼロ
政治家の禁句は「料金値下げ」

↙で、このような取材体制に落ち着いたのだが、ライバル紙はその交通網の利便性に着目して全社員が東京にいるのと比べると好対照をなしている。どちらが合理的かは議論の分かれるところであり、一貫して東京に住み続けている田辺デスクは東京重点主義を唱えているが、彼女の主張は社内では少数派に過ぎない。

東京には田辺デスクのほか、入社5年以内の若手部員2人が詰めているが、原則5年在籍して編集長がその実力を認めたら、彼らも希望の任地に移り住むことになるだろう。私自身、編集長のお墨付きをもらってすぐに地方勤務の希望を出した。どこに住んでいても東京への交通アクセスは良いので、気に入った地方都市に住んだ方が快適な日常を過ごせると私は思っている。

「それでは、編集会議を始めましょう…」

ややハスキーなデスクの声が室内に響く。

「既に伝達した通り、今日の中心議題は本紙創刊120周年記念特集の取材進捗状況の確認です。はじめに編集長から一言お願いします」

「皆さん、おはようございます。永井先輩の所はもとより、皆さん、秋も深まって随分涼しくなったことでしょう…」

谷崎編集長の勤務地は沖縄県、それも小さな離島で、4年前に移住を表明した時はさすがに社内でも物議を醸したが、本人は社内の反対意見にも全く意に介さず離島の住民になってしまった。

「120年という年月の重みがどれだけのものかということは若い人も含めて認識していると思いますが、ここで改めて言いたいのは創刊時はもとより、50年前も20年前もそれぞれの時代で先輩達が上下水道の持続と発展を見据えた関係者の努力ぶりをしっかり報道してきたことの意義です。長い歴史、過去を真摯に振り返り、検証することで将来の発展に向けた問題提起ができる特集にしましょうね」

編集長の言葉にモニター内の編集部員はそれぞれに頷いている。

「それでは、いつものように北から順番に発言をお願いしたいと思います」

デスクの呼びかけに北海道の小規模都市に住む永井論説委員が頷いた。

「皆さんもよくご存知のように私の住む街では地熱発電と水インフラの一体的な運営を盛り込んだ都市計画が奏功し、非常に安全で快適な市民生活が確保されています。既に関係記事はほぼ書き上がっていますが、来週、この地域の都市政策の歴史に詳しい北海道大学の先生に取材した上で記事を取り纏めたいと思っています」

永井さんの住む街の都市計画の成功は、火山噴火の危険度を踏まえて集落の再配置・集約を実現できたことが大きく、都市として水インフラの効率化の素地が整ったことで水インフラ企業の誘致に成功し、地熱発電と水インフラを併せてこの会社が運営している。

「次に、津島君お願いします」

私より2年先輩の津島さんは東北地方の故郷に戻って3年目だが、互いの東京時代は音楽など共通した趣味も多かったことから公私にわたり行動を共にした人だ。

「昨年、大々的に特集させていただきました水道管路耐震化100周年記念のイベントを軸に日本の水道管路の耐震化の足跡をドラマ仕立てで纏めています」

彼の任地は耐震管を日本で初めて採用した所でそれは今から101年前の1974年になる。

「昨年の記念イベントでは1区間だけ残されていた最後の500㍍を開削工法による布設替を多くの市民や関係者の前で披露されたわけですが、その時の描写を起点に過去へと遡るような構成で、耐震管路そのものは勿論、関係施工技術や道路舗装の技術も含めて管路耐震化100年の足跡を紹介するつもりです」

昨年の記念イベントは私も応援取材したが、その光景は実に壮観なもので今でも目蓋に焼き付いている。現在では、非開削工法やロボットによる管接合など管路更新には多様な選択肢もあるが、1世紀前には道路の舗装部分から直接掘削して管を吊り下ろし、人の手で接合を行うのが一般だったという。それから100年経ってもなお、その接合技術を持つ「人」の存在は素晴らしいことだと思う。一部では全て非開削とロボットだけでという議論も出ているが、私は絶対に残すべきだと思っている。そう思い至った時、津島さんがまさにその思いを口にした。

「改めて管路工事の100年の足跡を調べて、人から人へしっかり管路施工に関わる技術が継承されていて本当に良かったと思っています。ロボット施工も今では不可欠の技術ですが、元々は省力化から出発したこの技術も歴史的な役割という面では人口減少の流れの中での施工技術者不足を補うという要素が強いことを改めて再確認できました。それと、舗装と掘削技術の進化も大きく関わっていますね」

ロボット施工技術の進展も「人」が技術を保持しているから改良に向けた検討もスムーズになされることに疑問の余地はない。これは、水処理の現場にも言えることだ。

「次に黒岩君、お願いします」

「私は〝雨〟をキーワードに都市の進展の歩みをレポートすることにしました」

「あら、下水道と農業じゃなかったの？」

「それは、別途トピックスとして入れさせていただければと思いますが、メインは〝雨〟で行きたいと思います」

内水・外水排除はもとより、浄水処理の高濁度対応の進化の歴史を整理して記事にするつもりだ。勿論、雨対策以外にも私が住む街は「食とのコラボ」やエネルギー対策、あるいはリスクマネジメントでも他所に胸を張れる取り組みは少なくないが、これらの取り組みの紹介なり取材は他の編集部員もやりそうなので、今回は敢えて〝雨〟に特化することにしたのだ。

「それでは筒井さん、お願いします」

田辺デスクと同期の筒井さんは管理部や企画出版部のある大阪本社に詰めている唯一の編集部員で、日常的に事務所通いをしている編集部員は東京と私以外では筒井さんだけで、他の部員は住居兼用である。

「私は耐震で行きます。津島君と近い題材になりますが、何しろ3年前の大地震に触れないわけにはいかないでしょう」

この筒井さんの発言は編集部員全員が予測していたものだと思う。3年前に震度7の直下型地震に見舞われた関西地区だが、断水ゼロ、死者ゼロを記録し、当時は「今や〝震災〟という言葉は死語になった」と言われたものだ。

「私は〝首長と料↖

●本紙創刊60周年記念特集号

バーチャル小説

60年後の日本と

上下水道でエネルギー自立 沖縄離島に「住民営水道」

都市計画との整合が奏功 雨水貯留施設に新たな発想

◆ラグビースタジアムのもう1つの役割

↙“金”で行きますよ」

そう口火を切ったのは四国の衛星都市に住む吉行さんだ。これも多くの編集部員の想像の範囲内のものだろう。何しろ、水道料金・下水道使用料の変遷には一家言持つ吉行さんのことだから。

「私の持つ料金関係の統計データを料金改定だけでなく、首長の選挙時の公約まで盛り込んで整理してみました。凡その流れは皆さんもお分かりだと思いますが、今回、新たに分かったのは、公約と当落選の相関は人口規模だけでなく、気候や地勢なども影響していることです」

全国の上下水道事業で公営と民営の比率はほぼ半々となった今も、公営の事業体で料金改定を行う場合はそれを運営する地方自治体の首長が議会に提案して承認を得るという古来からの手法が採られているが、上下水道事業に対する住民の関心は常に高いために首長や地方議会の選挙への立候補者が料金問題に言及しないことはあり得ない。そして、彼らにとって「料金値下げ」は間違いなく禁句である。しかし、歴史に詳しい吉行さんによると60年ぐらい前までは逆に「値下げ」が住民に支持されたというから不思議なものだ。そして、それが40年ほど前から状況が逆転して「値下げ」を公約に掲げた候補者が落選するようになり、今では「値上げ」を公約に掲げる掲げないはともかく、少なくとも料金の考え方を軸に上下水道の将来ビジョンを語れない政治家は絶対に当選できない。この歴史的な流れについて吉行さんは上下水道関係者による地道な広報活動の努力が結実したものと結論づけている。

吉行さんの分析記事は豊富なデータベースを基にした平易な語り口が読みやすく、今度の地域特性を考慮した分析記事も楽しみだ。

「それでは、糸山さんお願いします」

私と同期の糸山女史は入社3年目で編集長に地方勤務を許可された逸材で、とりわけエネルギー問題の造詣が深い。彼女が任地に九州を選んだのも、その先進事例に注目しているからに他ならない。

「やはり、私は上下水道事業の中で完結した自立エネルギーのシステムを昨年わが国で初めて確立した地元市のおよそ半世紀の足跡を取り纏めるつもりです」

彼女の住む都市は、資源としての下水汚泥や導送配水の圧力活用をはじめ、ありとあらゆる再生可能エネルギーと自然エネルギーを取り込むことで、上下水道に必要な電力需要を全て自前で賄えるシステムを確立している。この背景には、それぞれの発電技術の進展に加え、蓄電技術のここ十数年の進化が大きく寄与しているが、確かにその意義は大きいものがある。糸山の発言に呼応して東京勤務の小川が口を開いた。

「私は糸山先輩の取材の恩恵に与って水大臣のインタビューをやらせていただける見通しです。既に前号の1面トップにありましたように大臣は次期水ビジョンにこれから60年以内に全国の官民を問わぬ全ての上下水道事業体でエネルギー自立を実現することを盛り込むと明言されています。その思いについて熱く語っていただこうと思っています」

当然そうなることだろう。何しろ、編集長の住む島はわが国初の「完全民営水道」なのだから。「民営」と言っても、コンセッション方式で運営される永井さんの住む街と異なり、運営者は「住民」なのだ。すなわち、島の住民が自発的に上下水道事業を運営しており、地下水と海水を水源とする浄水処理施設や管路施設の維持管理も住民達が輪番制で行っている。かつては水源確保と浄水処理に大変な苦労が伴っていたが、県の用水供給の支援を得て適切な施設整備と管理運営ノウハウが民間企業を経て、今ではそれが住民に引き継がれている。

「過去の歴史を紐解いてみて、やはり、島民が上下水道は自分達のものという意識を持てたことが大きな原動力になったのは間違いないね。海淡施設のコストダウンや自然エネルギーの汎用性拡大など要素技術の進展も大きな要因だが、やはり、住民の意識だね。それにしても、ここまでうまく回ってくるとは思いもよらなかったな。何しろ今年も配当がねえ…」

そう言ってほくそ↖

↙笑む編集長の気持ちもよく分かる。この島の上下水道の運営に関わるコストは大昔は国や県の補助も得ていたらしいが、今では完全独立採算の体制を確立している。そして、島では運営コストに対する住民の支払いを「料金」ではなく、「会費」と呼んでいる。島の全住民が会員となっている自治会の会費の中に組み込まれているのだ。そして、エネルギー効率の良いシステムになっていることに加え、近年は海水淡水化施設を自前の水として用いる一方で、地下ダムで蓄えられた良質な地下水は世界各地に高級ブランド品として売られており、その利潤が運営コストを上回ると「配当」として住民に還元される仕組みになっている。

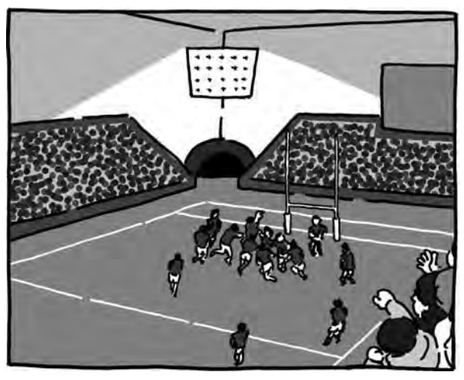
「さて、これで皆の報告も一通り聞けたことだし、今日の会議はこの辺りで宜しいのではないかな？」

編集長がデスクに向って呼びかける。

「特に他に意見がなければ、終わりにして良いと思いますが、編集長はこの後何かご予定でも？」

「実は、隣家のおばさんが熱を出しちゃったので、彼女の代わりに浄水場の巡回に行かなければならないんだよ」

編集長の些か身勝手な理由でこの日の編集会議は終了した。



編集会議の後は夕方までの時間を記事執筆に充て、保育園に子供を迎えに行かねばならないので、いつもより早めに事務所を出る。帰り道でも橋を渡る時に川面に目を向けたが、朝よりは茶褐色の色合いは薄まったが、それでもまだカフェオレのような色に近い。とはいえ、浄水処理には全く影響はないだろう。

保育園で娘を車に乗せると家ではなくラグビースタジアムに向かう。

「ママがお仕事早く終わったので一緒に帰れるって」

娘が声を上げて喜ぶのを目にしてこちらも頬が緩む。予想以上にグランドコンディションも良かったと見えて試合後のグランド整備にもあまり時間がかからなかったらしい。スタジアムは街のほぼ中央部にあり、その目印は市内随一の商業施設のビルだ。青みがかったガラス張りのそのビルの地下に車を進め、駐車場に入る。娘と二人で車を降りるとエレベーターホールへ。私達が立つB1Fからは上下両方の階に行くことができるが、下向きのボタンを押してエレベーターの中に入ると、娘を抱え上げてB2Fのボタンを押させてあげた。にっこり笑みを浮かべてボタンを押した娘だが、実は彼女はこのエレベーターが好きではない。次に扉が開くまで時間がかかることに加え、外の風景を（当然のことながら）目にすることができないからだ。

幼児にとって些か長い下降を終えてエレベーターの扉が開くと娘がこちらの制止も聞かずに駆け足で飛び出した。その先にはスタジアムに通ずるゲートがあり、ちょうどその下で妻が立っていた。

「意外と早くに仕事が片付いたみたいだね」

娘を抱き上げてこちらに歩み寄る妻に声を掛けると、拳を縦向きに掲げて親指を上に突き出す彼女得意のポーズとともに、

「下の池から溢れた水が思ったほど多くなかったのと、去年新しく入ったポンプの性能が凄いのよ。あんなに激しい雨だったのにね…」

と声を弾ませる。都市の中心街の大きな地下空間に建設されたこのスタジアムは豪雨時には雨水貯留池の役割を果たしている。グランドの地下に建設された池の雨水貯留容量が40万立方㍍、さらに、万一その池の容量を超えた場合はグランド内にも水が浸入し、最大で60万立方㍍もの水を溜めることができる。この街では野球場、サッカー場も同様に都市部の地下空間に建設され、この街の浸水防除に寄与している。

この都市に限らず、全国の多くの都市では人口減少によって住居やオフィス・商業施設が広く散在して〝歯抜け〟のような状態になってしまい、それが都市インフラの持続の大きな阻害要因になっていた。この課題解決に向けて国政・地方行政ともに十分に時間をかけて議論した結果、それぞれの地域特性に応じた都市計画の主導の下、住居等の集約・再配置が進められてきた。その都市計画は水インフラをはじめとする都市基盤施設整備とも連動しており、水道・下水道の関係施設も効率的・効果的に再構築が進められた。そうした中、この都市における最大の課題の1つになっていたのが水害対策で、都市部をコンパクトなエリアに再編する際に内水排除を念頭に置いた周到なプランニングがなされ、結果として大規模商業施設とプロスポーツ関係者とのコラボレーションによって地下空間にスポーツ施設と雨水貯留施設を兼ねる新たな発想の産物が活躍することになった。

一方、河川の増水によって堤防決壊の可能性のある地域には都市計画に基づいて既に数十年前から住居やオフィスなどの人が立ち入る施設はなく、その広大な土地は大規模遊水地の役割を果たすことになる。

「しかし、ラグビーが雨で中止になるかもしれないというのはちょっと皮肉な話だね。風や日差しの影響も受けないというのもオールドファンには納得できない要素じゃないの？」

半ば冗談交じりで妻にそう言うと、真面目な顔になって反論してきた。

「だって、このスタジアムができて、もう6年が経つけど、中止になったのは2つの大型台風が続けざまに来た3年前の1回だけじゃない。あの日はそれまでの外の競技場だって中止になってた筈よ。それ以外は、どんなに降っても今日ぐらいのグランドコンディションで何とかなっているし…」

次頁に続く

防食名人
エイコン-C
—埋設ボルト用防食金具—
安全・持続・強靭
優れた防食効果で
長寿命化のお役に立ちます。
株式会社エスティム 〒530-0056 大阪市北区兎我野町3番22号（椿ビル） TEL：06-6364-6118（代） FAX：06-6364-6025

水源からご家庭までの
水道諸資材を販売・施工
〔営業品目〕鋳鉄管、バルブ、鋼管、ポリエチレンパイプ、ステンレスパイプ
上／下水道諸資材、建材商品、配管工事請負
株式会社栗本鐵工所特約販売店
ヤマトガワ株式会社
本社 大阪市西区北堀江1丁目12番10号・山田ビル
TEL大阪（06）6541-5153 FAX（06）6533-5997
支店 東京・さいたま・関西（八尾）・広島・山口・福岡・宮崎・熊本・西東京・三重・兵庫・南大阪・関西北・堺・名古屋

次代を見つめるテクノロジー
LIFE ENERGY ABENIKKO
株式会社安部日鋼工業
代表取締役社長 髙橋泰之
岐阜本社／岐阜市六条大溝3丁目13番3号 ☎（058）271-3391㈹
東京本社／新宿区市谷砂土原町2丁目7番地 ☎（03）5227-1721㈹
支店／東北☎（022）263-1381 東京☎（03）5227-1751
中部☎（052）563-3851 大阪☎（06）6301-5231
九州☎（092）441-5481
工場／須賀川・岐阜・岐阜本巣・滋賀・大牟田
http://www.abe-nikko.co.jp/

水道サービスを未来につなぐ
水のあるところに命がある。
水のあるところに明日がある。
私たちの仕事、そのひとつひとつの積み重ねが
水道サービスの未来につながっています。
私たちが目指すのはその先にある
お客様の笑顔です。
DK第一環境株式会社
〒107-0052 東京都港区赤坂2-2-12
TEL:03-6277-7920 FAX:03-6277-7924
http://www.daiichikankyo.co.jp/
Content of Service
●料金徴収業務 ●給水装置管理業務
●水道施設運転／監視 ●システム開発／運用 ●その他

管路・浄水等施設情報の処理を
通して水道技術をサポートします。
信頼と実績の GIS 地理情報システム
営業種目
●マッピング（給配水管、汚雨水管渠等）
●ファイリング（竣工図、申請書等）
●管工事事務電子申請
●設計積算（水道管路）
●浄水施設・設備管理
●管路腐食管理
【登録・認証資格】
◆プライバシーマーク登録事業者
◆ISO 9001 認証
◆ISO／IEC 27001 認証
ams 水道マッピングシステム株式会社
〒160-0014 東京都新宿区内藤町87番地 四谷区民センター5階
TEL（03）3357-3020 FAX（03）3357-3066
http://www.ams-k.co.jp/

ご覧ください http://www.puc.co.jp／水道事業体の経営の効率化とお客さまサービスの向上を実現するために
水道事業を
現場力とＩＴ力で支えます
▲コールセンタ構築・運用サービス
▲水道営業窓口業務サービス
▲ITソリューションサービス
確かなサービスで水と人の未来を創る
株式会社PUC 東京都水道局のパートナー企業
〒163-1337 東京都新宿区西新宿6-5-1 新宿アイランドタワー37F
TEL.03（3343）4560（代表） FAX.03（3343）4607
【登録認定許可】
■プライバシーマーク使用許諾事業者
■ＩＳＯ９００１：２００８認証事業所
■ＩＳＭＳ認証事業所
■労働者派遣事業者（特13-302509）

紫外線消毒装置
WaterLight
《特徴》
○水質に影響を与えません。
○多くの微生物に効果的です。
○設置が容易です。
○建設費・維持管理費ともに安価です。
《JWRC 基準適合認定装置》
公益財団法人水道技術研究センターが実施する、浄水施設に用いる紫外線照射装置についての技術認定を取得しています。
株式会社ウォーターテック
本社・営業統括部
〒108-0023 東京都港区芝浦3-16-1（中野興産ビル）
TEL.03-3456-0795（代） FAX.03-5456-0646

快適な都市空間の創造を目指して
ホテル、オフィス等不動産の保有、賃貸及び管理運営
都市開発に関する調査・企画・コンサルティング
建築物の設計・工事監理（一級建築士事務所）
東京都市開発株式会社
TOKYO URBAN DEVELOPMENT CO., LTD.
損害保険代理業
駐車場の運営管理
ショッピングセンターの運営管理
〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-6-2 TEL.03-3343-5061（代表）FAX.03-3349-0170
URL：http://www.tud.co.jp/

豊かな経験とトータルな技術力で
ライフ・ラインを守ります。
運営・管理
水道施設
調査・診断
設計・施工監理
水源から蛇口まで
東京水道サービス株式会社
代表取締役社長 増子 敦
東京都新宿区西新宿6−14−1（新宿グリーンタワービル） TEL(03)5320-9350（代） FAX(03)5320-9357
http://www.tssk.jp/

●本紙創刊60周年記念特集号

バーチャル小説

60年後の日本と上下水道はいかに…

前頁より続く

確かに、過去の降雨データと今後の気候変動の予測値も加味したシミュレーションに基づいた各施設の容量設定はほぼ完璧と言えそうだ。この確率で雨水対策の専用施設にこれだけの規模のものを整備するのは現実的ではなく、普段はスポーツ施設として活用できるからこそ、厖大な投資額も無謀なものではなくなるわけだ。今回の創刊120周年特集のために過去の歴史を改めて紐解いてみたが、半世紀以上前に下水道法を含む水防法が改正され、民間の商業施設の地下等に雨水貯留施設の建設を誘導できる仕組みができたことがそもそもの取っ掛かりであるようだ。以降、上部のビル所有者が好天時は〝遊んでいる〟空間の有効利用のあり方を追求した結果、今では様々な成果につながっている。このラグビースタジアムもその代表例と言えるだろう。

「まあ、世界に誇れるスタジアムだと思うよ。4年後のワールドカップの時に季節外れの台風が来ないことを祈るばかりだね」

4年後は日本で通算2度目となるラグビーのワールドカップが日本で開催されることが決まっており、妻の仕事に対する意欲は当然のことながら高まっている。

「大丈夫よ。ワールドカップまでに50万立方㍍クラスの貯留池が市内に2つできるって教えてくれたのはあなたじゃないの」

そう言って肘鉄を食らわそうとする妻の二の腕を掴んでそのままエレベーターへと導く。

「お腹が空いた。早く帰ろう」

この都市の地産地消のおいしい水と良い食材を使った妻の手料理を早く食べたい。

小説②

絶対に避けたい、あってはならない未来像

◆死んだ婆ちゃんの口癖

朝、目覚めたら、胸を掻きむしりたくなるような不快感に襲われた。無理もない。昨日の昼過ぎから水を一滴も口にしていないのだ。オレは無駄だとは分かっていても布団から起き上がってキッチンの洗い場の蛇口を回してみる。勿論、水は出ない。もっとも出たところで、それをそのまま飲んだら、今以上の苦痛と不快感に襲われることだろう。3年前に婆ちゃんが死んだのも、オレが止めるのも聞かずに蛇口の水をそのまま飲んで激しい下痢を起こしたためだった。婆ちゃんの口癖は「昔はこんなじゃなかった。昔は蛇口からいつでもちゃんとした水が飲めた」というものだったが、オレにそんなことを言われても全く想像ができない。今では飲み水は高い金を払って買うものであり、オレたちみたいなチンピラの手にはなかなか届かないものなのだ。庶民が水を得るには、ごく稀に蛇口から水が出た時になるべく溜め込んで、それを煮沸したり、買い置きしてある消毒錠剤を入れて大事に使うしかない。しかし、蛇口から水が毎日出ることは亜熱帯気候となったこの国では雪が降るほどに珍しい。そう言えば婆ちゃんは「昔は冬になれば大抵は何日か雪が降って、時には大雪になることもあった」なんて言ってたが、それも水道の話と同じぐらい信じられない話だ。

断水が続くと、学校の校庭とかで役所が「応急給水」をやる決まりになっているが、ここ何日も雨が続いているから、それも期待できない。「応急給水」は水道管が壊れた時に水道管の代わりに浄水場からトラックで学校まで水を運び、そこからは自分達で運ぶのだ。だが、こんなに雨が降ってしまうと、川の水が濁ってしまい浄水場が動かなくなってしまう。だいたい、こんな天気の日にはとても外なんかに出る気にはなれない。雨が何日も続くと、下水管に入った雨水が汚い水と一緒になって外に出てきてしまう。こないだなんかポンプ所とかいう施設が壊れたために町中がとんでもないことになっていた。とはいえ、飲み水がないことには何もできない。洗濯や風呂はベランダの雨水容器に溜めた水に消毒錠剤を入れれば何とか使えるが飲み水だけはどうにもならない。今、オレの家の冷蔵庫に入っているのはビールとウィスキーハイボールだけだが、そんなものを飲む気にはなれない。水が飲みたい。

布団から出た時と同じような気持ちで「おい！」と家のモニターを起動させると、「近所の水情報」と叫ぶように言う。すぐに空撮による映像と音声により、「濁度過剰で浄水処理不能のため本日の応急給水はなし」との情報が確認できた。情報は得られても今日も飲み水を得る術はなさそうだ。5年前にこのモニターを買った時、婆ちゃんが「本当に世の中は便利になった。ワタシの若い頃には信じられないことだよ」としみじみ言ってたものだが、婆ちゃんの人生を考えた時、彼女が得たものと失ったものとでは断然失ったものの価値の方が高い。電子情報なんかより、オレは水が欲しいんだ。

何もする気が失せて布団の上に仰向けになってぼんやりしているとノックと同時にカノジョが入って来た。何と手に2㍑のボトルウォーターを持っている。それも、地下水の上物だ。

「おい、どうしたんだよ、それ？」

「店長がくれたの」

店長というのはカノジョが働き、オレも時々店の仕事を手伝っているウォーターショップの経営者だが、その背後にはこの街の水ビジネスを取り仕切るシンジケートがあって、店長とは言いながら奴も組織の使い走りに過ぎない。

「おい、そんなのもらって大丈夫なのかよ？」

奴がカノジョに気があるのは前から感じていたが、「水」まで差し出すようになってはいよいよ要注意だ。

「大丈夫よ、ワタシが愛してるのはアンタだけなんだから…。それはそうと、明日辺り水の大売出しやるって言うから、アンタにもお呼びがかかるわよ、きっと」

もらった水を早速ジョッキにたっぷり入れてガブ飲みするオレにカノジョが言った。水の大売出しというのは、応急給水もままならなくなったタイミングを見計らってシンジケートがバカ高い値段で住民に水を売りつける汚い商売のことだ。

「この水があれば明日はいいや、オレは。水はともかくカネには困ってないからな」

「そこがアンタの一番いけないところなのよ。何もかも行き当たりバッタリで計画性がない。パパもそのことでアンタのこと嫌ってたじゃないの」

「そんなことはない。オレにはオレの考えがあるんだ。そのうち分かる」

「パパはいつも言ってた。計画のない生き方は駄目な生き方だって。この町がこんなにひどいことになったのも昔の役所がちゃんとした計画を立てなかったからだって」

「それは婆ちゃんも言ってたな。昔の市長が当時の住民の顔色ばっかり窺って水道料金の値下げをしたのがケチのつき始めだってね」

「確かに、酷い話ね。何で自分達の時代のことだけでなくて先の将来のことまで考えてくれなかったのかしら」

「でもな、一番悪いのは当時の住民さ。そんな市長を選んだのは奴らなんだからさ。だから、婆ちゃんにも言ってやったよ。あんただってそいつに投票したんだろってね」

「アンタ、大好きなおばあちゃんにそんなこと言ったの？それで、おばあちゃんは？」

「だからワタシは報いを受けてるって。本人が報いを受けるのは勝手だけど、その頃生まれてなかったオレたちにはどうにもならない話だぜ」

「そうだけど…。パパならなんて言うかしら？」

「まあ、怒るだろうな。オレなんかよりよっぽどタチが悪いってね」

計画性と規則正しい生活を第一にしていたカノジョのオヤジだが、その生涯は決して計画通りには行かなかった。毎日同じ時間に同じ道を散歩していた彼はある朝、水道管が破裂して吹き上げた水の直撃を受けて即死してしまった。だから、今ではカノジョにとって心許せる人間はこの世でオレしかいない筈だし、オレにしても婆ちゃんが死んでからはカノジョしかいない。そして、明るい将来を見通せないオレたちはどうしても昔の人間の悪口ばかり言ってしまうのだ。だが、そんなオレにも将来に向けた計画はある。

◆水売りの下働き

カノジョに説得された形でウォーターショップに行くと、店長がオレに向って言った。

「遅いぞ、せっかく時給を弾んでやるって言ってるのに何トロトロしてやがんだ」

店長のその反応はオレの想定内で配達人の中で最後に来たのも元々の計画通りだ。オレは店の奥から心配そうにこちらを窺うカノジョにあるメッセージを乗せて視線を送った。彼女にはそのメッセージの本当の意味は分からないだろうが、心の準備を促したわけだ。

店長と10㍑入りのポリタンクが20個は詰むことのできる大型の台車を倉庫の前に運ぶと二人で倉庫の水入りポリタンクをそれに運び込む。そして、重い台車を二人で店の車の方に移動させるが、そこでオレは店長に声をかけた。

「店長、店のトラックじゃなくてオレの車で運んでもいいですか？オレの配達区域は小さな路地が多いから、オレのライトバンの方がいいと思うんすよ」

店長は暫くオレの顔をジッと見て考えている。

「オレ、自分の車だと好きな音楽も聴けるし、燃料代もいらないですから…」

「分かった。それじゃあ、お前の車の荷台のドアを開けろ」

店長が車の位置確認ができる通信装置をオレの車に付けると、暫く黙ったまま二人で重いポリタンクを荷台に運ぶが、店長がタンクを荷台に置きながらオレの方を振り返って言った。

「やっぱりおかしいな。カネに汚いお前が燃料代持ち出しでも自分の車を使いたがるのは…」

その瞬間、オレは荷台のドアを思い切り力を込めて下ろした。そして、駐車場に倒れ込んだ店長にさらに蹴りを数回加えると大人しくなった。

「アンタ、何てことするのよ！」

カノジョが泣きそうな顔になってオレに駆け寄って来た。

「いいから、こいつを二人で倉庫に運ぶんだ。早くしろ！」

車からロープを出してオレがそう言うとカノジョも頷いて一緒に店長を倉庫まで運び、一番奥の柱に縛り付けて大きな布袋で覆い隠すと、車に駆け戻り、発信装置を捨ててから素早く乗り込んだ。

「アンタ、一体これから…」

「詳しい話は後でするから黙って助手席に座ってろ」

車を出すと、門の前で機関銃を持って立っている見張りの男の所で1度停車する。

「おい、何で店長じゃなくてお前がこのネエちゃんと出掛けるんだよ」

「あれ、聞いてませんでした？もう1人新参の配達が来るんで店長はそいつと配達に行くって。あっ、それと店長が呼んでました。何か随分怒ってましたけど…」

「やべえ、あのことかな？」

見張りが駆け足で事務所の方に去っていったのを見て、オレはすぐに車を出した。

◆自信の逃走

「どうせ、すぐバレるわよ」

「そんなことは分かってる。だが、ここで急発進して逃げるより、5分から10分は余計に時間を稼げる」

「でも、絶対に逃げられないわよ、もうアンタって人は何てバカなことを」

電子の追跡は逃れられても市内の各ポイントで組織の見張り役がいることも承知の上での決行だ。

「大丈夫だ。全て計画通りに進んでいるし、これらかもだ」

「計画？」

「組織の追跡があるのも県境までだ。県境の橋を渡れば、隣の県を縄張りにする組織の人間がオレと水を待っている。これだけの水を捌ければ暫くは食うに困らないぜ。電子の追跡がなく、車同士だったらオレの運転で逃げ切れるさ」

誰にだって取り得はあるものだが、オレの場合のそれは車の運転だ。これだけは誰にも負けない自信がある。

「アンタ、凄いじゃないの」

「言っただろ？オレにはオレの考え、計画があるんだって」

オレの車の腕を誰よりも知っているカノジョが声を弾ませるのを耳にしてオレも頷くとアクセルを強く踏んだ。車の見張りの配置と運転する奴の力量を把握しているので、たとえ見つかってもどこでどう振り切れるのかということも含めて全てオレの頭の中に入っている。しかし、実際に組織の車5台を振り切り、いよいよ県境に近づいたところで、思わぬ敵が現れた。

「アンタ、パトカーよ」

「分かってる。くそ、どういうことなんだ！」

この街の組織と警察は昔から犬猿の仲なので、警察が追っ手に加わるというのは全くの想定外だった。しかも、警察には腕利きのドライバーも少なくない。

「アンタ、どうすれば…」

「こうなったら肉を切らせて骨を断つだ」

そう叫ぶように言うとオレは急ハンドルでUターンすると県境とは反対の峠道の方に向った。これはオレの目的地を幻惑させることに加え、腕利きのドライバーと真っ向勝負せずには逃げ切れないというオレなりの判断に基づいた行動だ。ジグザグカーブの続く、峠道に入ってもオレは決して速度を緩めることはしないが、案の定、相手も同じようにスピードを保ってオレの車に付いてくる。どこで、どのように打開するのか？さらに峠の奥まった所に来て遠目に対向車線をトラックが走るのを見て俺は少し速度を緩めた。当然、パトカーとの車間がグンと接近する。このオレの行動の変化を相手も当然察知していることだろう。いよいよトラックが接近してきた時にオレはハンドルを切って対向車線に車を出すと、それを見たトラックも慌ててハンドルを切ったその先には…。背後で轟音が響き、トラックとパトカーが正面衝突したことが分かる。オレは速度を上げると暫くして脇道の小さな道路に入った。この道を進めば元来た通りに戻ることができる。

「アンタ…」

眼前に橋をみとめてカノジョが安堵の溜め息とともにオレの肩に顔を置いた。あと数百㍍も走れば、この街ともおさらばだ。そう思った矢先に下から突き上げるようなもの凄い衝撃を受けた。懸命にハンドルを切るもその力は強く、車の中でオレたちはグルグルと…。こんなところで水道管が破裂するなんて…。

気づいたらオレは車の外に放り出されていた。全身を強い痛みが走っているが、それも徐々に気にならなくなってきた。頭から流れ出しているネバネバしているものが血だけでないことが分かる。

「アンタ！」

カノジョが目に涙を浮かべてオレの両肩に手を載せる。

「水をくれ。水が飲みたい」

そのオレの最後の願いにカノジョは頷き、水をまずは自分の口に含んでから口伝えに飲ませてくれた。

「うまい。やっぱり水が一番だ…」

もうそこまで話すのが精一杯だ。残念ながらオレの生涯はこれで終わりなようだ。だが、婆ちゃんと違ってオレは最後においしい水を飲むことができただけでも幸せだ…。

下水道管路施設の
計画的維持管理をサポート

次の時代に向けた維持管理は、ここから始まる。
グラウンドマンホールメーカーとして、
長年にわたって培ってきた高い専門性と検証・評価技術のノウハウを活用し、
下水道管路施設の計画的維持管理をサポート。
次の時代に向けた「下水道管路施設の計画的維持管理」が、
ここから始まります。

HINODE

老巧化した下水道管路施設の
リノベーションを支えるソリューションメニュー

維持管理に関する知識習得と、意識合わせのための勉強会の企画運営をはじめ、巡視・点検・調査などの維持管理手法、また改築・修繕のための具体的な対策検討といった、リノベーションに必要な様々なソリューションをご提案いたします。

安全、そして安心で快適な生活環境の実現のために。
日之出水道機器株式会社
本　社　福岡市博多区堅粕 5-8-18（ヒノデビルディング）TEL092-476-0777
東京本社　東京都港区赤坂 3-10-6（ヒノデビル）TEL(03)3585-0418
http://www.hinodesuido.co.jp

第5037号　第3種郵便物認可　水道産業新聞　2015年(平成27年)11月26日(木曜日)(週二回・月・木曜日発行)　(G-2)

新水道ビジョンで切り拓く水道の将来

国民の安全・安心を守る登録水質検査機関

～シリーズ32 新水道ビジョンの実現～

水道法に基づき厚生労働大臣の登録を受けた登録検査機関は、水道事業体や貯水槽の設置者、管理者と協力しながら、安全でおいしい水を確保するため、水質検査や水質管理等の活動を行っている。一般社団法人全国給水衛生検査協会（奥村明雄会長）は、全国唯一の登録検査機関の組織として昭和61年に設立され、水質検査技術を熟知し、適切な判断力を持つ専門検査員の養成確保と検査の品質を確保するために尽力している。今回のグラビアでは、厚生労働省の新水道ビジョン推進協議会のメンバーでもある同協会の取り組みについて紹介していただいた。

新水道ビジョンの実現に向けて

一般社団法人全国給水衛生検査協会

■登録検査機関の責任と役割

登録検査機関は、厚生労働大臣の登録を受け、能力の高い検査員を擁し、しっかりとした精度管理を行う等信頼できる機関として、水道事業体に代わって検査を行う機関です。水質検査全体に占める登録検査機関の割合は８割を占めており、国民の安全安心に対する責任と役割は重大です。

■信頼性の確保の強化

競争激化により、検査料金の低下が進み信頼性を損なう事態も発生しました。このため、検査機関自体が襟を正し、過当競争の防止、信頼性の確保を進めることが求められています。登録機関の全国組織である全国給水衛生検査協会（以下、「給衛協」と略称。）では、「倫理規範」を定め、徹底を図るほか、幹部を対象に、コンプライアンスを含む信頼性確保研修を行っています。また、厚生労働省の日常業務確認調査に協力するとともに、その指摘事項を研修に取り込み、横展開を図り、指摘事項の徹底を図っています。

同時に、安全安心のパートナーである水道事業体との連携を深め、理解を広げるため、各支部を単位に「信頼性の確保に対するシンポジウム」を開催しています。

■調査研究の実施

検査機関のノウハウを生かし、業務の拡大を図るため、試験法開発研究会を設置し、検査方法の開発を行っています。また、経営問題研究会を設置し、水質管理を核として水道事業体へのホームドクター的機能を拡大するほか、海外業務の展開の可能性を検討しています。

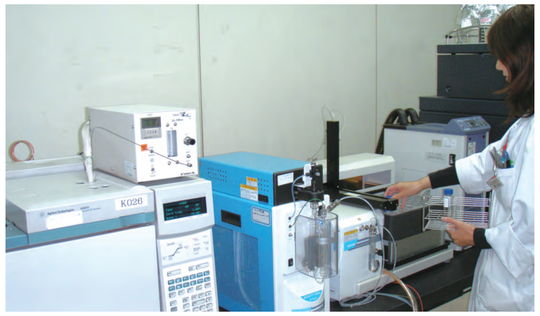
■簡易専用水道、小規模貯水槽水道の検査率の向上等

ビルやマンションでは、貯水槽水道を経由して国民が水道水を飲んでおり、その衛生確保は登録検査機関の重要な課題です。

貯水槽水道の検査率は、簡易専用水道でも８割を下回っており、小規模貯水槽水道では、極めて低い状況にあります。給衛協では、検査率を向上させるためには、設置者、管理者の管理へのインセンティブを高めることが必要と考え、格付け制度として「ランキング表示制度」を実施しています。これは、法定検査合格の管理適合施設（Ａマーク認証施設）、防災対策等の上乗せ項目への適合を示す管理優良施設（Ｓマーク認証施設）の２つの格付けを行っており、対外的にアピールすることによりビルやマンションの資産価値を高めることを通じて、設置者、管理者への管理へのインセンティブを高めることができます。これにより検査率の向上と登録検査機関の業務拡大を図ることとしています。

昨年度からは、災害時の応急給水の水源としての貯水槽水道の役割の拡大の在り方、検査率の向上を図るための所在地情報の一元化や普及啓発の在り方について厚生労働科学研究を行っています。この研究では、地方自治体の指導指針を作成し、検査率の向上を図るとともに、貯水槽水道や飲用井戸の管理の在り方、防災措置の整備などを促進することとしています。

▲水質検査に占める登録検査機関の割合は８割を占める▼



今年10月に京都で開催した「20条検査・34条検査から見た飲料水の安全安心に関するシンポジウム」

20条機関、34条機関それぞれを対象にした各種研修会も

貯水槽水道の検査率向上は重要な課題

貯水槽水道の設置者、管理者の管理へのインセンティブを高めるための「ランキング表示制度」の運営委員会

新水道ビジョンの実現に寄与する企業群

株式会社 ＮＪＳ
株式会社 寛設計事務所
栗本商事株式会社
株式会社 栗本鐵工所
コスモ工機株式会社
株式会社 新大阪エンジニアリング
株式会社 清水合金製作所
シンク・エンジニアリング株式会社
新日本設計株式会社（長野市）
株式会社 タブチ
千代田工業株式会社
株式会社 東京設計事務所
東洋濾水機株式会社
株式会社 日水コン
日本ジッコウ株式会社
日本水工設計株式会社
幡豆工業株式会社
前澤給装工業株式会社

以上の企業各社のご協賛によりキャンペーン企画を進めています。
―五十音順―